
プリン体の秘密

ラックラック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリン体の秘密

【Nコード】

N6566H

【作者名】

ラックラック

【あらすじ】

街はずれに佇む白い屋敷。そこに住む白いじいさん。彼はすべての物事に答えを見出す天才。訊けば必ず返ってくる。悩む必要はない。全て訊いてしまえばいい、とは言え大概ハズレですけど。そんないい加減なじいさん。プラス、変幻自在のお笑い職人。そして、そのじいさんの甥っ子が主人公。この三人を中心に繰り広げる、呆れ返るほどの壮絶なるバカ話。

プロローグ

街外れに在る白いお屋敷、知り合いの伯父が住んでいる。
還暦、未だ独り者。

かわいそうな限りである。まあ、理由は分かっているのだが。
理由と言うのも、とても変わり者で、人嫌い。あと、癩癩持ちで
神経質、普段過ごす中で関わりたくないような人種。

当然のように、伯父には友人知人と呼べる存在がない。
よく今まで生きてこれたな、なんて思えたりする。

でも、僕はこの伯父の家へほぼ毎日のように通っている。学校帰
り、帰宅部の僕は特にすることも無く、暇つぶしと言う名目で屋敷
へと足を運ぶ。

理由は、面白いからだ。

いや何、別に僕もこの伯父のように友がない訳では無い。
クラスでは確かに影は薄い方だが、自分と同等レベルの友人はい
る。やや、キモイと呼ばれる部類も混じっているが、僕は違う、と
思う。

それより、そんな事は、僕の事はどうだっていいんだ。伯父の話
に戻ろう。

伯父は、研究者、らしい。
自称だ。

しかも何について調べているのかは全く教えてくれない。怪しい。
だが僕自身知りたいとも思わないので、詮索はしないで置いてる。
他だと、夏が苦手らしい。

猫アレルギー。

いつも着てる白衣が灰色に変色している。

犬は好きらしい。

ハムスターを四匹ほど飼ってる。

頭は100パーセントの白髪、天然パーマで縮れて軽いアフロに

見える。

……まだ色々特徴や生態があるけど、その内に自然と嫌でも知っていくだろう。

とりあえず、僕と伯父のやり取りを見て、何故、わざわざ毎日のように訪れていくのか解ってもらいたい。

伯父の家に通う為には、必ず必要なものがある。

それは、話題、である。

話題は何でもいい。最近のニュース、流行。はたまた、日頃の悩みでもいい……が、確実に解決しないので期待はない。

今日の話題は、プリン体、である。

ちなみに僕は既に、プリン体について簡単には知っている。

確か、ビールに含まれている体が太る成分。

少し前までは、プリン体99パーセントカットとか言って世間でも話題になった記憶がある。これで大体は合っているはず。

知ってて聞く。

悪気は、少しある。

逆に言えば大分ない。

言うなれば、からかい。

まあ、面白いからいいんだよ。本人は気付いてないし。

さて、今、僕は伯父の家の前に立っている。

両隣は何故か空地、跨いで家が建つ。確実に伯父を避けているとしか思えない。

鉄の門は錆付いていて脆い。

白い屋敷は一人暮らしにしてはやらでかい。どうやって手に入れたのか、いずれ聞いてみたいものだ。

屋敷の外壁は門に比べると綺麗だ。

少しは所々に汚れは見えるが、かなりマシじゃないか？

でも何故か白衣は変色している。一々理不尽だな。

そんな毎回思うような事を考えつつ門を潜る。
すぐ先、屋敷の扉がある。

木製。でかい。2メートルは軽く超えるくらいの高さはあるそう
だ。

手が届くくらいの距離まで近づいた所、軽く扉をノックする。

この時点ではいつも反応がない。今日もない。

待たず、扉を押し、開けてみる。鍵は掛かってない。これも既に
承知。

中は薄暗く、光が差している部分しか様子が分からない。気味悪
くて、今でも慣れない。

この間なんか、見たこと無い虫が出てきた。故に、正直怖い。

キィィ……と音を立てる扉を止め、顔だけ入れる。そして伯父を
呼んでみる。

一度呼んだ後でも反応はない。

もう一度呼ぶも、物音一つもせず、気配すら感じられない。留守
なのだろうか？

扉を、より開けてみる。また、キィィ……と音が鳴る。他には音
がしない。

扉の取っ手を持ったまま屋敷の中へ。同時、伯父を呼ぶ。

一步一步、恐る恐る中へ踏み込んでいく。

ゴツツ……。

開く途中の扉に手応えを感じた。まだ半分ほどまでしか開ききつ
ていない。何かが邪魔しているようだ。

その方を扉越しに、頭だけ出して覗いてみる。白っぽい何かが見
えた。

一度、扉を少し戻す。

……僕は気付いてしまった。扉の空く軌道の先に、居る。

一時、手を放し、どのように気付かせるか考える。

やはり、伯父に普通は似合わない。面白い展開を狙おう、となる
と狙うは一撃。

再び取っ手を握る。今度は力加減を上げ、握る。

鼻から深く空気を吸い込み、伯父と叫ぶ。同時に全力で開ける。きちんと全開になるように開ける。

ゴツツ。

「痛い！」

当然、何かに当たる、と言うよりぶつける。汚いおっさんの声も聞こえた。

気付かないふりをして、何度も開け閉めを繰り返す。開ける度に当たる。同じ回数分、声も聞こえる。

「これい！一太、やめんか！」

僕の名を呼ばれ、手を止める。伯父は起き上がり僕を睨みつける。目が合い、すかさず惚けてみせる。あれ、居たんだ、気づかなかった、とも言った。

「気づかない、ほう、気づかない。当然だ、姿を隠していたんだからのお」

意味が分からない為、流した。

一先ず無理矢理に要件を述べてみる。

「ん、今日も聞きたい事があるか」

頭を擦り、薄暗い奥へと歩いて行く。僕はそれに付いて行く。

招く訳でも無い、自然に毎回同じ部屋、伯父曰く、研究室で話をする。

奥へと延びる通路、その一番奥の扉まで歩く。ここだけ妙なオーラが発せられているような気がする。もう慣れたけど。

研究室の扉、伯父が開けて先に中へ入って行く。カランカランとも音が鳴る。

扉に付けてある木の表札、糸でつるされている為、揺れてぶつかる。なので音が鳴る。

表札には、まい・けんきゅうしつ、と、伯父が書いたと思われる白い文字が読める。右に文字がより過ぎ、つ、が小さく右下の隅へ追いやられている。

……どうでもいいか。

中に入ると伯父は顔を洗っていた。奥に水道があり、そこで顔を洗う。

僕はいつも座る場所へ着く。部屋の真ん中に大きな長いテーブルがあり、手前と奥に椅子が一つ右側左側に二つずつ。僕は手前に座る場合が多い。

テーブル、椅子、共に黒くデザインも意外にスタイリッシュ。以外に伯父はセンスが良い。ただ薬品臭く、薄汚れたこの部屋には場違いでは、と思えるが。

座ってすぐ、伯父が白いタオルで顔を拭き、こっちへやってくる。僕から見て左前に座る。

「さあ、今回は、何かね」

話が始まる。いざ聞いてみようか、プリン体について。

「ほう、プリン体、か……。これはまず、三つに分ける必要があるな」

……何を？

もう既に、僕の予測では付いていけそうにないな。

・プリン体（前書き）

・この回について作者から一言
「ゲダゲダです」

・プリン体

カララ……と鳴る音。

伯父の後ろから聞こえてくる。

ハムスターのカゴだ。一匹が後ろで、ひたすら駆けている。横に並ぶ、他の三匹は既にクタバっている。

僕は今、伯父の研究室にて暇している。

ただイスに座るだけ。

テーブルを跨いで、向かいに伯父がアタマ抱えて座る。

恐らく、僕が問いだした、プリン体、について考えているのだらう。

いや、そもそも本当に伯父はプリン体を知らないのか？

知らなくとも、一度くらいは聞いた事がありそうなものだが。

しかし、こうして目の前で考え込んでいる以上、全く知らないのであらう、と、思われる。

暫くこの状態が続く以上、僕は暇である。

すべき事は何もない。

ボーっとしていれば、ふと、今日、学校で出された課題を思い出す。

……する気になれない。

カバンに手を掛けそうになるが、気だるさ故に、止める。

また元に戻る。

伯父の後ろでは、相変わらず、ハムスターが一匹、快走している。

その音だけが室内に響き、やけに気になる。

不意に突然、伯父が立ちあがる。

ハムスターへの視線を遮られた、なので仕方なく伯父を見る。

用件も聞いてみる、これも仕方なく。

「うむ、ちょっと調べる為にのう」

プリン体について、なのだろうか。一応、聞く。

「そうじゃ。正確に言えば、プ、が何か」

……………ぷ？

思わず口元が緩む。

頭の中に無数の疑問が飛び交う。

ぷ、とは、やっぱりプリン体の、プ？

そもそも、そのままプリン体を調べればいいじゃないのか？

いや、ホントにプリン体を知らないのか？聞いたことも？

プって辞典に載ってるのか？

他の二つはどう分けた訳だ？

この伯父は、アホか？

……………これぐらいにしておこう。

取りあえず、別室へ向かう伯父を見送り、僕はジッと部屋で待つ。

未だにハムスターが一匹、走り続けている……………。

走っていたハムスターがバテてグッタリしてずいぶん経った頃、

プ、について調べていた伯父が部屋に戻って来る。

廊下から足音が聞こえるので、多分間違いない。

僕の中では退屈が頂点にまで達し、眠気に襲われ、ずっとテーブルに突っ伏していた。

正直、プリン体、どうでも良くなっていた。

研究室のドアが開く。伯父が再登場。

「一太、待たせたなあ」

その声に反応するのさえ面倒に感じたが、しびしび顔を起す。

あくびも一発かまし、両腕を上げて背伸び。

完全に寝起き。

伯父はイスに座る前に、持ってきた資料をテーブルに、ドサッと置いた。

何かの事典か、一つ一つが分厚く、全部にで四冊あった。

プリン体に関するモノなのだろうか？

結構、重労働だったのだろうか、伯父は解放された腕をブラブラさせる。

動きが、少し気色悪い。

多分、妙にニヤけているからだろう。

そのニヤけ顔でブラブラする白いモジヤな伯父が、ついにプリン体に付いて語り出す。

「わしは最初のう、プリっとするリンちゃんの体だと思ったんじやが」

プリっとするリンちゃんの体、略してプリン体。

このエロジジイ……、そんな訳ないだろうが。

と、言うか、そもそもリンちゃんって誰だよ。

「ん、リンちゃんか？リンちゃんはこのう、わしの行きつけのチャイナパプで一番のお気に入りの子じや」

話は逸れ、リンちゃんについて語り出した。

「19のオナゴでのう、これがまた可愛いなの。あのポツチャリした体がまたそられるんじや」

涎が出てるぞジジイ。だが、構わず喋る。

「特にムツチリとしたあのおしりが、触り心地が、たまらん」

知るか、つーか、いい加減やめろ。

完全に萎えた僕は結論を急がせる。

「何、プリン体はそういう意味なのか、と？ムハッ、これは単なる、じよおくじや、じよおく」

未だ吹き出る伯父に、やや苛立つ。歪な発音にも気になる。

頭に血が上るのを沸々と感じるが、何とか辛抱して本題に戻す。

まずはどうやって三つに分けたのか、と言う事。

聞いてみた。

「“ぶ”と“りん”と“たい”じや」

……確かに最初のアレもうまく三つで略されてるよな。

ただ、りん、が体とよく解釈出来たと思える。

ホントは知ってるんじゃないのか。

「たい？いやいや、ホントのところはのう、プリツとしたリンちゃん
の体毛なのだろう、なーんて閃いたんじゃが。なにせフェチ過ぎ
るしのう……、じゃから毛の部分を取り、体だけを採用したんじゃ、
ほっほっほ」

口を窄めて笑う姿を見ると、殴りたくなる衝動に駆られる。

……我慢だ。

「高校生のお主には、ちと早いから気にせんでもよいぞ。ちゃーん
と別の答えを用意しておく」

高校生とかどうとかの問題では無く、それはただ単に伯父が変態
なだけでは、と思える。

世の男性方に、そんな偏った発想は持ってない、はず。

でも、僕の中でリンちゃんに興味が沸いてしまうのも事実で。

「さてさて、一太の気になる“ぷりんたい”についてじゃが、一番
最初にピンと来たのが、りん、じゃ。化学で習ったじやろう、原子
番号15のリン。マッチの先っちょに付いたあの赤い部分、あれじ
やな」

ああ……そう言えばそんなのあったな。

一応だが覚えている、が、何に使われているとかになると知らな
い。

伯父はリンだけなら解るんだな。

ただ伯父よ、もう既に違う。

とは思えど頷いてみせる、僕。

「リンを基軸として考えて、後の二つの“ぷ”と“たい”じゃ。ぷ、
とは何ぞや？考えたワシは、何かの単語の頭文字か、それとも、ぷ、
単体で表すものなのか。このどちらかで意味を探る事にした」

どんどん外れていくぞ。

ぷ、単体で表すものなんか無いだろ。

強いて言うなら、屁じゃない？

それで空飛ぶ超人とか、伯父が知る訳ないか。

前者で考えるしか、絶対ないと思えるけど。

「ぶ、ぶ、ぶ……」

目を瞑り腕を組む伯父。多分考える仕草。

もう答えを用意してるなら変な演技要らないんだけど。

「何回も頭の中で繰り返す内、またも閃いた」
何を。

「リンをアルファベットで表すと、一太、知って居るか？」

それぐらい知ってる、Pだ。

当然、答える。

……まさか。

「そう、Pじゃ。そして今疑問に思ってるのは、ぶ。ぴりんじゃ読みにくいから、濁らせてぶりん。完璧、なんだか旨そうじゃのう」
知るか。

だったら、ぶ、要らないし。リンだけで良いじゃないか。

「後は“たい”だけじゃ」

含み笑いを醸す。構わず話を進めていくな。

心内かなり呆れているが、これは相変わらず。

今日はあまり面白い答えを期待できそうにない。

“たい”で考えられるのは色々あるが、イマイチだろうな。

「たい。リン大好き人間の集まり、どう？」

いや、聞くなよ。

プリン隊。どう考えても無理あるし、不自然にもほどあるだろ。

これには堪え切れず、ツッコミを返してしまった。

「いやいやいや、リンがの、かわゆるてかわゆるて仕方なくて、大体何故にPなんじゃ？きつとプリチーのPなんじゃよ！」

絶対、他に由来あるだろ。

リンが可愛いってどういう神経してんだソレ。

「にわか程度しか知らんもんでそんな事言えるのじゃ。リンを知ってしまっただが最後、もうアナタはリンの虜」

意味わからん。

「何、解らんか！？リンはカラフルなんじゃぞ！リーダーの赤、ミステリアスな紫、クールな黒、キレイやすい白に、毒々しい黄色、それと繊細な紅。ほれ、想像しただけでウツトリじゃ」

毒々しい黄色ってどう何だ？さり気なく赤二つあるし。

「バカ者！赤と紅じゃ！！」

変わんねえ！

「まあ、確かに成分的には変わりはないがのう」

あっさり認める。

「だけど、ここまでリンを知るとなると、もしかして伯父は……？聞いてみた。」

「ん、ワシがプリン隊と？んなアホな！」

だったらそこまで語るなよ、と思う限り。

ああ、何だかようやく冷静になれた。

さっきは僕自身、かなり声を張って返していたので相当興奮していた、かなり疲れた。

そのやり取りで目覚めたハムスターが二匹ほど、また走りだしている。

「どうじゃー太、プリン隊について解って満足か？」

確信的に違うと思うけど、微妙な感じに、満足と返し、伯父は高笑いをする。

「ただワシとしては、やっぱりムッチリとしたリンちゃんのおしりじゃ」

脱線してるのは目に見えてわかるが、敢えて触れずに僕は一言お礼を言っつて、この屋敷を出て行った。

気がつきゃ夜だ、学校では使えないネタだな。

・プリン体（後書き）

・ 本当のプリン体の意味についてくわしく知りたい方はご自身でお調べになって下さい。

・愛（前書き）

・この回について作者から一言
「彼（伯父）は勇者ですね」

・愛

前回、下ネタに走った伯父。

こちらの不注意もあったとは思いますが、さすがにアレはふざけていたと思う。

なので今回は真面目なお題を伯父に聞いてみる事にした。
愛。

正直、心の中で言っただけなのだけど、少し恥ずかしい。

まあ、伯父は意味ぐらいは知っているだろう。

ただ、ただ独り身の伯父にどんな思いがあるのか非常に気になるところ。

期待はしてない。

僕自身は、考えたことも無い。考えるまでの人生を生きてませんから。

その点、伯父は僕に比べて約半世紀分生きてるんですから、ちょっとしたはあるでしょ。それなりのもんが。

そんな訳で、もう聞いてます。

「あい？あ〜〜い？」アゴをしゃくれて首を傾げる。

お、困ったな、伯父。初っ端からふざけ出した。

もしかしたら、ぺらっぺらっぺらじゃないか？

「あ〜、手をチョップにしてのう」「手をチョップにして？」

「肘を肩の高さまで上げてのう」「肩の高さまで？」

「手を首元に持ってきて」「

アイーン。こら。

「……ダメかい？」

ダメだろ。

流石に、愛♡アイーン、で納得できる訳がない。

伯父は、テーブル中央に置かれているミカンを手を取った。

「一太も……もうそんな年頃か」

皮を剥いて、一切れ千切って口に入れる。

「甘いぞ、一太もどうだ？」

どうだ、と言われれば貰うしかない。断る理由はない。

僕も伯父と同じようにしてミカンを口に入れる。

酸味が程良く、甘い。

「愛、だったな。ワシにもなあ……あつたんじゃよ。一太のような頃がのう」

空気が、いつもと違う。真面目な。

伯父は過去を振り返るように少し上向き、僕はいつになく神妙な面持ちの伯父の顔を見ながらもう一切れ食べる。甘い。

「あの頃は、知識を頭の中叩きこむのに必死じゃった。学校に居る間の大半は勉強、友と呼べる者はもう居らんくなっておった」

伯父の若かりし頃か、イメージ通りである。

「ひたすら机に向い、呟き、鉛筆を走らせ、微笑んでは妄想を繰り返してのう……」

ちよつと待った、終わりの部分はとてもキモイぞ？

真剣な雰囲気から突然に可笑しな方向へ向かいだす伯父に、僕は間髪入れずにツッコんだ。

「おお、スマンスマン。妄想と言う表現は宜しくないか、想像で良いか？」

……多分、良くない。妄想よりはマシだが、間違い無く方向としては同じだ。柔らかくなっただけだ。

取りあえず、もうどうでも良くなったので次に進んでもらう。

「ワシはな、典型的なガリ勉少年じゃった訳じゃ」

気になる一つ出来たので、聞いてみた。

「容姿？おお格好の事か。どう、と言われてもなあ……」

髪型。

「髪型は、もちろん7：3じゃ」
何を以てしてももちろんなのか。

……眼鏡。

「黒縁じゃ。ただのう、人から良くそれで良く前が見えるね、と言われたなあ」

もしかすると、牛乳瓶の底、みたいなの？

「んん、何故ワシが牛乳瓶と呼ばれていたことを知って居るのじゃ？」

あ、はい、もう結構です。

完璧すぎるほどのガリ勉君だったみたいだ。

昔のコントの領域だよ……。

「ふむ、ただな。そんなワシでも、恋、はしたんじゃ」

少しニヤける伯父。

「クラスのマドンナ、ミヨちゃんじゃ」

上向いて妄想に浸る伯父。強ち、ホントに机に向け妄想していたのかもしれない。ひたすらに。

だとすると、不真面目過ぎるだろ。

「スラっとして、長い髪を靡かせ、顔立ちも良くて、ワシでも見惚れるほど美しかった」

その人を牛乳瓶越しに見て、妄想してたんだろ。エロ勉め。

「な、何言うか！ちよっとイチャイチャするのを考えたまで、今よりマジじゃ！」

今よりってどうなんだよ、それ。

自覚あるんだったら、もっとマシな事言えってのさ。

「コホン、兎に角じゃ。ある日、ワシはミヨちゃんに告白する事を決め、愛について詩を書くことを決めた」

唐突すぎないか、事の成り行きがとても気になるんだけど。

「そんなもん無いわ、新しいクラスなって三日目じゃからのう」
早っ。

「つーか、ミヨちゃんさん、新学期早々にこんなガリ勉に告白なんて不幸過ぎるな。」

伯父もさ、もう少し手順を踏んで……いや、それより愛について詩を書く、そんな発想良く出てきたな。

「ミヨちゃんは、確か十三人目じゃからのう。もうそれくらいしか方法は無かったんじゃ」

多い、多すぎる、十人超える時点でかなりウザったい。諦めるよ。

「加速するワシのハートは、誰も止められやしないぜ」

全ツ然かつこよくないです。さり気の前髪を触るのも止める。

診断の結果、かなり重症。今現在も尚、進行中。

知っていた事実を改めて聞き、当初聞いたと思う、愛についてはどうしても良くなりつつあった。

飽きてきたんだけど、さらりと聞こうか。続き。

「そして運命の日。下駄箱に入れた手紙により、ワシはミヨちゃんを校舎裏へ成功する。指定した時間より一時間早くから待機、ターゲットを来るのを待つ。汗ばむ右手には取引の為の書類を握りしめ、大体十分遅れで相手は到着。目の前に佇むターゲットにワシは、失禁しそうになる。だが、以前に起こしてしまった過ちを繰り返すほど馬鹿じゃない。愛の力を示すためにワシは必死に堪え、握りしめたせいでクシャクシャとなった、それと若干湿り気を帯びた約束の書類をターゲットに手渡そうとした瞬間に手を払われてワシの愛の詩は飛ばされ、無理、と叫ばれたのさ。……今思えば、あれほど難しかったミッションは無い、のう」

僕は予め手に持っていたスリッパでおもつきし伯父の頭にぶっ叩いた。爽やかな音が響く。

ちなみにこのスリッパはついさっきまで僕が履いていたものだ。

「oh...」

アメリカンに、軽く両手を挙げてリアクションする。

小刻みに横揺れする顔も妙に腹立たしい。

「愛の詩、聞かない？」

伯父の愛を聞く気力は、今の僕には残されていない。
当然断る。

先ほどの話、ツッコむべき箇所がごまんとあったと思うがそれすらももう振り返りたくない。

いずれは聞いておこう、頭からケツまではじゃなくていいので今までやってしまった手立てくらいは。

今回のテーマには触れていそうで触れていないが、解った事がある。

伯父は何故結婚しないか。

いや、結婚できないか、が。

その姿では愛は語らせてはいけない、と僕はつくづく痛感した。

そして最後に、僕にも伯父と同じような血が流れている。

それに気付いてしまった帰り道、たまらなく泣きそうになった。

・愛（後書き）

・今回はテーマを射ていませんが、これからもきつと同じような事が続きます。

・ユーフォー（前書き）

・この回について作者からの一言
「未知との遭遇です」

・ユーフォー

昨日テレビでUFOや怪奇現象などの、世にはあり得ない出来事についての特集が放送していた。

学校でも、それを見ていた人が何人が居り、今日一日の話題のほとんどだった。

信じる人、信じない人、僕が聞いた人たちの割合は大体8：2くらい。

僕は、信じる側だ。

柄にもなく僕は物語という部類のモノが好きだ。だって夢が在っていいじゃん。

特に信じているのが地球以外にすむ、人、の存在。

よく映画とかで出てくるあんな銀色の宇宙人は信じやしないけど、宇宙のどこかに地球と似たような星が在るって信じたい。

宇宙って結構広いんだしさ、三つぐらいは在ってもおかしくないでしょ。

さて、と。

本題に移るは、これに関連しての、ユーフォーです。

UFOを伯父に聞いてみる、まず気になる疑問が一つあるけど。

以前のように、また変な略し方した言葉に解釈されたらどうしようか。修正するべきか？

ま、成るように成るかな。

「ほう、また聞きたい事があるのか一太よ。何でも言ってみよ」

いつものように伯父の研究室にある古びた椅子に腰掛け、今回は林檎がテーブルに在ったので一個まるごと頂く。

ただ少し、研究室にある異変が起こっている事に気付き、まずそれについて聞いて見た。

「ん、ワシのハムスターは寢室じゃ。昨日にちよいと臭う実験をし

てのう。可哀想じゃから場所を移したんじゃ。今から見に行くかい？」

見に行くほどの事でも無いので、すかさず断る。

その流れで今回の話題、UFOを問うとした。

「ほう、これじゃこれ」

言葉だけだと全く分からないだろうけど、仕草では一目瞭然。頭の後ろに手を回し、上に突き出したり引っ込ませたりを繰り返す。

昔懐かしあのアイドルユニットの唄の振りつけの一部分だ。

最近でも僕が良く見る歌番組で、昭和の頃の流行曲を特集したりしてるおかげで知っていたり。

ま、でも、それじゃあ無い。

いつも通りに一筋縄ではいかない伯父。

仕方なく、違う、と否定して置いて一区切りつける。

振り出しに戻ってもう一度聞きなおす、今度は少し具体的にモノを言う。

「ほうほう、アレじゃな。ナサ、じゃな」

またボケをかますのを想定していたが、すんなりと話を解釈してくれた。

僕はその言葉に相槌を打ち、更に話を進める様に促した。

「あの、空飛ぶ円盤や銀色タイツの人の事かな？」

銀色タイツは、ちよつと笑いを誘う。

でも強ち間違いでも無いので続けて頷く。

「一緒に住んどるぞ」

……え？

さて、早速ながら山場ですか。

以前から一人暮らしだと思ってばかりだった伯父が誰かと一緒に暮らしていたんですか。

しかも、宇宙人でカミングアウトですか。どうなんですか、それ。ただ、この時の僕は自然と冷静であった。

慌ててツツコむ事をせず、落ち着いた頭で考えればどう解釈しようが嘘丸出しである。

わかっている、慣れたものさ。

話を広げよう。

クールな僕は丁寧かつ慎重に言ってみた。

あれ、伯父さんは独りではありませんでしたか、と。

ココで終わる伯父では無い、期待に応えて見せてくれ。

「独りと言つとるとじゃな、女の子を連れ込みやすいでな、ふお、ふお、ふお」

……まあ、相手が人間であれば通用すると思うけど。

でも同居相手が宇宙人であれば、それをネタにしたほうがよっぽど……いや、その前に信じないか。ダメだ。

一時、僕の思考は停止。

何処から追及すればいいか分からない。

口に出す言葉に悩む僕、そんな状態を脱する前に伯父は更なる追いつ打ちを掛ける。

「呼ぶ？」

な何を？

主語が無い唐突な問いかけに僕は理解出来ない。

呼ぶ？ハムスター？

頭に戻り、宇宙人関係なくハムスター？

流石にそんな訳では無いだろうな。いくら伯父だからと言って話の流れすら分からない人では無い。

じゃあ、女の子？

伯父だとかかなり有り得そうだけど、違うか。ほんのりとそう願ってもいる僕ではあるが、ね。

ふう……やっぱ、宇宙人、出すのかなあ。

相変わらず、期待できない。

そりゃあ宇宙人は信じたいけど、ココにゃあ居ないでしょうよ。居るのならもっと別の方法で事を知るだろうよ。

……何をか、聞くか。

「何をつて決まっつとる、うちゅーじん、じゃよ」

でしょうね。やっぱり、でしょうね。

主語を確認し再び思う。

期待できねえ……。

伯父は、あまりにも怪しい何かを連れてくる為に研究室を出た。敢えて宇宙人とは言いません。絶対違いますから。

僕は一人残され、伯父と話していた時と同じよう座ったままの状態。

最初の時に手に取った林檎を、ココでようやく一つかじってみる。普段、家で食べるモノより断然甘い。伯父は一体何処で手に入れているのだろうか。

軽い感じで考えて見て、無難なところは送られてきたが最も有力でも、だとすると、誰からだろう。

青森辺りに知り合いの人でも居るのかな。以外に顔が広いな。

林檎は芯の部分だけとなり、僕には食べそうにない姿となる。

美味しく頂きました、ご馳走さん。

ちよつとした満足感の中、歯茎から血が出なくて良かった、何てふと思ったり。

……どうでもいいか。

伯父は未だにやってこない。恐らく、宇宙人の準備に時間が掛かっているのだろう。

どんなの出てくるか楽しみでもあるので帰る気も全く起きない。とは言え暇で有るのに変わりはない、取りあえずごみ箱を探そう。生ゴミと化した林檎を処分しないと、しないとだね、少し困る。

……なので辺りを見渡す。

結構広い研究室、棚には薬品みたいなモノが並べてあったり、分厚い本が並べてあったりと、何となく、らしい雰囲気漂っている。

あのフラスコに入ってるオレンジ色の液体、実はジュースじゃないの？

他のモノも色とりどりで、容れ物こそ理科っぽいけど中身は胡散臭い。

気になった僕は席を立ち、薬品っぽい何かが陳列されている棚に向かう。ちなみに生ゴミ持ったまんま。

棚は横から引いて開けるタイプ、左から右へとスライドさせる。半開きの状態で気になる液体はもう取り出せる状態なので全開にはしないで置いて、さっさと取り出してすぐ閉める。

少し冷気が、白くなって出てきた。顔に当たり冷やりと感じる。液体の容器も冷たい。この棚、どうやら冷蔵庫のようだ。でかいな。

頻繁にココには訪ねていたけど、今ようやくこの棚が冷蔵庫と知ったな。

珍しいので暫く眺めていれば、足元にごみ箱が在る事に気付いた。チャンスと思い、すかさず生ゴミを投げ捨てる。

その時に当然のごとく中身を見るのだが、空では無かった。黄色い金属製の箱が一つ入っている。

あ、しまった分別してない、が、伯父の家だしいいか。

……気になる。戻ろうとして少し思った。

そのままにして、またイスに座っていても良かったのだけど、黄色の箱の正体が、気になる。

しばらく僕は生ゴミと箱を眺めていた。

怪しい伯父のゴミだ、やばいモノに違いない、と、思えど結局は好奇心がその警戒心を上回り、つい手に取ってしまった。

形は円、プラスチックの蓋状のものが被さっている。

カーブした側面にはパッケージが描かれている。

この時点で市販のものだと判り、少し安心した。名前も書かれている。

その箱の正体は、バルウサン。

ゴキブリを退治する為の煙幕タイプの殺虫剤。使用済み。

やっぱりココはゴキブリ出るんだな。湿っぽいし。

自然と棚の隙間などに目をやって出てきそうな箇所を見渡し、適当に納得。

持つてるコレは元在ったところに投げ捨てた。

さあ、やる事が無くなった。もう座ろうか。なんて思った時、右手にまだプラスチックが。

目の前に持つてくる。眺める。

……これ、固まってないか？

少し揺らして見ても波立たない中身、飲める飲めない以前の問題だな。

結局これは元の場所に戻して、スタスタと席に戻った。

また同じ場所に座る、それと同時にようやくながら伯父が帰ってくる。

少し屈んだような体勢で扉を開ける伯父、ドアノブの持つ手とは逆の手には、銀色の小人の手。

……嘘お。

どっからどう見ても宇宙人。これはグレイってやつに違いない、すげ。

「同居人のジヨニー君じゃ、中々のいけめんじゃろう？」

いや、違いが分からない。他を知らない上に男かどうかの区別も無理だろ。

知ってる前提で聞かれても答えようないし。

僕は悩みに悩み、一言も発する事すら出来ずにいた。対応無理。

ひたすら伯父と手を繋ぐジヨニーを目視し、何故か興奮してきた。今あるこの状況は非常に凄いことだ。僕は宇宙人を遭遇、いや触れられるとここに未知の存在が居る。

思った時より、気づけばもう手を伸ばしジヨニーの頭を触ろうと

していた。

指先が触れ、感触は、冷たい。鉄を触っているような感じだ。凄いい。自然と声が出た。

「あんまり乱暴にするでないぞ。彼は、でりけーと、じゃからな」
そう注意を掛ける伯父に一つ頷いて、更に今度は撫でてみる。
つるつるでひんやり、気持ちいい。

「さあこれでもう満足じゃろ。今日は終わりじゃ、さ、帰った帰った」

珍しく、伯父から家へ帰るよう催促してきた。

折角のこんな機会、滅多にないんだ。僕はこの程度には満足しない。手はまだ止めない。

「ほれ、どうしたんじゃ。用は済んだであろうにのう」
何か焦っているように見える。僕をジョニー君から遠ざけようと肩を押してくる、視線もきよるきよるとして拳動不審だ。

異様な態度、しぶしぶ離れることにした。とは言え、まだ帰るつもりは無い。

ひたすらに思いつく疑問を、ただ伯父に色々ぶつけて見たいと思う。

まず一つ、どうココに連れてきたのか。

「そおんな事はどうでもよかるう」
事実上のノーコメント。

次には、どこからやって来たのか。

「聞いてみても、言葉が通じんでのう」
なるほど、そりゃそうだ。

そんな事言われたら、伯父が答えられそうなのは、かなり限られてくるな。

これでは面白いことが聞けない。

僕は言葉につまり、しばらくはこの銀色を眺めるしかなかった。

珍しいこいつ、ここに来て妙に動きがそわそわしている気がする。僕の後ろを覗こうとする仕草が多い。

何かあったかな？と思えど無視して、また頭を撫でてやるうと手を伸ばした。

……払われた、撫でる前にゆったりとジョニーに手を手で払われた。

今まで無抵抗でたいしたアクションもしてこなかったので、正直これには驚いてしまった。

やはり最初のときより落ち着きがなくなっているのだろう。やや興奮気味にも見えてくる。

この後も奴はやたら後ろを除き見てこようとすると、というより何か狙っているような気がする。

いい加減、僕も釣られて後ろを振り返る。

「うおっ！」

後ろ見るその瞬間と同時に、伯父が犬っぽく吠えた。

後ろを確認するも間も無く、おじの声に驚いた僕は反射的のほうに顔を戻す。

何も見えない。突如、真正面が銀色に覆い尽くされる。そして真っ暗に。

顔に感じた衝撃のまま僕は後ろに倒れ、腰をついてしまう。

今、何が起きたかまったく解釈できない。

混乱している内、また視界は元に戻る。目の前には伯父が覗き込む。

「一太、大丈夫か？」

気に掛けてくる伯父に、大丈夫であることを示す。まだ動揺は少ししてるけど。

とにかく、何が起こったのかを把握しなければならぬ。

僕は、一体顔を食らったのだろうか。

冷静になりつつある心で考える、ただ後ろからボリボリと貪り食うような音がする。

その方を見る。

……食つとる。

異様な光景を僕は目にした。
宇宙人がリンゴを食つとる。

いや、もう少し正確に言うべきかな。でもオカシイ箇所が多すぎる。

一気に説明すれば……今さっきまで宇宙人と思われていたジョニーがリンゴを食っているわけだが、本来隙間があるはずなぞありえない場所、首とあごになぞの空間を生み出してその場所に自らの手を突っ込んで開けリンゴを無理やり押し込み、多分食べている。

何だよ、これ……。伯父に聞いた。

「まあ、その……こうゆうものじゃ」

……な、はずないだろ。

そろそろ誤魔化しきるのも難しいんじゃないか。

そして、やがて疑いは確信に変わる。

だってほら、もう顔取れてるし……。

妙なむなしさに包まれた僕は、大人しく自分の家へ帰ることに決めた。

一時の別れの言葉を告げても、伯父は何も言わない。

研究室にはジョニーがリンゴ食べる音だけが響いていた。

伯父の家の門の手前、ふと振り返る。

楽しかったから、ま、良しとするかな。

そして僕は一言、ポツリと呟いた。

……チンパン。

特に意味は無いさ、ただ思っただけ。

・ユーフォー（後書き）

初めてSFにチャレンジしてみました、ら、こつなっちゃいました（笑）

・リーゼント（前書き）

・この回について作者からの一言
「ああ……無駄に長い……」

・リーゼント

早速ですが、聞いてほしいお話があるんです。

今日、友人と二人で登校中に、実に珍しいものに出会ったんです。

リーゼント。

ソフトなレベルじゃありません。確実に最高峰の盛り上がりでした。しかも、真正面から話しかけられました。

逃れられません。

野田さんじゃないっすか！と、僕の視界にサイドからフレームインしつつ訪ねてくる。

僕のリアクションは、呆然。横にいる友人も同じように、呆然。いやもう野田って誰よ。考えても答えなぞ出るわけ無い、そもそもこのリーゼント兄ちゃんを知らない。

戸惑う僕ら二人に、もう一人横にいた兄ちゃんが聞いてきた。

あれ、野田さんじゃないですか？おはようございます。

お、少し丁寧になった。挨拶までされた。でも説明しようの無いぐらい地味だったのであまり気にしなかった、と言うよりも、もう記憶にも無い。片方はいなかったことで良いです。

さて、どうでもいい補足はよしとして、聞かれたからにはきちんと応答しないといけない。マナーってやつです。

僕は友人と顔を見合わせた後、お前野田か？俺、野田じゃない。みたいな感じでアイコンタクトで会話。そして軽く頷き合い、リーゼントに向けて控えめ気味に、違います、と言ってあげました。

結構、相手は以外にもいい人っぽく、腰を低くしてペコペコとお辞儀を繰り返す、すいません、と何度も謝りながら去っていった。人間違いされるといふのはこの時が人生初、しかも超個性的な人だった。僕はちよつとした感動を覚える。

しかし今おもえば感動より疑問に思うべきであった、ここもつと追求すべきだったのでは若干後悔している。

学校に着くまでの間は友人に何度も、野田さくん、と冷やかされたものだが重々考えられるような当然のものだったので共に笑う。

いつも彼に思う、普通の友人であるな。

詰まらない風にも意味は取れるが僕も普通であることを再認識できるいい友人だ。あの伯父を持つ故、ありがたい限り。いや、あれは関係ないか。

はいさて、何故僕がこんな話をしたかと言うと友人自慢、では当然無い。

最大の疑問であるリーゼントについてだ。

あの天然きね……天然ではないけど既に絶滅したと僕の中では決め込んでいた。だけと出た。

あの髪型の良さは、一切わからない。

友人は、ありゃビーバツプ級だなおい、と言っていたものの、残念ながら我知らず。僕には、兎も角すごい、と解釈しておき、適当にスルー。

理解なんかしなくていい、これこそ伯父に聞こうじゃないか。

学校での時間もたらだら過ぎ去り只今下校中、友人は僕と違って部活をきちんとしてる為、共に帰ることは無い。

ま、一人ですわ。

もしかしたら、登校の時と同じようにやつが登場するかも、と思っていたが、出てこなかった。

今の今まで見たこと無いのにそう何度も出現するわけも無いかと、思えど少し期待もあるので、キョロキョロと周りを気にしながら伯父の家へ向かう。

道を歩き、今はもう伯父の家の門の前。……そこに珍しく人が立っている。

しかも女の子だ、若い。でも僕よりは年上かな。カジュアルな服装から見てもどうやら大学生っぽい。

門を背にして立っているの、誰かを待っている様子だと思える。リーゼントが出ないにしろ、これまた珍しい光景。今日は珍現象に出会う日なんだと心の中で呟いてみると、妙な納得感がして一人で頷いてしまった。

近づくにつれ、彼女の様子が徐々に見えてくる。

B4サイズの茶封筒を両手に大事そうに抱えて、斜め45度に視線を向け、日が沈んだ、かろうじて雲の合い間から星が見える夜空を眺めていた。

ポニーテールに長い黒髪をまとめているところ、快活な雰囲気がある。

……あれ、何を考えてるんだ僕は。気がついたら絶妙な距離感で立ち止まってるし。

どのような経緯でこの人が居ようと僕には関係ないじゃないか。

僕は前を通り過ぎて、門を開けようと取っ手に手をかける。

その時、不意にも彼女の方へ顔を向けてしまい目が合ってしまった。仕方なく反射的に会釈をする。

向こうもきちんと返してくれ、どうも、と声も発し応えくれた。

ただ、再び空を眺めるので、多分関係ない人のようだ。

普通の住宅街の路地であるので、いくら大きい伯父の家かと言って待ち合わせには不向きのような気がするけど。

……どうでもいいか。

他人なんだし構わず進むとした。

中に入ると、円状のエントランスの一階には伯父は居なかった。

吹き抜けとなつている二階の通路に伯父の姿がある。奥側には本

棚が並び、一冊一冊探している様子だ。

ノックも何もせずに無断で入ってきた僕には一切気付かない。

隅にあるクラシックなテーブルにイス二つ、簡単な待合所みたいなトコに、僕は伯父が気付くまでイスに座り、滑稽な伯父を観察することにした。

「おゝあった、これじゃこれ」

どうやら目的の品が見つかったようだ。

一冊の分厚い本を手に無邪気に笑う伯父は、見つけたや否や駆け足で入り口付近の階段を下り、ラスト一段で躓いて、足を引き摺り

ながら外へ出て行った。
運動不足だな、伯父。

……ん、それよりももしかして、さっきの女の人が待っていた理由って、あれか？

へえ……。

よしちょっと、この天才的頭脳を使って推測を並べてみようじゃないか。

まずはあの女の人が持っていた茶封筒だ。

あの人が大学生なら、多分何かのレポートってやつだ。

何についてかは見当もつかないけど、伯父が関わっているのは確かだろう。そして今ちょっと、ほんのちょっとだけ僕が不機嫌なのも確かだろう。

でだ。

彼女が途中経過としてわざわざ伯父の家まで赴き、あの野郎は、アカン、とか言ってケチつけたに違いない。

その後は、勉強が足りんとか何とかで、2時間くらい待たせた拳句、適当にあった本を渡したんだろう。

あのいい加減伯父の事だ、間違いない。

「お〜い、一太〜。居るのか〜。居るんなら返事くらいしんか〜」

推測中に、思いのほか早く伯父が帰ってきた模様。

別に僕は隠れている訳でもなく、普通に肘着いて寛いでいるだけだったので一目で見つかった。

目が合い、真っ先にこちらへ歩み寄ってくる、が、後ろにもう一人の姿も見える。

すぐわかる、さっきの女の人だ。
ゆっくり歩いてきて、暗くて良くは判らないが何となく笑って
いるように見える。

「これ、ポーっとしんでちっとは返事せい！」

気がつきや目の前に居る、奴。

どうもほかって置くのは無理っぽいので、さらっと言い訳で述べ
る。

伯父ん家の、最高の寛ぎ空間に浸りたくって、つい勝手に入っちゃった。なんちゃってね。

「ほう、そうか。それは仕方ないのう」

こんなへっぽこな訳で納得してくれるのが伯父の良い所だ。

「あの教授、そこで認めるのも如何なものかと……」

おっと、普段ない第三者からの真面目なツッコミが入った。

ん……教授、か。

今ので二人の関係性がわかった。

「何だね、君にはモダンの素晴らしさがわからないのかね！」
うわ、キレた。

「え、あ、すいません……。そう言う訳では……」

このやり取り、あまりにも不自然で間違いなのは歴然なのだが、
どうも口を挟みにくいな。

まずもって、伯父が人と話している姿を見るのが珍しい。

彼女が頭を下げるのも、意味がよくわからない。

単位を取る為には、アホな言うことにも聞き入れなきゃならんのか。

怒る伯父を理解する余地なぞある訳ないので、無視だ。

「ふう……まあよい。それより一太、今日も用があつてきたのだらう、言つてごらんよ。まさか本当に寛ぎに来た訳ではなかるうに」
僕に切り替えてきた伯父。

さあ、ようやく本題に入る絶好のチャンス。

だが、妙に自分の心の中で抵抗が生じるのは何故だらう、言いつらい……。

伯父だけなら兎も角、他人を入れてリーゼントについて教えて、とは言えないだろ。ふざけてるにも程がある。

けど今、僕は完全に注目的。相手二人の視線が刺さり、そして凍りつく。

耐え兼ねそうになり一瞬言いかけたのだが、寸前で抑え、機転を利かせて話を変えるべく思考する。

……この人を帰すのはどうだろうか、それだけでもかなり気が楽になる。取り合えず聞いてみた。

「ん、おう、そうじゃな。用が済んだのなら君は帰ってもよいぞ」

お、部屋中央にかかる壁時計を見れば只今7時前。

すかさず指差しつつ、時間の遅さを強調。

「あ、まだ10時までなら大丈夫です。甥っ子さんのお悩みを聞いておられるのですよね。私も興味あります。是非、協力させて下さい」

oh、なんて良い人。

僕言つたこと完全に裏目に出てる。

いや、そもそも悩みじゃないし。

伯父が誤解を招くような説明したに違いない。

額から冷や汗が流れたせいで起きるこそばゆさにより、腕で顔を拭う。

どうしよう、言うべきか、いや無理だという訳でもう帰っても良
いかな。オチなしで話が終わってしまうのも如何なものか思えるけ
ど、これは止むを得ないでしょう。うん。

「いや待て。イスが足りん。ここじゃ話辛い。奥の研究室へ移ろう
ぞ」

「え、ホントですか！」

伯父と、研究室へ行くことに満面の笑みを浮かべる彼女は、僕を
置いてとっと奥の通路へ移動した。

……チャンスじゃないか。

今一人となった僕は気付かれずそしてさり気無く居なくなる。

いける。

「一太、早よう来んか」

一度見えなくなった伯父が、再びここへ戻ってきて僕を呼んだ。

「フツ、わかつとる。照れとるんじやろう」
「はあ？」

「角田君は可愛いでのう」

突然シヨウも無い事を言い出したジジイ。

「だが残念じゃな、もう男はおるんじや。諦めるがよい」
どうでもいい情報であるはずなのだが何でかな。気持ち少し凹ん
だ。

そんなのはまたどうでも良いんだよ。

僕は帰る旨を言わないといけない。

取りあえずは、今日は気が変わったもんで明日にする。と、僕はそう言った。

「ん。カミカミで何言いたいかわからんぞい」

ああ、言えてないか。確かに噛んださ。わかってた。

雰囲気で押ししたつもりなのに、その辺をわかってくれるはず無く、やりきれない気持ちになる。

もう一回、おんなじ事を僕は言えば良かったのだが何故か言えずに諦めた。

そして結局、いつも、と同じなのかどうか……違うか。

兎に角、研究室に向かう。

ああ、いやな予感だ。

前に行く伯父が研究室の扉を開けて中に入り、その後に僕も続く。研究室には、当然先に行った……カクダさん、が居る。座ってらっしゃってね、ハハ。

「わかりやすいのう、一太は」

ここは本当に研究室ですか？ 雰囲気がいつもとまるで違う。

なんだろね。いいね。

「ほれ、目を覚ませ」

ん？

突然に頬から軽い衝撃を感じた。

「早く座れ、立ったまんましゃべる気がい」

妙な小憎たらしい笑みを浮かべてくる伯父。

いまいちオカシイ僕に目覚ましする為、ぶった訳だが、未だにまだ幻覚を見ているような感覚でぼんやりしている。

本来の僕ならこんな大人しいはず無いのだが、言われるがままに目の前にあつた席の椅子を引き、腰を下ろすとした。

この時、正直な話、何しに来たかすら忘れていた。

でも、この雰囲気先ほどのように否定する気は無い。
むしろ心地よさが体中に伝わってきて、いい気分だ。

伯父は真向かいの席に着き嫌がおうにもこのくしゃ顔が目に入り、折角のホットな気分から覚めてしまい、すべき役割を思い出した。これは冬の朝布団から脱出した後の感じに近い。

ただ思い出したとは言え、素直にその通り話を進行していくのもどうかなものか。

今日は滅多に、と言うより初顔の可愛らしい第三者がいる。

思考をこらせ。工夫しろ。

さすがにこのまま、リーゼントの存在理由を教えてほしい、なんてふざけた事は言えないぞ。

どうする？ネタはこれしかないぞ？

ここは意表をついて、だ。今後の社会情勢について……駄目だ。三秒くらいで無理をしているのがばれる。そっちの方が恥であるな。無難なのはテレビの話題か。バラエティやドラマ、最早世間話だ。それもまたダメだ。面白くもなんともない、つまらない。

普段は一切使わない脳の部分もフル活動させている中、沈黙を流し続けていた僕以外の二人。口を開かず明らか様に悩み果てる僕に痺れを切らし、珍しきゲストは口を開いてしまった。

「やっぱり、私がいるから話しづらいのでしょうか」

その言葉に僕としては、その通り、と思う所存。

少しばかり困った、そのように首かしげをする彼女。

ただ、思ったとおりに言ってしまうはそれまた失礼な訳で。

惜しい気はするけど、これは帰ってもらおうチャンスかもしれない。

何せ今振ろうとしている話題を発するのも、更なる失礼だと判っているから。

何も答えない僕を、伯父は相変わらずの汚い笑顔で見てる。

「ん〜、やっぱり難しいですよ。軽率に人の悩みを聞こうとは私も些か迷惑過ぎますよね。教授のご自宅に訪問できただけでも良かったものですし、私はこれで失礼させてもらいます」

そう言っただけでカクダさんは静かに席を立つ。

その後、僕らに向け一礼をして、伯父の近くを通りかかる際に「もう少し、理学部の方にも残ってもらうには……」と畏まるように訊ね、伯父は「悪いのう、無理じゃ」と一蹴。最初から答えは分かっていたのかあきらめが窺える表情の笑顔をし、やっぱりですかとぼやいた後頷く程度の礼をしてその場を去る。

そのまま研究室を出て行くかと思っただが、開きっぱの扉閉めようとノブに手をかけるところ、動きが止まった。

「でもやっぱり教授「無理じゃ」

多分さっきと同じ事を聞こうとしたんだろう。以外にもしつこい彼女。

けど、伯父は紡ぐ言葉を発するが手前に上書きせん、とフライングで先程の同じ断りでバツサリ。きつとこんなやり取りを二人の間には何度と無く行われたのであろう。その証拠が今二人が、なはは、と、ふふふ、と笑っている。

この和やかな雰囲気、浮いてる僕は完全に蚊帳の外であるが故で自分でも今どんな顔しているかわからない。

ただ言えることは、正直、うらやましかった。

カクダさんは既に退出済み。今、伯父と二人。
さあ仕切り直した。

いつもと同じ、馬鹿話をする環境が整いました、と。

「本当にこれで良かったのか、一太。あのお姉さんとも少しお喋り
したいお年頃ではないんか」

完全にコケにした言い回しでからかってくる伯父。

一々、伯父に反論しようものなら話が進むはず無いので、顔を無
表情で作りこみ今までの出来事を無かったかのように僕は淡々と用
を話す。

今回聞くのは、リーゼント。

もうどうでもいい気がしなくてもないけど、毎度楽しみにしてく
れている友人達にむけ土産話を持っていかなくてはならない。義務
って訳でもないが、平凡に花添えるのが僕の仕事のようなものだけ
らね。カクダさん、については話せるはず無いじゃない。恥いから。
ともかく、今日の朝にあった出来事を伯父に一部始終話す。どん
どん話していくがうち、内心落ち着きを取り戻して普段どおりの感
じだ。

「なんじゃ、シモじゃないのなら返す必要はないか。すつか
りおぬしが真っ赤にしとるもんじゃから勘違いしちよったわ」

いつ、僕が伯父に下ネタをふったんだ？

そつちの方向へ持っていくのは伯父であって僕ではない。一応、
まだ純情少年のつもりいるんだ。伯父と一緒にするな。

「純情？どこがじゃ。胸ばかり見とったくせによく言うわ」

そ、それは顔がまともに見れなかったただけであって目が合ってしまったらとか、その伯父のようなゲーサーな考えを持った上での行動ではなくただ純粹に、その、可愛い人だなと思って……。

だからだ、違うんだよ！

断じて変態ではない！

「まあまあそう熱くなるな。わしの甥っ子じゃからな、すっかり見抜いておったのかと思うてな」

見抜く？

「ボインじゃ、あの厚着のせいで隠されておるが中々の巨乳ちゃんでのう。うひひ、ボインじゃ」

両手で、胸元の前に丸みを作るジェスチャーを何度と無く行い、顔の筋肉がゆるゆるで、いわゆるエロジジイがそこに居た。

カクダさん、伯父の本性はこんななんだ。教授としてそれなりに役割をこなしているのかもしれないけど、普段は下心満タンを抱きつつあなたに接している。目を覚ましてくれ。

ただ伯父の妄想はとどまることを知らず、とんでもない提案してきた。

「ビキニでも着てもらってここに呼んでみるか？」

何言い出すんだ。

無理だろうが。無理に決まっているじゃないか。

「今はちよいと寒いで無理があるかもしれないが、水を使う実験、そうじゃな庭の広間を使って水と光の屈折の関係性……塵気楼を出すというのはどうじゃ」

……………判りやすく言ってくれ。

「お、乗り気か？まあ角田君に被写体になってもらって歪む景色を蒸気やら何やらで作り出すのじゃ。ただ、それだけだと弱いもんで他にも別の実験を用意するぞい」

……そこは別にカクダさんじゃなくてもいいんじゃない？無理がありすぎると思う。

「そうじゃな、被写体についてはジョニーでもいいしろう。わしも思ったぞ。やはり普通に合宿として海に皆を連れて行くがよいか。それにびったりなわしの島がある、リゾートじゃリゾート。もちろん一太も連れていってやるから安心せい。おお……わしとしたことが、何で今の今まで思いつかなかったのじゃ。わしのピチピチギャルたちが水着で戯れるのが目に浮かんで、ごふっ！」

伯父が完全に脱線したのを確認した後、きちんと正すがために一発を頬に決めてやりました。

当然グーパン。

もういい加減妄想には付き合ってられないし、まったく話が進んでいけない上、カクダさんが伯父の視線により穢れていくのが許せないし、元々これの変態っぷりも苛立っていたんだ。

僕の女神が伯父の勝手な一存により？脱がされる（我ながら別に表現が無かったのか）なんて言語道断。

今まだ維持している拳を伯父に鼻先に向け、全力込めてぶつけてやっても良いくらいだ。

「待て待て待たんか一太。ここでこの話は終わりにしよう。今日はリーゼントの存在理由についてじゃったな」

次なる一発を放つべく構えを取れば、伯父はさすが勘弁、と両手のひらをこちらに向け、止めてくれといったような仕草を見せる。

強行でやっちまってもよかったけど、伯父の言ったことに一先ずの理性と理解が生まれ、完全にヒートしていた頭ん中は落ち着きを

取り戻していった。

確かに今日来た理由は、いつものようにくだらない話をしに来ただけに過ぎない。ここは大人になり、本題に戻り、一通り終わった後にまだちよつとムカついていたら軽くやつところ。

とりあえず、用件を済ますつてなこつた。

「リーゼント、のう。わしも昔やったもんじゃ」

僕が殴る意思が失せたのを感じ取った伯父は、防御として構えていた両手をゆつくりと組み、相変わらずの子憎たらしい表情でリーゼントについて語りだした。

「あの特徴ある髪型はむかしのとあるロックスターが起源とされておりな、そのかつちよええ言動やら容姿に憧れた者たちは拳つて真似たわけじゃ。ただな、リーゼントは日本のちよんまげに匹敵するほどのふか〜い意味があるんじゃないよ。きになるじゃろ？ちよんまげは男の強さの厳格さの象徴……、リーゼントはだ、やや変わつていの」

語るうち、ここで何故か妙なタメを作り、昔を思い出すかのようになし上を見上げて目を瞑る。

正直、伯父にロックと呼ばれる事柄は、今まで共にいて一切合切の微塵も感じられない。

一言で言えば、似合わない。

ロック関係の方々に、失礼にすら思えるような下衆の男が語れるわけ無いだろ。なんて心内思うが、まあその通り、無理やりボンドでくつつけたようなボロがすぐ出る話を紡ぎだすであるう。

これを聞くのが目的なんだよな、と再確認しつつ黙る僕。

この時にはもうカクダさんへの意識は薄れ、馬鹿話モードに切り

替えていた。

こんな話、やっぱあの人前ではし辛いよな。

「少し話が変わるが、一太はマリィ・アントアネットを知っているか？その時代にも現代の若者ように奇抜な流行があつての。頭の上に船を乗つけるのが貴婦人方には流行つておつたようなのじゃ。船といつてももちろん人が乗れるようなサイズではなくミニチュアなのじゃが、ただ、その中で大きさを競い合うというのもあつたらしのじゃ。例えば帆の部分の造りや大砲を備えついたりとか、貴婦人の格に比例してすごいもんが乗つかつていたようじゃ。今のモンには到底考えられん文化じゃが、今は今で未来になればまた今やつていような文化は、変とかオカシイと感ぜられるものじゃろう。さて、話を戻すが先話した船へアーの話じゃがこれをリーゼントに置き換えてはどうだ？」

……んん？

リーゼントに置き換えるという以前に、まずどこからホントで、どこからウソなんだ。もしかすると丸ごとなのだろうか。

ツッコむべきなのかどうかすら悩む僕にこんな話の整理できるわけが無く、眉間の間にしわを寄せるのみだった。

「要するに、盛り上がり具合により男の格が決まる。簡単じゃろ。最近では貧弱な男どもばかりだもんでいまいち理解しづらいかもしれんが、まあそんなもんじゃ」

なんだ、貧弱とは僕に向けていつたのか。

理解しづらい、ではなく理解も出来る筈ないのだが、もう少しはまともな答えは見出せなかったのか。

「そうじゃ。もはや廃れてしまったリーゼント、まあ一太は珍しくも出会えたが、どうじゃ。ここで新しい男の格と成り代わる髪型を

考えてみようではないか」

実にどうでもいい提案。

考えたところで、誰一人として僕も伯父すら明日にでも忘れそうだけど、折角いつものグダグダなめんどくさい感じが戻りつつあるの
でちゃんとのつかってあげようと思う。

ほぼボランテティア精神と呼ぶに相応しい感情だ。

……との訳で一頻りに案を思いつくままに口走ってみよう。

最近は何が流行ったんだ？

左右のバランスのおかしい髪型、あれってなんて言っただけ。あ、
モヒカン。ウド？でも流行ったよな。ボーズ頭に線入れたりして
たな。あ、そう言えばこないだ朝のニュースでボブが流行って、あ
れ髪型のことだよな。ボブって。

「ほうほう、バランスのおかしいモヒカンのウドに線をいれた朝の
ニュースのボブ。ほう、やるのう。ボブ、やるのう」

そうだね、ボブやるよね。

……もう本格的にどうでもよくなってきたよ。

確実に話はくだらなくつまらない方向へ走っているが、ここで正
気に戻るとなると後始末がいささか大変になるの請け合いなので
もう突っ走りましょう。

結果なんて予測してられない。

ひたすらに頷いたり、笑い誤魔化したり。

「残念じゃがわしはテレビを一切見ない、と言うより持ってないも
んでようわからん。ボブか、誰なんじゃ」

的外れであるのを指摘すべきなのだろうけど、その気は起きない。さっきの通り突っ走るのみだから、ボケ倒すのみ。僕は適当にこう作る。

ボブとはニュース番組のコーナーひとつで活躍する外国人タレントであり、街角で行き交う通行人に片っ端からちよっかいをかける朝の忙しいサラリーの方々にはただ一片の迷惑人。

ん、実際に似たような人が昔いたような気がしなくてもないが、あえて気にはしない。

相当な昔なので伯父が知っている可能性があるかもしれないが、その時は仕方がない。

「そいつがバランスのおかしいモヒカンなのであるのだな。やはり流行りものにはおかしいもの揃いなんじゃのう」

傍から見ておかしい伯父がおかしいと述べるのはこれまたおかしいのである、と言ってもおかしいのでそういう事にしておく。

「どうバランスがおかしいんじや？左右？こう、擦れておるのか？」
バランスのおかしさを聞くために頭の上に両手をかざして傾けて動かして、どれが当てはまるのかを僕にしきりに聞いてくる。

正解なんぞのつけから存在しないが、これまた適当な理屈を付け足して結論をつける。

「なるほど、この辺までか。結構なズレ加減であるの。よし近いうちこれでいくぞ、わしは！わしが流行の発信源となるのじゃ、いや、これではボブの真似事に過ぎん。もっとずらして、線もいっぱい入れてしまおうではないか。ようし先駆けてやるから一太、お前も共に最先端となるうぞ」

伯父の両手は、こめかみの少し上にある。すなわち、その辺に毛を生やしておき、残る部分はツルンにして生えた部分に剃りこみの

線を無数に入れる。

奇抜だ。

伯父がやるのは勝手だが、流石に僕はやれない。

校則に引っかかるからできない、と在り来たりだがもつともな言い訳を言っておいた。

「確かに学生の身分にある一太には少々無理がある。仕方ない、内の生徒だけにとどめておこうか。見ておれ、その内にわしが世界のグローバルな天才お洒落科学者として世に知れ渡る日がくるぞ！」

こう高らかに言い放ち、大きな濁声で笑い出す。

心の中で微妙なブレが起こる。無関心から少し赤く色づくような……まあいいや。

言わば単純にイラツとしたただけだ。

目の前を濁らすゴミみたいなジジイに向け、テーブルの影で密かに足を振りかぶり、座ったままなので勢いはあまり出ないが、それでも無理やりも蹴りを繰り出した。

感触はあった。

伯父のリアクションも笑い声と重なり「ガハホうつ！」と言葉では通用しない奇声を発しつつ、全開にしていた口をおちよぼ口へと一変させ、満足する状況にさせるのに成功した。

ひと時の苛立ちも収まり、これ以上はもういても仕方ないと、自身ながら勝手な判断を下して、無表情を作り、何事も無いようにサツとその場を立つ。

後ろから、伯父がありきたりな文句「何するんじゃ！」とか「まだ話は終わつとらんぞ！」なんてまあ聞こえはしたが、僕には単な

る叫び声として捉え、意味を解釈して応じるなんて無駄はしない。もう立ったからには後は出るのみ。

老人虐待にも値しそうな行為だが、身内なのでよしだろう。

本人も明日にも忘れるに決まってるし、何より、伯父の丈夫さを僕が一番知っている。

奴は、この程度じゃ屁でもないのだ。

伯父の研究室をすぐ出た後でも、先閉めたドアの向こうからうめき声がかすかに聞こえ、自分が考えた以上のダメージがあったのはなんて思えたが、そんな後悔は二秒で掻き消えて、家路に向かう歩は一向に止めず、早足で外に出る。

空は、入って来た時と違い、もう真夜中。雲が多く、一番星すら見えないつまらない空が広がっている。にわか雨も降ってきてそう見える。

傘を持っていない僕としては、これは早く家に帰らなければと気持ちを逸らせざる負えない。

門の向こうには、当然誰もいない。

通行人がまるでない夜の路。

顔に滴があたったような気がした。これは予想的中ってところだろう。

僕は何も考えず、ただ家を目標に走り出す事に決めた。

右手に持つかばんが重い、制服は相変わらず運動には適さない、感じたのはそれだけ。

……なんてわざわざ心で語ってやる僕は一体なんなんだろうな。

おそろい。

今日はリーゼント、あんまり関係なかったな。

ん？

筋違いの話になるのはいつも一緒か。

・リーゼント（後書き）

もう読み直ししてません、と言ふことは編集してませんがーって書いて、終了。

・お笑い(前書き)

・この回について作者から一言
「裏題は“カクダさん(前編)”です」

・お笑い

突然だけど、そして今更なのだがここで僕の自己紹介をしよう。僕は高校生だ。並みの成績を修める者なら誰でも行けるような普通の高校に一年も無駄な時間を過ごし、この春に当然のように格上げとなった高校生だ、現在二年生だ、ピカピカだ。すなわち今、春でありとても暖かく周りでくしゃみの発射音がそこらじゅうで聞こえてくる季節まっしぐらである。正直、俳句で言うならくしゃみとは春の季語なのではと思うくらいによく聞く。他人事のように言うがその通りで僕にはもはや関係はない。脱・花粉症を成し遂げこうも平然と春を満喫することが出来る。ん、話が逸れてきた、ので元に戻そう。先言ったように僕は高校生、青春真っ只中の人生である。まあ、何が言いたいかと言うと、以前の伯父の話ではないがそれなりに恋ぐらにする。何、健全な青少年っぽくていいことだろ？今現在何一つとして取り柄のない平凡ってな肩書きが相応しいこの青年が恋する女性、カクダさん。おっ、心の中で言っただけなのに結構恥ずかしいものがあるな。ま、つい我に返ったのも引き戻し、いずれにせよ、ただ純粹（真っ当だよな？）に知りたいが故の今日のテーマである。伯父には勘付かれたがハナっからその通りであり、言わば一目惚れと言うべきもの。ちなみに歴代の片思いの方々……全て一目惚れである。全てはまあ三人しかいない訳だが、恋の花開くことなく散っていったのは自分の勇気の無さからとわかっていてから、だからこそ、今回こそ、もう少しお近づきになれたらなと思惑がある。いや、さすがに恋人同士ってのは傲慢でしょ、はい。

さあ、謙虚なる心持で望む今日。学年上がりたてであるが、クラス替えもあつたが、今まで散々仲良くしてきた友とも別れてしまったが、結構なイベントのはずでも話にするほどでもない。よく言うじゃないか、総ては捉え次第だ、と。だから僕が大したことがな

いと言えばその程度。学年上がれどやることは一切変わらないし、クラスメイトが替わったとしても皆似たようなもんだし、親友も登校中には否が応にも出会う。問題なし。なんてな風に頭の中を巡らせていた高2初の登校日の下校途中の今、もはや向かうべく進んできた場所は伯父の家であり、工程なく説明すれば現在地は伯父の家の門のすぐ手前である。相変わらず。伯父と僕は声を交わさなくとも分かり合える間柄なので、あえて勝手に黙って上がりこむ。決して面倒とかメンドウとかmendouとその様な事では……自分で言って馬鹿らしい。

音を立てないように開けた大扉をまた音を立てないようにゆっくりと閉め、そのついでで僕も音を立てないように気配を消して中へと足を踏み入れてさっと閉め切る際に残念ながらガタンと音がしてしまい、やってしまった、と何故か少し凹む。中の様子はバカ高い天井の照明が点いており、物音はしないものの人のいる気配はある、気がする。この自身の無さは、伯父の家の場合は鍵が開いていようが中が明るかるうが本が片付いてなかるうが何一つ関係なく、そのままの状態で留守にするケースを幾度にも遭遇して散々家中を探し回った拳句に、「一太何しとるんじゃ？」ってな具合に飄々と大扉の前に立っている場合があり、やりきれない気分で心の隅で、んっだよもう!!、と叫び思うわけとなる事が経験済みだから、およそ三回ぐらい。なので今回は、最低でもオチだけでもマシなパターンになれ、と考え、無駄に探し回る真似はせずに真っ直ぐに研究室に向かう。研究室には当然誰もいないと想定しているので、そこで伯父を待ち続けてやろう、今日のやる気はいつもとは一段と違う僕は日付が変わるまで待ち続ける覚悟だ。ちなみに短縮授業であったので大体正午過ぎ、テーマがテーマなので今の僕のやる気は半端ないのだ。

だが僕の思惑と想定はガンガン外れていく事態となる。あと数歩で扉に手が届くというところで向こうから勝手に開き予想もしない

人物が現れてしまった。予想もしない人物、正確に言えば予想も仕様もない人物、見たこともない割烹着姿の若い女性。誰？伯父の愛人？いや伯父、結婚してないから……いや、出来ないからその線は無し。じゃあ、どろぼう？おおつ、110番する必要があるじゃないかあれ今日ケータイ忘れたんだ。はいパニックです。もう手に持ったカバンの中を闇雲にさがさそとほじくっていれば、まあ事態は勝手に進む。

「どちら様で……あら、一太くんじゃない。いつもの様に博士に用があるのよね、残念だけど今は出かけてるけど」

おいおい、僕を知ってるじゃないか。扉を開ききった状態でもノブからは手を放さず持ったままで綺麗に足を伸ばしたモデル立ちでこちらの様子を伺っている。割烹着にもんぺを着飾っても優雅に見えるのは僕の目の錯覚に違いない、はずだが彼女の整った顔立ちと女性にしては長身であるのがその理由かも、と後々で思えた次第で。「どうする。もう帰る？」

こう二言目を掛けられたとしても僕はまるでリアクションは出来ずに呆然と彼女を眺めるだけ。完全にパニックで頭の中が真っ白となったせいで、次に口にすべき言動もやるべき行動も思いつかないままだった。沈黙は続く。

「ん……」
顔をしかめ、彼女も困ったといった様子。しかし、僕の真っ白な頭の中によろやくながら一つ、疑問が浮かび、ほぼ同時にもう発していた。

あなた、誰っすか？

僕はどれだけ単細胞なんだ……。

「え、ん？」

彼女は当初からの無表情を変えずに、自分に指をさす。何故か両手で。もちろんその確かめは当たり前になるので僕は顔を上下に二回振った。

「……あら、ま、知らないのね。あなたと同じ学校の同級生なのだ

けど。そっか」

え、ホントに？いやそりゃ嘘でしょ！落ち着いた大人っぽい表情からの印象によりついこう声を上げてしまったが、それが本当だとかなり失礼極まりない。

「ええ、嘘」

はい？！

「まあ立ち話もなんだし、どうぞ」

なんだ、今の。嘘、ならば初対面なんだよな？いきなりも調子狂わせられどうも掴みづらいが、伯父の知り合いとなればこんな変人はザラなのだろう。もしかしたら、まだマシな方なのかもしれない、と考えれば自然と納得ができた。僕は彼女の視線の外れたところで一人ウンウンと頷いて、向こうの研究室へと向かいいれる手の通りに足を運ぶ。僕が入ったのを確認した後、扉を閉めた。で……なぜ、姿がない。あれ、おかしいだろ？とは思えど、気にするのすらもうメンドクさいので相手にしない。初対面だが、関係ない。いつも座る、扉から見て一番手前の椅子に腰を下ろし、テーブルに肘を突いて手に顎を置いての楽でぐうたらな姿勢をとり、伯父を待つとした。

大体3分ぐらいたった時くらいだろうか、研究室の扉は僕の背後、そこから扉が開く音が発せられた。ああ伯父が来たな、と普通に心で言えた。

「長い」

僕は聞こえた低いトーンの声の方向へゆっくりと顔を向けた。さつき見た割烹着ともんぺが“半分だけ”目に映り、少し顔を上に向けてさつき見た変な女の人の顔が“半分だけ”。“半分だけ”なのは説明するまでもないかもしれないが扉に隠れているからである。長い、と彼女の言った一言の意味に疑問が残り、でもやっぱりもとの位置に顔を戻そうとしたら、まだ後ろから言い出してきたので、しぶしぶ止めた。

「今の流れからすればワタシも部屋に入りキミの前に座るが通常で

あろうのに、外で閉めてしまった。それはいわゆるフリであるうのにツッコミせずに数分もの間ほったらかしとはどういつつもりなのかしら。ここまで待つのもどうかと考えたけれど間を置いた時間差ツッコミもそれまた面白いと考えた上での行動。けれど一切ひとことも、ん！、ぐらいも言えば良いものの聞こえてきたのは椅子を引き摺る音のみでキミは今見たとおり座りくつろぐだけ。もし勢いよく扉を開けさえすればおいしい位置で待つワタシが新喜劇みたくそれに潰れてあげたのに、キミ、ふざけてるの？」

早口で聞き取れずよくわからんが、どうやら僕は怒られているらしい。ただ迫力はない、まだ姿半分であるのがそうさせる。声を張り上げ、表情はあまり変わりはないが若干の変化は眉間にしわがよつてる程度、多少はそれに応えるためにすくんで見せたりするのがいいはずだが、どう見てもどう考えても彼女のほうがふざけているので放っておきたい。肘付いたまま後ろの扉で怒鳴る人に顔向けたままにするのは首が非常に疲れるので、リラックスする為にまたもとの位置に顔を戻す。この動作は端的に言つと、シカト。

「なるほど、もしかしたらこれは放置プレイなのかしら。このシチュエーションの対応は考慮してなかった」

おかしい事言ってるぞおい。その場を動こうともしない後ろの人は今度は呟き始めている。

「ふふ。キミは、ワタシを試しているのね」

できれば耳栓がほしいのだが代用品として使えそうなものが回りにないため諦めざるおえない。立ち上がって探すのは相手の興味として捉えられ、変に実況とかされては敵わない。なので最善は置物のようにただじっとしてるがいいんだ。

「静か」

確かに静かだ。聞こえてくるのは、部屋奥の壁に備えられている黒板の上の中央くらいにかかっているアナログな時計の秒針の音、後は隅の棚に下から二番目の段に置かれているカゴ四つの中にあるハムスターの生活音。いずれもポリウムは小さいので騒音とは感じら

れない。

「目には、目を。歯には、歯を。そして、沈黙には、沈黙？」

もうシカトするのは止めて、とりあえず対応をしてあげたほうがいいのだろうか。こんな状態が続いては事が進まない、故に話にはならない。早く伯父が戻ってくるのを祈るばかりで、そうなればこの面倒は解消されるはずなんだが。

数秒したとき、時計音とハムスター音以外の物音が後ろから、ドアが閉まるような音。とてもゆっくり閉めたようにドアがばたつく際に鳴る、あのキーというような金具が軋む音がずいぶん長く聞こえてきた。その最後に閉まりきる証明の、カチャリと音がる。ドアが完全に閉まった、だとするのなら彼女はようやく研究室に入ってきたのだろうか。いや、また外でテイク2を勝手に行っている場合も考えられるな。足音にも耳を澄まして注意したのだが寸分も聴こえてはこなかったもので、後者のほうが確率が高いと思っていたが、僕の真後ろで人が深呼吸をするような音がする、だから突然の極稀な自然現象でない限りは、違ったのだろうか。自然現象。どうなりやそれが起きるんだよ、と自分で自分についてツツコミをいれてみる。もちろんあのおかしい人には聞こえない場所、まあ僕の心の中で。

「ツラじゃない……」

僕にどんなキャラであるのを期待してるんだ、今の深呼吸は某有名超ベテラン芸人の独特な髪のかなびかせ芸をさせようと頭に吹きかけていたのか、いや、僕は間違いなく自然でナチュラルな、あ、意味一緒か、つーか普通な髪型だ。極端なヘルメットではないし、もちろん薄くない。ああ、しょーもない弁解だ。大体だ、この歳でその被り物にお世話になったらシャレにならんし。

後ろで奇妙をし続ける彼女は研究室を遠回りに歩いてようやくながら僕の視界に入ってきた。その様子はその辺の備品を物色するかのようにつめつつゆっくりと徘徊する。こっちは一切視線は向けたりしない、相変わらずの無表情は恐怖感すら抱かせる。異様なほ

ど真剣に見えるが、ふざけている、だよな。もういい加減にしよう、魂胆は把握したさ。正直僕の中でもコント気分になりつつあるし、この人で充分に話題にすることができる。このまま泳がせるのも、またおかし、かも知れないけど持久戦では伯父が来るまで埒が明かないので僕から終戦を告げるとしよう。

とりあえず、座ってもらう。

「え」

座るように促したにも関わらず、いや一応の反応は示したがその通りの動きはしてくれずにただ立ち止まるのみ。反応時にはこちらをちらり見て、左を見て右を見て、どうしようかと悩むようにと思われる。一度は僕の真向かいのいすの背もたれに手を掛け、一時停止、結局は手を離してしまったのはまだボケようとしての事か。なんだ？天然の反対語は、わからないけど人工ボケというべきなのだろう、わざと事をしでかしてやるうってな思惑相変わらず見え見えである。早く普通にしてほしいよ、それともこれが普通、だとしたら伯父に匹敵する変人確定で一刻も早く帰りたい気持ち催促させる。今日のテーマは忘れた、趣旨すら放棄させる彼女の所業にあきれ半分で目で追っていく、それと先読みもしてみる。

いすに座る、はずだ。いすは長テーブルの周りを囲むように六つある。向こうに三つこちらの列に三つと実に理にかなった配置、ちなみに僕の座っているいすを含めて言っているので座れる場所はそれ以外の五つとなる。例外も、考え……さすがに初対面にそれはしない、はずだ。今、彼女の行動はさき来たテーブルをまた戻るように逆へと戻る、歩く早さは亀のようにとてもゆっくりと、早さだけ言えばまた相変わらずだな。手をかけたいすの隣のいすの後ろで、止まる。もうどこでもいいから座ってくれ、厄介だ。こう思った。そして彼女は、また歩いた。これって一人いすとりゲームじゃないか、そんな考えの一言との合わせ技で一人でやってる姿は非常に虚しい。あの人にも気づいてもらいたいのだけど、正気に戻るような隙間が用意されているかどうかは、考えるだけ無駄かもしれない。

次のいすへ手をかけた、扉から見て一番遠くにある場所。座った。ずっと観察していたが、座る様子はどこも異常はなかった、が、ただ場所がおかしい。僕は扉から一番近い場所にいる、あの場所は一番遠い場所。

遠っ！

不覚にも、ん、とうとうかな。つい声が出てしまった。いすに座っていた彼女は誰も何も存在しない真正面を、僕から見たらあさつてのほうなのだけど、ついいれてしまったツツコミに素早く顔だけを僕に向ける。まるでターミネーターのように動き、あれは口ボだな、間違いない。すっと立ち上がればそそくさと真向かいの席へと戻り間もなくさっさと腰を下ろす。僕はその無機質な動きに肘ついた手にある頭をおこし相手を目視する、多分は傍から見れば目が点であるう。いきなり素早くなったボケしまくりの昭和な風をかもし出す割烹着女性はそれはまあ美人で、あつたとしても今までの所業により偏見は覆らずただの頭おかしい人でしか見えない。そしてその後の所業もまた、こちらを凝視し親指だけを突き立てたコブシを瞬間的にテーブルから上に出現させ引っ込ませている。きちんと目撃できずに僕が疑問形まるだしの、はあ？としたのを把握したのか再度まったくの同じ行動を取り出した。またも瞬間的な動きで親指を出し引っ込ましを繰り返して、それを僕にどうしろと言うのか。あと少しは表情を崩せ、笑え。人間に見えてこない彼女にうんざりしっぱなしであった、このファーストコンタクト。ちなみに、彼女に対するイメージはこのときが一番まともであった、知るたびに変人と思わせる。でもただ、悪い意味ではなく、ね。

「思ったとおり、キミはやっぱり面白い」

ようやく状況がコントからトークに移る。回数はどれだけこなしただか、懲りずにグーサインを繰り返して、ただ少しの変化は手が疲れたのか親指を立てる間隔が徐々に広くなっていった。気付いた僕は、しんどいならやめれば、呆れ顔に、自分では確認できないが認

識と一緒に自らわざと。声に反応するようで……こんな言い方して
る時点で人扱いではないな。彼女は耳に入った言葉に、顔半分をか
すかに歪ませる不気味な含み笑いを表し、で、あの言葉を言ったん
だ。

復唱しようか。思ったとおり、キミはやっぱり面白い。この言葉
の狙いが掴みづらいが……褒めた、のか？どう捉えればいいかさっ
ぱりわからない上、面白いと褒められ照れるような性分でもない。
同じジャンルの人ではない、無視が適切と考え、相手の正体を聞き
だすよう会話に移るとしようじゃありませんか。まずは名前からだ。
「ふふ、まさかそちらから口説かれるとは思わな？あ、違う、て即
答なの……いいね。ツツコミに重要なのは瞬発力と常識力と、キレ。
キミはかなりのハイレベルで兼ねそなえ……名前？キャサリンよ、
よろしく」

一筋縄ではいかないこのお笑い職人。名前を聞いて、もちろん、
礼儀で自分を名乗ってから相手に名前を伺う。言う度に帰ってきた
返答は思いつきとツツコミの三要素？馬鹿馬鹿しい冗談めいた自
称。名前、と三度も言わせ、噛み合わずに教えてくれず。骨格や服
装、この人が存在要素すべてが日本人であると語らずも明白だが、
あえて彼女待望のツツコミはやめでキャサリンで突っ走っていいこう
はい次。

次は、伯父との関係。彼女はまたも即答せずにおかしい答えを思
いつくよう目をつぶる。そして、ふっとあやしく微笑み、言う。

「関係？見て、わからない？」

分かるわけがない、だから聞いてるんだけど。

「そう。ワタシは、メイド」

メイド？

「あ、ごめん今のなしにして！」

僕に何故か制するかのよう手のひらを向け、もう片方で口元を
おさえてフリーズ、顔は俯いて、顔のパーツの中で唯一の変化が見
える眉間にしわがより、考え込む。押さえている口元からなにやら

眩きが耳に入ってきた。

「どう答えるがいいのか、難しいフリね」

この人は一体いつになったら真面目に話を受けてくれるのか。

普通に話しませんか、そう提案する。はっきり言って相手が普通の人ならばする必要がない、そもそもこんなの思いつかないんだけど。

彼女はするどい目線を向ける。

「普通よ。どこがどう変なのか、まったくわからないわ」

本気かよ、この人。

「キミの普通と呼べるのはこのような具合ではないの？求めているのは面白い事、違う？」

そりゃと時と場合と人によるというものです。

「ワタシには？」

誰かわからない人に、そんなのは求めたりしません。

「わかった。ワタシは、はあ……」

ここでひとつ大きなため息をつき、微かに首を横に振る彼女。髪はすべて後ろにまとめているのだが、少しだけ残った前髪がその動きに揺れた。

「つい先月から、ここに居候させてもらってる」

なんで？

「ああ、そっか。その……博士の助手をさせてもらえるようになって、まだ確定ではないのだけど、必死に何度も頼み込んで、家政婦ならいいぞ、とようやくお手伝いを」

先月からならもつと前に見かけてもおかしくないんじゃないかな。

「まだ学生だから部活があり、帰るのは十時過ぎなの」

なるほどね、僕は帰宅部だから暇人なんだよな。

今日は部活は休みってことだろう、言動が多少変でも、僕よりよっぽど健全な生活しているようだ。いや、だが家政婦なのはおかしい。今時家政婦って、メイドって答えたのほとんど当たってるし、違いといえば見た目もそうだけど和風か洋風かそれだけの違い、意

味合いは同じだから。まだおかしい部分、どうして、伯父？博士って、伯父だよな。吹き出てくる疑問をきちんと整理し言葉にしてみ、聞くは再度伯父との関係。

「博士と助手、では答えにならない？」

もつとくわしく教えてほしいものだけだ。

「尊敬してる」

尊敬、ですか。たしかに大学の教授らしいから、それなりにお偉いさん扱いされてるのも無理やり理解できる。確かにすごいしな、チンパンジー飼ってるくらいだし、うんすごい。これは果てしなく無理やりな考え方だが、尊敬していると彼女は言ってしまったんだ、仕方ない。愛してると言わないだけマシだよ、無いな。

「愛しても、いる」

どうやらまた芸人モードに戻ってしまったようで、鋭すぎる真剣な眼差しが本気度を生むが今までがきちんとボケであると語ってくれている。きちんとツツコミを入れてあげましょう。トーンは落し気味に、それは言いつぎ、と無難な具合に。

「ふふ、いいね。心地いい」

最初が最初だけに変人確定と判を押していたが、こうしてみるとマトモに受け応えができ、じわりと好印象がもてる。

「そうか、愛人……だったか」

ところ難癖があるのには目をつぶっておけば、ミステリアスな和風美人。

話を始めて数多くの魔球クラスのボケを放られ、必死こいて打ち返しつつ苦戦しつつもどうにか十数分が経過し、キャサリン（仮）さんの正体が若干だけ判明。

彼女は九州出身らしく、一年ほど前から上京してきたようで、以前までは一人暮らしをしているようで、家は、伯父がいる大学の寮で暮らしていたらしく、父親が伯父と親友のようで、伯父のほうから大学にお願いし、特別に居住許可が下りたとの事。寮には当学生

以外の寮生はキャサリン（仮）さんしか居らず、創立初だと管理人さんに驚かれた、その例外を伯父はどのような経緯で、もちろん大学の教授のコネを使つてだとは思われるが、直接聞いても曖昧に答えられて流された。キャサリン（仮）さんは暇なときは大学の研究室で伯父の行っている研究とやらに手伝っていて、そうしている内幕うようになる。今話した内容はここまでである。続きはこれから、話をしていると時間が経つにつれてボケる頻度が下がってきて、

出会った当初に比べると激変したいえるぐらいに話しやすくなっている。きつと九州で暮らしていた頃は普通の子で、伯父の悪影響によつてこう変貌したに違いない。同情の余地あり、ガキの頃から接している僕は、もしかすると他の人から、変人、として見られていような行動を知らず取っているのかもしれない、だとすれば、先ほど彼女に言われた、キミは面白い、その言葉は遠まわしに変人仲間と扱われている、そう考えてもいい、いや考えるべきだ。まずい。僕は既に常識人としての枠を外れて、いやいやいや、それはそれ、これはこれ、だろう。僕の話は、この後にどうにかするとして、まずは目の前のキャサリン（仮）さん、まだ話の途中。ようやくながら円滑（出会った当初より）に進むようになったんだ、とりあえずは色々聴かなきゃだめだ、折角だし。

ええと？そうだ。キャサリン（仮）さんは寮に例外として入ることができた、それと、部活をしている。以上の事柄を考えると彼女の身分は僕と同じ、高校生、とはとても見えないけど、そう考えるが自然。さつそく確認してみる。

「さつき言っただけ」

え、いや、言っていないはずだ。マトモに会話をしているのはようやくであり、それまでに彼女の身分なぞいない。ただこの返答だと、その通り、と解釈してもいいわけであり、同じ身分の僕としては親近感が湧いてくる。今もまだ表情を崩さずに僕と会話する姿は、言動の内容を除き、非常に大人っぽい。同じの十代とはとても思えん、割烹着による昭和の雰囲気も彼女の大人っぽさを助長している

部分もあるかもしれないが、それが無くたって多分凄まじい。ん、十代じゃない？そーか、教師か！だとすれば充分に筋が通る。すつきりだ。

「頷いてる。やっと思い出してくれたのね」

キヤサリン（仮）さんの一言により、縦に揺れる景色が固定される。どうやら考えと共に、つい行動が表に出てしまっていたようだった。ただ、いま言われた、思い出した、ではちょっと違うのでその部分を指摘。

「え」

まとめてご説明。容姿からすればどう見たって、若くて二十代前半であり、部活あり、大学生ではない。この条件がそろうのは中学か高校の教師しかない。我ながら、うっとりする推理力である。

「ハズレ」

え。

「いや教師という設定でキミ接することができるのならとても面白い展開に持っていけるかもしれないけど、残念ながらそれはワタシの本望ではない。対等な立場でキミとはお笑いをやりたいから、思うがままにツッコミを繰り返すことができない、遠慮をされては爆笑を獲得、いいや、むしろスベる」

違うとは。相当の自信があったのだけど。違うとは。

「キミは、ワタシの相方に相応しい力量の持ち主」

あれ、違うとするなら、残りの答えは高校生か？どんだけ留年、違う、何浪したんだろっ。

「コンビ組んで、一緒にM-1優勝を目指そう！目指して！目指せ！」

知らんうちキヤサリン（仮）さんからM-1なんて言葉が出てる、目指そう……最後は命令だったけど、そんなの乗れるはずないし興味も無い。もちろん断る。

「なんで！どうして！話が違う！」

違うも何も、話した覚えなんてこれまでに一切無い、今後にも絶

対無いと神に誓っていい。

「いいや、キミには拒否権は、ない！」

怒鳴り声が鼓膜をつんざく、眉間のしわも最大級に力を加えており、その姿は鬼の如し。心境は、ただ怖い、に尽きる。

「どう!？」

追い討ち。もう怯みまくってる僕、しかし、脅しには屈しない。

今しがた会ったばかり人にいきなり、コンビ組んで、と言われて、しかもその相手は一切正体のわからない変わり者とくれば、そんな話にやすやす受け入れられる訳があるはずない。こんな具合の意味を自分なりにオブラートに反論して、多少は声が震えているのを自覚していたが、一応は聴いてくれた。

「正体は、キミの伯父様の親友の娘。疑い深い、嘘と思うなら直接きいてみなさい」

いや、そんな問題ではない、伯父と親しくても僕にとっても他人じゃないか。

「他人、同じクラスメイトじゃない。他人とはちょっと酷いのではないかい？」

そうなの、新クラスの名簿なんて知り合いがいるかどうかしか確認しなかったからわからなかった。こんな先輩な同級生がいるとはびっくりである。

「いやいやいや、キミとは同年だしむしろ誕生日はキミのほうが早いし去年も一緒だし幾度にも会話は交えているし、知らないはずないしそれは……………いやキミ忘れすぎひどいわ！」

届いてないですよ、手。どうやらわざとボケこいたと思われるらしく、ツッコミならではの手の甲を相手に向けて叩いてくる、空振りだけど、僕にピシッとキレよく止めた。僕は困惑。自然に手が頭に動いて折角なので掻きつつちょっと困ってみる。ただその時、まだ本当の名前を知らない。

僕はうまい具合に流れよく言う。それはそうでしょ、去年のクラスにキャサリンなんて居なかったはずだろ？

「なに言うかいたわ！みんなキャスイーキャスイーと呼んで、るはずないっての！てか、キャサリンって！なんじゃそら居るわけないしもっと早く気づけっての、有田よ有田、ついでにしたの名前を言えばサチ、わかった!？」

あ、あ〜有田、そんな名前の人、いたような気がするな。でも違うでしょ、ホントよく知ってるなあ。

「そうそう有田って子は影薄くているかどうかわからない時ある、事ない！ワタシだし！本人が存在したらそれびよーきよびよーき、ナニ？ワタシ、頻繁に記憶喪失？あぶなっ！」

真顔で何言ってるんだこの人、後ろに腹話術師でもいるのだろうか。いや、まずは事実関係を確認せねば。

「そーーだし、思い出したわかったほれこーるみー！」
有田、さん……。

呼んだ瞬間、自称有田さんはそっぽを向いて、ものすごい勢いで振り返った。彼女の手元付近で、ガタンと大きな音が鳴るのも気になる。

「はいっ！」

笑顔、気持ち悪っ！笑顔作るの下手過ぎないか？にたあ〜という擬音がふさわしい口元、目が開ききって、鼻の穴も1.5倍。

「はいっ！」

綺麗に直角に真っ直ぐに手を上げる。開いた脇を手で隠す。背筋も伸びた。

とりあえずですね、クールダウンしてください。はっきり言って未だに同じクラスメイトである、有田、という人であるとはまだ信じていない。僕の記憶が正しければ……。

場の空気が冷めたところでもう一度訊ねてみる。

「そう」

だって、顔違うし。

「は……」

またくりだしそうとする一発を、もういいです、と声を張り、な

んとか不発で食い止めた。

僕の記憶の中の有田さんは、美人ではなく、一言一言が異様なま
で大きい声で反応する、天然で元気な女子であり、少なくともここ
までムスツとしていない。常に笑顔が絶えない、そんな印象。何も
考えていないような、どんな些細な事にも全力で驚いて、一度僕の
話を聞いてくれていたときにも一々大声を上げて反応してくれ、話
し手としても随分いい気分になんてくれた。成績は僕の下に行くぐ
らいで、よろしくない。今までの彼女から見えた知的な部分はまっ
たく醸し出されていない、そもそも睨むなんてマネしない。そう、
別人というぐらいに重ならないのだ。もちろん変なふざけをするも
ない。そう、あと、あの子は、めがねっ子だったしね。

違いすぎる、どう信じろってんだよ……。

・お笑い（後書き）

- ・最初はカクダさんの詳細をどんどん一太くんが訊いていく、そんなのを考えてたんですけど、途中に、別に伯父じゃなくてもいいんじゃない？なんて閃いてしまったので、サチさんが登場。
- ・長いっすね、この回も……。だらだらだらだと……。

・シロ(前書き)

・この回について作者から一言
「裏題は“カクダさん(後編)”です」

・シロ

今日は伯父に、何を訊きにきたんだっけ。

新学期初日である今日、いつもの通りに伯父の家に面白い話を聞きに僕はやってきた。だが、今までに無い例外に遭ってしまう。初めて、いや初めてではないけど、割烹着姿の和風美人が悠然と目の前に立ちふさがるも無視して通り過ぎるのは敢え無く失敗して、実はその人はお笑いに極端過ぎるほどのこだわりをもつお笑い職人であり、話を進めようにもなかなかボケの一点張りや、勝手に一人でコントをし始めたりし思うようにことが運ばず、僕は無駄に体力を消費する羽目になった。で、相手もスタミナ切れか、少しずつまともな話をしてくれるようになり、訊いてゆくと実は、僕と一緒にクラスの人の有田さんであった、らしい。僕が知ってる有田さんとはまるで違うキャラクターに正直、聴いただけでは一切信じることは出来なかったのだが。ここからはおさらいじゃなくなるけど、証拠を僕に持つてくる、といって席を立ち研究室を出て行った。現在、僕は、一人、研究室にて思想中である

ようするに今は、有田（仮）さん待ちの状況で、僕は楽になる体勢、頼杖ついてぼーっと向こうに見える薬品の棚を眺めている。ようやくありつけた小休止に、全力で体と頭を休めるため全思考を停止させ顔の力が緩んで口が開きっぱなし、今起こっていた奇妙な変人との遭遇で疲弊しきっている。こうして待っている時間はカップラーメンの麺が程よく延びるのを待つよりも長く、あの似非家政婦さんは自身の身分を証明するための物証を用意するのに手こずっているみたいだ。さすがに一人のときでも、お笑い魂を爆発させているとは思えないが、ただ、そうただでは再登場しないであろう。絶対と呼ぶに等しい確率で、目的不明の何かを仕込んでいる、ここま

で時間が掛かるのは他に理由はない。今までの事柄を考慮した上で
の断定だ、間違いない。

脱力中の僕の口から滴がにゆるんと垂れそうになり反射的に腕で
拭った、それと同時にドアが開き誰かがまた来たことを知らせる。ま
あ誰かは、99%、いやわざわざ%で表す必要はないか。そう、わ
かっていたその通りの人物が、相変わらずの昭和の空気を振りまき
つつ有田（仮）さんが、お盆に湯気立つ湯のみを二つ乗つけて、静
かに研究室へすり足で入ってくる。ここでお盆を吹っ飛ばして僕に
向け、熱々の湯のみが飛来し直撃を受けた後に、あまりの熱さにた
まらず座ったままの状態からその場をジャンピングし、その反動に
よりいすが転げたのはいいが、運悪くそいつの足が僕のスネに直撃
して、当たった箇所を押さえてもだえ床を転がり狂う、といったよ
くある熱湯芸リアクションを繰り広げる、事はなかった。何も、特
にはなかった。

有田（仮）さんが煎れてくれた緑茶は程よく熱くて、口の中では
茶葉の風味が広がって、のどを通った後も苦味がかすかに残り、う
まい。あ、（仮）はもう外しとこう。

「確かにお茶をぶっ掛けてしまうのは面白いけど、まだ素人さんに
無茶はさせてはだめ。エンターテイメントはお笑いだけでないの、
トークも重要」

もつとも遠い席にわざと座った先ほどとは違い、僕が座る真向か
いに有田さんは座っており、僕が予想していた展開を話してみると、
軽く握った手をアゴに添えて相変わらぬ無表情でとても重みのあ
る格言を述べる。

僕はもう、すでに彼女が僕のクラスメイトである有田さんと同一
人物であると納得している。有田さんはまず、自分の生徒手帳を取
り出し、中にある身分証明を僕の目の前に広げた。ただこれではま
だ納得していない。で、次に愛用の赤フレームのメガネを掛けて、
まとめていた髪を解いて、しかも表情まで、いつもの学校で過ごす

時の様なスマイルをとってくれた。目の前に“メガネでセミロングの底抜け天然娘”、有田サチが出来上がった。さすがに、ここまでされれば認める。格好については未だに割烹着姿ではあるが。

それで今は、その、僕がご存知の有田さんが、いや、ただ違うのが、もう笑っていない。結局、彼女にとっては感情を表すのは苦痛のようで、僕が納得したのをいいことに顔の表情がさっきの冷徹に変化してしまい、残念であり奇妙で仕方ない。しかもよく見る赤メガネとの組み合わせがより冷たく思わせてしまう。

「今日も博士に、伯父さんに用があつたのでしょうか？用件だけでも教えてもらっていい、よければ伝えておくけど」

勝手ながらに詮索をしていると、まさか彼女から話を戻してくれろとは予想だにしていなかった。とてもありがたい申し出で頼むべきなのだろうか、と思うような用件でもないので丁重に断り、伯父が戻ってくるまで待つ意思を、普段見たく僕らしいくだけた口調で伝える。

「今日、伯父さんが戻ることはないわ」

軽めに驚いたとついに、お、とふと声が漏れてしまった。ここ一年、僕が毎日のように訪れている間は一日中家を空けるようなことは全くなかったので、まさか、来て話をせずに顔すら見ずにこの家を後にする、このパターンに出くわすとは想像していなかった。こうなるを知ってしまったてはもういる意味がなく、僕のせつかくの野望が次回に持ち越しという、ややめんどい展開となるのだ。まあ、伯父の話は伯父がいなければならぬのが絶対条件であるので、あっさり諦めの空気に浸れて切り替えも簡単。

僕は無言で席を立ち、通学カバンを手に持ち速やかに退散すると決めた。

「え、もう帰るのはもったいない。きつといつものパターンでここに来たのだったら代わりにワタシが受けて立つけど」

いすをしまい、扉を開けようとする寸前にこの言葉を聴き、僕は

帰ろうとしていた足と手を止めた。

なんて挑戦的な……相手は伯父ではない為、アホ話が成り立つのかどうか（アホ話自体が成り立っているかどうかは知らん）わからないが、正直悪くない提案ではあるよな。だが、今日振るつもりだったテーマが、なんだっけ。意気揚々に変なハイテンションだった感覚はまだ残っているのだけど、そうだ、カクダさんがどんな人なのか、だ。いわゆる探偵みたく、プロフィール調査、もしくは周辺の聞き込み。今後、仲良くなっていくには相手の詳細をくわしく知るのが重要で、そう、好きな色を知っておけば服装とか持ち物とか合わせたりして、なんだ、「私たち、気が合いますね」的な展開が狙い通りに訪れてくれる、はず。いやまあ、色々だよな。

「立ち止まって……、ワタシでは伯父さんの代わりは勤まらない、とお思いかい。一応、キミが今までどのような話を聴いてきたかは粗方存じているけど」

僕が用件を思い出したりカクダさんとのあま〜い妄想に浸る最中、有田さんのやる気の漲りっぷりが背中にバンバンぶち込まれてくる。やる気満々なのは有難いけど、いやちよつと待てよ、有田さんは以前まで大学の寮に住んでいた、と言ってたよな。だとするならば、これはけっこう都合なのかもしれない。

とりあえず、僕は扉手前で突っ立ったまんまなので、その場で体の向いてる方向を回れ右で方向転換させ、超計算高いボケかましさんのお顔を拝見するとしよう。クラスで見る顔なのだが、やはり普段とのギャップのせいで単なる無表情顔でも怒りの感情を抱いているように見えてしまつて、目が合えば、ビビる。

「いつも基本こうだから、怯える必要はないわ」

有田さんは僕のビビりっぷりを察してくれるのはいいけど、必要あつてできる芸当ではないし、そう言ってくれるのであればクラスで見るときのように、満面の笑顔で接してほしいところなのだが。

「あれは、シヨーだから、今はする気しないの。勘弁してほしい」「
今が素顔、と？」

「そうなる」

どこぞの怪盗やらスパイヤらを思わせるほどの変貌っぷりをする理由が、見世物として。怪しいことこの上ない。

「別に今が素の状態であったとしても、クラスの中で魅せる自分もワタシ自身がしようと思いつき、起こす行動のひとつであるわけで、特におかしいわけではない。エンターテイメントを極めようとする上での一つの特訓と知ってくれば、別分、変に考える気はでないのでは？それに、今は気を許している状態、キミは目の当たりしている。もう少しは誇らしいと思っても言える」

どこをどう捻れば誇らしいのか、疑問というより馬鹿馬鹿しさがこみ上げつつ、どんどん彼女に対する変人指数が上昇させていくのみ。

「それより。どうするの、話、するの？確かに、博士の代わりが務まるほど実力を持ち合わせてはいない、だけど。ここからはワタシからお願い。ワタシに、試させてほしい、比べてほしい」

いやいや、伯父の場合は計算ではなく天然だし、何をそこまでアホを敬愛するのかがいまいち理解しがたい上、試すもなにも僕が求めるは単なる面白話である。大体だ、今日のテーマとなる“カクダさん”についてはいつもと違い、どうでもよくない、最重要事項であるので、逆にふざけられると非常に困る次第。どうもこの調子で進めればでたらめを教えられそうに信用できない。もし今日がご期待通りのアホテーマならば、ご期待通りに話を持ち込むのであるが、いや、別に脇道にそれ行っても問題はない、事はなくて僕自身のモチベーションが維持できそうもないから、ご期待通りは受け入れるのを遠慮したい。

僕は、その辺の意向を、おずおず申し入れるとした。まだ、聞きたいことは伏せたまま。どうせ言ったが言った、ま、否定されるかな。

「真面目に……ボケなし。つまらん！」

ほれみたことか。思っていた内容にプラスで怒鳴り口調、やはり

諦めたほうがよさそうだ。

僕は意識せずについたため息を吐いて再度回れ右を実施、もうやる気は空になり、その空の容器に帰る気を満タンに補充完了、これなら5分で家に着く自身があるな。

「ちよつと待つて、悪かつたから話だけでも聞かせてくれないかい。もちろん、過度の受け狙いをしようとはしないわ、なるべく」

真面目に聞く、と言う事か？どうも不安が感じられる言い方だな。しかし二つ存在する彼女両方ともに人をあざ笑うような真似をするとは思えない。ましてや、僕をもお笑いへ誘おうと仕掛けるぐらい、僕に避けられるようなことはなるべくは心がけてくれるはず、まあ弱みを握り、それをダシに仲間を引き入れようとの魂胆があるのかもしれないが、そうだとしても、そうなった場合はこちらが開き直ればいいことであり、普段関わりの薄いカクダさんへの悪影響は皆無と考えていいはずだ。どう転ぼうが最悪の事態でもなんとかできる自身がある。そうなれば、まずは先に話を進めるために、有田さんがどこまでカクダさんについて把握しているかの確認が必要である。

またも三度目となる回れ右、三回もすると動きもしなやかかろやかで余裕が残り、制服がジャケットならば意味無くババツと羽織りなおしてカモン！……とする自分が頭をよぎりつつも、特に平凡にやりきり相手に顔を合わせてこの話をどこまで可能な人物かを訊いてみる。まずは遠回りに、以前に住んでいた大学の寮について。

「そうね、博士も在籍している大学よ」

となると、カクダさんもいる。ではもつと踏み込み、理学部に就いてだ。

「確かに博士は理学部の担当、だけどその中でもごく小さい脳化学科ね。それ聴いてキミの話に係しているかちよつと知りたい」

逆に質問返しを受けてしまったが、しばらくそれを我慢してもらおうよう願い出れば、仕方ない、と少々不機嫌そうに承諾してくれ、続けて伯父の活動にどれだけ参加していたかを訊く。

「いや、話にできるほど手伝ってない。ざつと2、3回くらいだしワタシには一切理解できない難しすぎる内容、実験中にする博士の話術を学ばせてもらったくらい」

おお、以外にも大学での伯父はマトモであるようで、僕の中の伯父像を照らし合わせて不一致で想像が困難極まりないのは、それはどうでもよく僕が聴きたいのはこれからの、カクダさんについてだ。ここでやっと有田さんに対し、カクダさん、と口に発し本題へと話題を移行させられる。

「カクダ？」

さすがに2、3の関わりではわからないかな。

「もしかして、角田白花？」

僕は再びもといた席に着いて、有田さんとの会話を本格的に再開させる。一度手に取った以来、変わらず置かれたままのお茶は口も含むとやや温度が冷めて飲みやすくなっていった。一口ごくりと頂く。同じよう有田さんも茶を口にした後、ほっと一息をもらっていた。

さあようやくながらの本題と取り掛かる。やっとで憧れの人のフルネームを存じるわけで、もうすでに軽い興奮を覚えている自分を、客観的に観察すれば憎たらしいほど気持ち悪いと判る。けど止められないのが男の性、順調に気持ち悪くなるうじやない。

カクダさんの字をどう漢字で書かれるのかを、訊くと、だ。かくだしらはな、かくだのかくは将棋で馬に成れるあの角で、かくだのだけは田んぼの田。しらはなは白い花と書いて白花と書くらしい。名前だけだともものすごく御堅いお嬢様なイメージ、イメージではなく実際にそうなのかも、僕としてもまだ一回しか出会っていないのだから名前からでも存分に角田さんへの勝手なる人物像を膨れ上がらせる。黒髪のポニーテールからは快活さと聡明さを醸し出させて、歩幅が大きいしなやかな歩き方からは自信が溢れ出ている。彼女の説明と同時進行で輝かしき人物像を構築させていく、これはあくまで想定なのではあるが、いい。こうであってほしいという願望はと

つくに通り返け、こうであるものだ、と自分の中での勝手な確定が
どんどん決められる。もはや、こんな理性すら、馬鹿馬鹿しい。

「キミ、よく人から、思ってることが顔に出てる、と言われないか
い」

依然に無表情な有田さんの発言により、やむを得なく角田白花人
物像構築妄想思考を一時中断。なに、思ってることが出るとよく
言われるか？言われないね、初めてだ。

「……………キミはもつとクールな男性だと勝手に決め付けていたみ
たい、予想以上の人間味豊かなキャラクターで面白い。一応忠告さ
せてもらうけど、お顔、緩みすぎ。えろ」

え、えろ！？

……………自重いたします。衝撃は気分を凹ませるほどのダメージでは
あったが、この一言のおかげでなんとか我に帰れた。

「でもこれで、今日キミが尋ねたいことはほぼ分かる、角田白花に
ついて教えてくれと言いたい、そんなところ」

はい。実にその通り。

「好かったね。ワタシ、白花さんとは同室だったから大体は知って
る」

同室、と言うと？

「ついこの間まで住んでいた寮はすべて二人部屋、もちろん女子寮
だから異性と同棲なんてありえないけど、それはどうでもいいとし
て。えっと、ワタシが寮に入るための手続き、大学に在籍する生徒
でないから色々面倒が立て続きに起きて、その色々のうちに博士と、
白花さんのおかげで入寮が許可されて、一緒に暮らすとなった、そ
んなところ」

色々、色々……………。

「聴きたい？話すとき長くなるし、キミの聴きたいこととはほとんど
関係ないと思う。でも白花さんとは親しいのはわかってくれたので
はないかい」

まあ、なんとも羨ましい環境で過ごしていたのであろう、僕とし

ては、その色々よりもその後の暮らしぶり（モチ白花さんの）や癖やスキルや生態やら彼女を構築する要素なら何でも、は、けっこう危ないラインを越えようとしている自分を自覚してしまった、気付いたなら即修正、自重自重。どうも自身の安定感を欠く思考をそのままにしては不味い、頭を冷やしの確なるそして常人として受け入れられる程度の疑問のみに整理して、有田さんに拒絶されないように言葉を紡がなければ。

のどは渴いてないのだが、どうしても喋るだけだと手が余ってしまい、ついお茶を手にとってしまう。もう折角取ったのなら最後まで飲んでしまおう、なので残りの分を一気飲み、思いのほか量があり、とどめの一口と思った分は僕の口のサイズより許容オーバーになり湯飲みには口つけたままで少しだけ戻し、外に噴出してないか不安にもなり反射的に前屈みとなってしまう。気になる外への噴出し具合は0に近いようで、僕の見た限りではお茶一滴も零れた様子は無い。ほっとしたところで微々たる量が残った湯飲みを、大きな、黒で、シックな大テーブルの上に置いてみると、有田さんはすかさずそいつを乱暴に取り、立ち上がったかと思えばもう研究室を出ようしているところ。

あまりの素早さにリアクションも間々ならず、僕はただ、何、何、と大きな目のうわ言を発しているしかなかった。向こうはそんな僕に一応気に留めてくれたみたいで動作を一時停止。

「おかわり、行ってくる」

そう言い残し、僕の応えも聞く間も与えないうちにとっと研究室を出て行ってしまった。

有田さんが二杯目のお茶を持ってきてくれて、別に願ったわけじゃあないけど、仕切り直しという形になり、やっとで今日の本題に元の状態で気持ちを入れられる、そんな形が出来上がった。ちなみに、湯飲みに触ってみるとやっぱり熱い、淹れたてだ。

時間は只今1時を少し過ぎたくらい、時間の感覚は早すぎず遅すぎずで、時計を見た僕は一人で納得をしてしまった。有田さんは袖口が閉まっているゴムの部分になって痒いらしく、繰り返し繰り返して両手のゴム部分を指先でまくってなぞってなんて仕草をしている。

そのぐらいの時に僕は一つ目の質問をした。角田さんと有田さんの現在の仲についてだ。

「悪くはない、むしろいい。今日も登校の時にたまたま出くわして途中まで話してたし」

そりゃあ一緒に暮らしていた中だから当たり前といえは当たり前、聞くまでもないことだが一応は聞いておかなければ話が進みにくい。ここをかわきりに、そして小出しに角田さんについて訊いていった。簡単なプロフィールに、最近の出来事、様々な好き嫌いといった基本事項と呼ぶべき情報をどんどん探り、大体は人物像が見えてきていた。

最初の僕のイメージは活発的で、でも清楚。有田さんから聞き出しているうちその考えが変わる、なんてことはなく、実にその通り。上京したての有田さんの世話をしてくれたのはほとんど角田さん。有田さんは、一言で恩人と幾度も彼女を称していたからにして、とても面倒見のある、心の透き通ったお人であると僕の中では確信にいたる。

有田さんは普段、角田さんを“シロ”と呼んでいるらしく、ついで、有田さんは“サツちゃん”と呼ばれているらしい。僕もそう呼んでいいのだろうか、と有田さんに訊くと、

「それは本人に訊いて。ワタシにはどんどん（サツちゃんと）言うて」

なんて言われて、結局遠慮しておいた。

角田さんはお料理もお得意らしい。有田さんが部活を夜遅くまで

して帰る時間が遅くなった場合、彼女曰く平日はほぼ毎日らしいが、そんな時でも必ず自分の分の夕飯が用意されていた。帰ってくる時間、午後の10時には角田さんは就寝していたので、自分でレンジでチンして食って風呂に入って寝るパターンが決まっていたと、そして、朝出るのも早い角田さんは朝ごはんも用意して出て行っている。メニューはいつも違うものでどれもおいしいから、常々満足していたそうだ。

あの麗しの角田さんの手料理を毎日でも食べられる環境にいた、との事實は僕の中で妬みが生まれていたが、

「もうここで住むのが決まったから、もう食べられない」

とぼやいた時、心の奥底でふと、ざまあみろ、と悪の声がこみ上げたのを押しつぶして理性により制御しきった。今時、ざまあみろ、はないわ。

実は伯父とは遠い親戚らしい、との有田さんの話が持ち上がった時、僕とも血の繋がりが?!と危機しき疑問が同時に上がってきたが、ここは冷静に対処、遠い親戚なら大丈夫じゃん、そう遠くを何故が見据えるよくわからない結論に、ほっと息を吐いた。

どんな話題が持ち上がるのか、一人の男子としてでも知っておきたい一つの知識を訊く、内容は至ってごく普通のもの、互いの学校での出来事、伯父の話、勉強や部活、最近の流行、聞いた中で特に以外と思えるものは一切なく、マトモであるという認識が一層深まる。ただその後だ、有田さんから少し気になる一言がポンと聞こえてしまう。

「シロはいつも笑顔、ワタシと違って本物の、ね」

未だに機械的な凍てつく無表情であるのは変わらないが、うつむく視線に落ちた声のトーンがやけに寂しさを感じ、今日初めて彼女から感情を捉えた気がした。言葉の意味自体も実に興味深い、ワタシと違う、まるで自分とは対称と呼ぶかのような、ある意味悩みで

はないのだろうか。

僕にこの言葉を応える術が見つからない、ただ俯いている有田さんの顔を眺める、そんな僕はどんな面をしているか、同情か？

数秒の沈黙、ちらりとこちらを見た後に軽めにため息が出しもう冷め切っているであろうお茶を一口し、一時の無音をやめる声を発する。

「どう？結構わかったんじゃないかい。キミがシロに惚れる理由はわかる。ワタシが男だったなら結婚していい、そう思うよ」

僕はまだ、角田さんを好いている、そう彼女には教えていない。まさかそこまで顔に出ていたのか、いやもう、えろ、と言われた時点でわかるか。でも、よくわかったね、なんて一応言ってみる。

「もう博士から報告済み、それが無くても最初のときに比べて、シロのことを話す度にテンションが上がっていくのがわかったから、結果論だけど気付く自身はあった」

僕の中では……………ダメだ。諦めが肝心、下心まるだしの自分は寺に修行行かない限りは治りそうもないし、かと言ってわざわざそんなのをする体力も気力も忍耐力もかね添えてはいないので、煩惱を受け入れつつ角田さんに好かれるよう今の情報を元により一層の努力を欠かさずに、でも修行僧みたいな人がタイプと言われれば考えるでもないか。まずは頭をつるつるにしなければならぬ、うゝむ考えどこだ……。おお、ないないだらけだ。

まずこの迷走は切り上げる必要がある、そうまだ未開の方向へ持つていくのは危険、な上に取り返すのは無理だ。切り返す糸口として先ほどの言葉の出だし、博士からの報告済み、との一言を気にかける。博士って、伯父、あの野郎！口軽すぎる、あとで始末が必要だな、明日ぐらいすぐ実行に移れるために計画を思案しよう。計画は一つや二つでは足りないな、以前目前でスライムをぶちまけられた借りを兼ねて、複数の作戦を用意、草案なら膨大にあるんだ、どう組み合わせて……。

「おーい、勝手に妄想に耽るのは後にして。ワタシの提示したお

願いはどうなったのかな」

お願い？まさか、さっきのコンビ組め、てヤツなのか？あれって、まだ活きてるの、もうとつくにどうでもいいものだと考えていたが。「そうそれ。人から情報買っついて、逃げる、つもりなのかい」

微かな含み笑いから、無言の圧力を感じられる、だとしても忘れかけていたこのお笑い職人の暴走は僕の着いていける範囲として、頑張りを見せたとしても力尽きる、絶対。これでマフィアのような格好をされていたら有無を言わさず承諾しそうものだが、ここは運良く昭和な割烹着姿がやわかく雰囲気をほぐしてくれて、些細な余裕ができる。この余裕で考えるは、学生の条件提示にもっとも無難な選択がある、それは、奢る。世の中、金だよね、しかし今現在の財布の中身が残り千円札が1枚と小銭ジャラジャラと心もとないけど、なんとかなる。はず。

「却下」

おう！？少しくらい悩め、言った瞬間に断られたぞ。

「一日パシリも却下」

おう！？その手があったか、無理なら言われる前に思いついても無意味か。やむを得ないな、上辺だけでも了承して、後は適当に誤魔化しつつやり過ぐすでしょう。うまくいくかはこの際考えず、この場をやりぬければそれでいい。

「……どうも胡散臭い。でも言った以上はしっかりやってもらうから」

よし。う、目つきが怖い、見ないように、心がける。

「領いてくれたけど、しぶしぶね。確かにこれから先ずつとの契約だから……」

これから先ずつと？！

「さすがに嫌々だから、嫌よね。そこで、ワタシもキミにとって都合のいい契約をしよう」

契約って言い方が、堅い。ホントに有田さんだよな。

「何を今更。で、もう一つの契約は……キミを全力でサポートする」

サポート？

「つまり、シロと結ばれるよう私は全力を尽くす」

いやしかした、僕の記憶が確かなら、角田さんは彼氏さんがいらつしゃるはずではないかい？

「なんで微妙に敬語……その点については問題ない、あれは見た感じは若干溝がある。十分に勝機はあるから、積極的かつ度胸よくやれば、問題ない。恋愛なんて奪ってなんぼ」

僕の言い方にちょっとつっこまれた、のは良しとして、とても凄まじい恋愛論をこの方はおっしゃりましたけど。まさか、以外にやり手？だったり。その辺の確認はどうしてもしなくては、今の発言に説得力は皆無に等しい、なので失礼と思いつつもこれまで経験を聞かせてもらいますか。

「ない」

あまりにさっぱり言われ、はい、言葉が出てきません。

「……ふっ」

向こうも無言でじっと睨みをきかしてる、かと様子見ればいきなり鼻で軽く笑われる。どういう意味が含まれているか、僕に対してか、自分で言ったことに関してか、思惑はどうにしろ僕には不愉快に映ったのには変わりなく、そのクールに鼻で笑ったのについて何がおかしかったのかを問うようについ発してしまふ。

「あら、ごめんあそばせ。別にキミがおかしくて笑ってしまったわけではなくってよ」

急にお上品な態度を。口調もそうだけど、口への手の添え方や淑やかに微笑む表情の作り、また別の人が突如現れて、も、だ。それは割烹着の有田さん一人でしかないんだよな。

「キミは、彼方はどんな人が好みでしょうか。いえ、結婚するならば彼の、ベストの意見を聞かせて下さいませんか」

それを聞かれた僕は、答えたらどんなメリットがあるんだ。まったく、不可思議極まりない。

「ワタシは、彼方が求める究極に成れる。これぐらい、してもよろしいのでは？」

つまり、端的に言えば、角田さんは無理だから、有田さんと僕の彼女になろう、と。

「イエース」

そうか、ここはあれだな。コントだな。お笑い職人モードが再開し、またも僕を試そうとする魂胆だな。だいたい、ここで彼女になるという提案を真面目にするような人にも思えないし、疑惑だらけのうちに変なキャラを演じているのは、受け狙いをしていると断定するべきだ。よし、無視だ、無視。

「イエース」

黙っている間に先ほどと一字一句、アクセントも一緒の言葉を、ただ両手ダブルのグーサインを付け加えて言ったのが、よりさつきよりもパワーアップしている。

……………伯父も来ないし、帰るか。

「ちよつと、気を悪くしたなら謝る！今は確かに冗談だけど、シロと仲良くなれるよう、サポートするわ」

足元に置いたカバンを持っていす引いて立ち上がるうとしたときに彼女は言った。

やっぱり冗談ですか、と分かりきってはいたけど、しょぼい僕は相変わらずやや凹む、のを気付いた時点で少し本気にしていったんだなどのことも気付き連鎖的にまたやや凹む、故にけっこう凹む結果に。これで引き返すのはかっこ悪い、と判断した僕はかまわず進むと決め、扉のドアノブに手をかけた。

背後からは有田さんがよく透る張り上げた声でまだ何か言っている。

「それに、コンビを組め、とは確かに言ったけど、単なる極論。ワタシに、博士と接しているときのようにならなくてもビシバシやってほしいだけ。キミ本来のツッコミをしてくれるようであればそれで

いいの」

訳のわからない、コンビ組め、との要望よりかなり柔らかいものになったな。博士と一緒に、伯父のようにツッコめとは、かなりひどい扱いにしてしまいそうだが、いいんだろうか。ただ、角田さんと仲良くなれるチャンスを与えてくれるのは、僕にとって実に都合がよい条件だし、まあ悪くないか。

わかった、なんて軽く頷いておく。

「本当に！？じゃあ早速ワタシが作った漫才のネタ合わせを」
言葉は続いていたが、僕はもうそのとき既に研究室より外に出てしまっていたために必然として扉しまる。まあ、正直うるさいしこのままだと面倒というのが大半の理由であるが。

その後、伯父の家を出てすぐ振り返り、立ち止まり、思いつきり疲れてみる。眺める目の前には伯父の家が建っている、そして思ったわけだ。

厄介な住人が増えたな。

それは僕の口からも出ている、そうさせるほどの強烈さだった。有田さんは確かに僕と同じクラスで面識もあつたし、その時でも充分の存在感とカリスマ性を放っていた。それはそれで、その人が伯父の家に住み込むとなると結構な衝撃が僕の中で起こるのだが、その人がその人ではないかもしれない、言ってる自分でも訳がわからないがそのままのような存在の人であるという事実が、また僕をくたびれさせる原因となる。

当分は伯父の家に行くの止めてこうかな。

これも僕の口から出ていた。

何にしる、今日はもう疲れた。早く家に帰るが得策だ。

伯父の家からは歩き出し、その目の前の道を横断したぐらいの時だった。

「おーい、イッチー！」

一太、いちた、いち、イツチー、だからイツチーと呼ばれるなんてそんな解説は今はどうでもよくてまず誰がといや聞こえてくる方向が伯父の家からである時点であの人であるに違いないがいつのまに割烹着ではなく街行く若者らしい緑のパーカーにデニムのボトムを着ている有田さんが何故に躊躇なく僕に突進しているかがまず先に考えるべきで結論急いで対処せねばなら、いや今の踏み込み具合やけに強いつて飛ぶのかこっちに飛んでくると当然その先は僕しかないんだからぶつかるだろう。

はい、直撃、ダイブ。頬にアナタの眼鏡が当たって痛いです。

「さき行っちゃうから、ちと走って疲れたあ！このままで、おんぶだ！」

僕は、嫌だ、と叫んで、しがみ付く子泣きじじいみたいな妖怪を無理やり引き離した。

まあ妖怪とは言ったものの、それが、僕が一番最初に接した時の有田さんそのものだった。引き離すのに成功し、急に冷静になった僕の頭は、何故かこう訊くよう指示をした。

それも演技？

そう僕がそう言った直後、彼女は今日一番の満面の笑顔を見せた。「キミの家まで送ってつてあげるから、有難く思え〜」

完全に僕の質問はスルーですか。でも、少しだけおかしいのに僕は気が付けた。

以前の有田さんにキミと呼ばれた事は一度もない、僕の気のせいかもしれないが。だが、事実なら、それが有田さんからの答えだったのかもしれない。

結局、有田さんは僕の家まで着いてきた、途中も色々騒がしいもんだったが、その件はよしとして。

僕の家で晩御飯まで頂くのはどうなんだろうか。

つくづく、この人は侮れない……。

・シロ（後書き）

・もしかしたら、ポリウムだと伯父を越えているような気がします。

・“変幻自在のお笑い職人”有田サチ。現実に存在していたら、面白いですよね。

・ガードレール(Quercitron) (前書き)

・この回について作者からの一言
「長いので分けてました」

・ガードレール (Question)

僕は高校二年生であるのは、もう、成り立てであろうとも既に自覚ききつて、すなわちどうでもいい。二年生に上がるうとも、僕の朝の環境は寸分も変わるはずなく、あまりに潔い目覚まし時計のせいで、かれの仕事を止めた時点で、遅刻への条件が一つクリアされる。

次なる条件は、僕のママンである。当然、こう呼んでいることなんて現実においては一回も実行したことはない、これは僕の、僕自身を盛り上げるためのジョークであり、これまたどうでもいい。呼び方の話はどっかに捨てておいて、時間が立てば、機械的なタイミングであるお方はやってくるわけだ。用は言わずもがな、目覚まし時計と一緒に。ただ、こっちは潔くない。

「いちたあ！起きなさい、一太！」

ドアを叩いていると思われる衝撃音、怒鳴り狂う咆哮。五月蠅い。学校へ行く、という目的が存在する日に関しては、ほぼ十中八九の割合でこんな事をされ続けている。どれだけやられたか、もはや通算回数を計算するのは野暮である。しかしまあ、僕も馬鹿なもので、この煩わしい、母の行いに対し何らかの対策を講じようという意思は一切無く、やられたらやられっ放す、そんなような塵が積もってエベレストができる状態なまま毎朝を過ごしているのだ。

だからだ、僕もまた籠城するしかないんだ。部屋の中？違う、布団に決まってるだろう。ドアに鍵なんぞ付けられることが許されるはずない、軽々に母はあつてないようなドアを通過して、僕が籠っている布団という名の天国に、殴りこみをしまいとするのだ。しかしながら悲しいかな、僕の気力と根性が入る器には眠気が存分に溜まっており、こんな状態では既に加速しきった母の相手が勤まるはずが無い。

まだ結果は出てないが、もう言える。三秒後には僕の天国は剥ぎ

取られるのだ。あ、もう、“だった”になった……。

毎朝、ウチで行われる定番行事の後は、それはもう忙しい。

起き上がり、自身を目覚めさせるための儀式を行い洗面所へ。残念ながら僕の部屋は二階に存在し、洗面所は一階。このパジャマ姿で駆け下りる様子は傍から見れば壮絶極まりないであろう。辿り着けば早速、蛇口から流れ出る冷水を顔に三発。その後は三十秒ほどで歯磨きを済ませ、いや一応は律儀に三十秒を数えつつなので、ほどは、入らないか……どうでもいい。次なるは顔中がビショビシヨなので、タオルががつりは入っているカゴから一枚取り出し、そのままの勢いを保ちつつ顔を拭う。儀式はこれにて完了、ジャスト一分に違いない。

そして、また自宅の階段を駆け上るのだ、当然ここも壮絶に違くない。たまにテンションが高い場合は、だああ！、と大声を発する場合もあるが、幸い今回はそのような状況に至るほどに追い詰められていないので比較的、冷静に急ぐことができています。

二階の自室に戻れば早速、学校指定の黒服に颯爽と着替える。あえて学生服と呼ばないのはブレザーへの対抗心によるもので、学生服という響きがいまいちかつこ悪いと思い、親しき友人と共にこれからは黒服で呼称するようにと協定を結んだことに由来する、のもまたどうでもいい。知ってる。

さあ、着替えたら今度は荷物の確認、まずはかばんの中を確認し、昨日配られたプリントを抜き出す作業を開始する。昨日は短縮授業であるくせに、やたら無駄紙を配るのは環境破壊の一環なのだろうか、なんてグローバルな考えが僕の中で過ぎる。抜き出したプリントは適当にゴミ箱へ大部分は捨てていい。ごく一部に今月の行事の内容とか交えてあるのでその辺は第六感に頼り、捨てずにその辺へある程度カバンの中身が片付いたら、今度は教材を入れる必要が……あ、壁に貼っておいた時間割、まだ一年のときのやつだ！でも大丈夫、きちんと生徒手帳に時間割は記入してある、抜かりはない。

さつと胸ポケットから生徒手帳を取り出し、ペラペラとページを捲って時間割表がある箇所を探す。所要時間、約三秒。我ながら実に手馴れている、なに、今日は木曜日だからだ……これ、とこれ、あれ、よし、おーけー！

カバンへ適当に荷物を積み込み終われば、もう出るだけだ。またも階段を駆け下りて、突き当たる右が飯食う部屋、その逆に玄関へ通ずる、ということとは、左に曲がり後はよりよく急ぐ。

「朝ごはん！」

これまた、重要事項を忘れたままであったな。母の一声に気付いたエネルギー補充は、いつも毎日欠かすわけにはいかない。食卓のある部屋へ、テーブルの上にはおにぎりが三つ並んでいる。僕はこの中の右にあるおにぎりを選択した。中身は、まず間違いなくシヤケである。いままだ確認する必要はない。

「弁当、忘れるんじゃないよ」

あまりに地味すぎる赤茶色のだばばトレーナーが似合いまする愛しきマママン。テーブルに肘掛けて朝のニュースを眺めている、その姿、一言で言うと、脱力。いやいや、御端麗でございますよ、だらしないなんて口が裂けても言えませんですよ。それまたまた、どうでもいい。とりあえずご忠告はきちんと承りつつ返事、後は学校へ赴くべく玄関に出て行こう。お、おにぎりは口に啜えてしまおう。

玄関から外に出れば、日差しが眩しい。朝だね、と余韻に浸る暇は一秒たりともない。実は残り時間にさほど余裕無く、午前八時目前、別に歩いても間に合うのだがペースを落とすのは辛い。おにぎりも立ち止まって食うなんてマネはできない。歩きながらハイキング気分登校、日本の平和を思う存分感じるひと時。ちなみにおにぎりの中身はめんたいだった。

これが僕の毎朝の風景なのだが、本題となるのはここからだ。

学校へ行くには指定の通学路なんてものがあったりするが、それ

と別に、それぞれの家からの最短ルートなんてものがあるはずだ。まあ僕に関して安全なんて全く気にしない質なのでいつでもこのルートを通らせてもらってる、が、気になる点が一つ。

ガードレール。

こいつが無い道なら思う存分に横断するが、ただ一箇所だけ存在する道がある。

ここもまた、わざわざ回り道をせず直通で通り抜けたいが、この存在が立ちふさがり、いや、別に乗り越えるのは可能なのだがどうしても人目を気にしてしまい、結局妥協する羽目になる。

邪魔だ、意味がわからん。安全？馬鹿馬鹿しい。

こうなれば、伯父に聞いてみるしかないだろう。この形状とか、存在意義とか、せめてうまく乗り越えることが可能になるよう最先端技術が発展しろってんだ。決して、前に、乗り越えようとした時に躓いて転んで恥ずかしい経験があるわけでは、決して、決してない。……ないよ！

特には大した変化も感じられなかった高二初の通常授業、もはや下校時間に至り、今更に帰るための片づけを開始している。

教科書やらノートやらの荷物を詰めながら伯父の家へ行くことに少し考えてみよう、いや、普段ならこんなわざわざ考えるまでもないのだけど、今までと少し状況が変わってきているから。

今日、やっぱり気になった有田さんの様子。伯父の家でのような想定不能な行動を起こすことなく、いかに、私、天然ですよ、と言わんばかりの言動をして、僕としてはなんら面白くはなかった。度々見て、ふざけてるなと思った限り。ただし、以前に言った、これからは伯父の家で暮らすという事実がほんとなら、行きづらい。何故かよくわからんが、そんな気分だ。

でも確か、部活やってるんだよな？もう運動部も文化部も活動しているようだし、先月でも出くわす事はなかった。きっと帰りは遅い、はず。じゃあ考える必要なんてない、が、ふと思いついたが僕

が行く理由は、面白話を友人に話すため、だ。親しき友人たちみんな、もう違うクラス。どうもこのクラスは相性が悪いのか、僕は馴染めないような気がする。馴染めたとしても、そんなすぐに開放的になれるほど僕は、自分から親交を深めるような積極性はない。第一、帰宅部。関わりすらない。たまには真っ直ぐ帰るのも悪くないかもしれない。

よし、今日は真っ直ぐ帰ろう、最短ルートで行こう。そうさ、たまにや暇を満喫しよう。

カバンに荷物のすべてを入れ終わり、授業の疲れを深い一息でふうっと天井に向けて放つ。

よし。

気合が入った。下校という運動は結構苦痛だから、僕にとってはカバンの持ち手を握り、今から進むべき真横に立ち上がるために体の向きを変えると、だ。そこで僕はようやくながら人がいるのがわかった。気付く前に、勢いでその人を軽く蹴ってしまったくらいだ。誰か確認する前に足が当たってしまったことを、まず謝った。

「……なんで謝るのかな。そこで謝れると後がやりにくいんだけど」
げ。

有田さんだった。もちろん割烹着ではなく、女子高校生の姿。中身はどうかは、いやもうなんとなくわかる。あまりに感情が存在しない表情は、僕には怒っていると捉えた。そして、その通りかどうかを訊いてみた。

「今の“げ”って、なに？」

見事に質問を質問で返されてしまった。会話として非常に困るパターンではあるけど、僕が訊きたかった答えはおのずと見えるので問題はなく、また別の問題が浮上してしまうわけで。

しかし、その問題は、まず脇に置いておいて、と、彼女が訊いた疑問についてをうまく誤魔化すのに徹しなければ。

どつ言つべきか……。

つい、ね。げ、と声を漏らしてしまうほどに……大がしたい。だから、先行くね。そう言うついでに、大、の意味がわかるようにお腹を押さえてみたりした。

「もりもり？」

もりもりです。とは言つたけど。

……なんだこの会話。わけわからん、女子と一対一で話す内容ではなかるうに。

「急いで、トイレの前で待ってるから」

いや、それは少し恥ずかしいんだけど……。

「じゃあ校門で待ってる……あ、ダジャレじゃないからね」
わ、わかつてるさ。

思いたいことは山ほどある。その前にまずトイレに行かないといけない状況になってしまったので、危機感ありありの体勢を保ちつつ目的地に向かうとした。その間、以外にも彼女は気遣うような言葉を掛けてくれたのだが、もう少し感情込めて言ってもらいたかった。

トイレの個室に籠り、左腕に着けている時計で確認したとこ五分が経過。そろそろ出て行ったほうが良さそうである。

しかしまあ、有田さんが待つ理由はやっぱり伯父の家なのだろうな。トイレの中でも考えていたが、他に理由がありそうにない。

ホントに大をした訳ではないが、一応トイレのレバーを捻り、水を流しておく。してないのならそのままでもよかるう、という考えが過ぎるも、やっぱりやらなくてはいけない気がする。なにより落ち着かないし。兎に角だ、ここを出ようじゃないか。

個室を出て、これまた一応手を洗い、適当にパツパツと払い自然乾燥。ハンカチなんて持ってない、ジェントルの資格なしだ。

トイレのすぐ横に置いていたカバンを持ち、忘れ物があつたような気がしたので少し教室を見るも、やっぱり無かつたのでそのまま

昇降口までの道順をやむをえなく進むとした。

下駄箱にて。

つい最近場所代えしたての靴いれの位置、当たり前だがそこに愛用の白のスニーカーが入っている、だから帰るからこれを取り出すのだ。白のスニーカーは学校指定であり、僕の趣味ではない、が、金欠により他にズックが所持していないのが現状、悲しくていたたまれない。

さつさと靴を履いてだ、ここから下校を開始となる訳だ。外に出れば、まだ昼らしき太陽の位置、これを確認できる時点で、もう晴れであるのはわかる。

さあ、校門に差し掛かる。

僕と同じ帰宅部の皆様がちらほらと校門から外へ歩いていく姿が見える、中には待ち人ありなのか時計を見て周りを見渡す学生君も居たりする。ちなみに僕が警戒する存在はまだ見えない。

校門通過。

学校を囲むように建つ塀にもたれる、有田さんを発見。しかしだ、その周りにはあまり親しくもない女の子集団が取り囲み、表情を見るための顔はここからじゃ見えない。ありきたりなパターンだろう、一緒に帰ろう、とかを言われていると思われる。

これ見て安堵する僕。

今日はなしでよろしく。と、心で呟きつつ前を通過、全く有田さんを見ずに通り抜けたので、向こうが気が付いたかはわからないが、クラスの時のテンションで声を張って会話しているので、さすがに僕に気を回す余裕はないだろう。僕と違い、人気者だなあ。

今回、テーマとなるはずだった問題のガードレール前に差し掛かった。さあ、どうする。

越える、越えない？

この答えを出すには僕のコンディションによる、今日はもう疲れ

た。じゃあ、急がず回れ。ということ、横の交差点で信号待ちをする事となった。

横断すべき道はうまい具合に車が通るので、なかなか交通法を違反させてくれない。まあ、時間がたてば通れるから構いやしないが、「道が違っけど」

今日は帰るからこれでいいんだよ。

と、自然な流れでどなたかと会話してしまったって当然もう相手はわかりきって有田さん、ここで存在を認識できた僕はさっと声が聞こえた真横へと顔を向けた。

「どっついうこと？」

順当な返しですね、はい。若干だけ怒りが込められているらしく、普段より何オクターブか低い声で訊いてきた。寒気が、したような、寒いかな、今日。

目を逸らした先、進むべき方向は青、と信号は示してくれたので僕もその通りその指示に従おうと歩みだそうと、一步、一步が、出ない。前へ進もうとすれば何故か首元が窮屈になってしまう。

……それは何故か？ふっ、説明するまでもない、有田さんに襟を掴まれているのだ。

僕が少し前に出ようとすれば、多少はブレたりするはずが、微動だにしない、全く、だ。まるで岩に襟を引っ掛けたのかと勘違いを起こすぐらいだ。

ふと浮かぶ感想。力、強いですね。

「ありがとう」

当然、声低め。もう怖すぎるので強行突破なんて野暮なマネはしない、諦めて伯父の家まで同行しましょう。

僕は青信号が点滅するも急いで渡ろうとすること無く、来た道を引き返す。自分のあまりの弱さを恥じた一瞬。

かなりの遠回りとなった伯父の家への道のり、その途中。当然ながら横に有田さん、背が僕とあまり変わらないのがこれまた心苦し

い。ちなみにもう、首は掴まれていない。

「今日、何を話すつもりか。先に聞かせてもらっていいかい？」
ガードレール。

有田さんの声の調子から、機嫌のほうはかなり上向きのように実に安心した。ただガードレールと答えたやいなや、以前見た、そつと握る手を口元に当てたあの考え込むポーズを見せ、完全一人状態である。このままにしておこう、少しのショックも与えるのはとても怖い。

このままの状態、伯父の家に着いて、ドアを叩いて、伯父が出てきて、研究室に入って、いすに座る、この一環の流れすべてずっと保ち続けていた。

恐るべき集中力……。

「一太よ。この子、どうしたんじゃ。かちんこちに固まるとるぞ。それは知らんよ。それより、この子、有田さんがここに住んでるってホント？」

「まあ、そうなのじゃが……。わしとしてもどうも気が進まなくてのう、やむなくでのう……。」

かわいいじゃない。

「うゝむ……。」

珍しく、唸って困ったように見せる伯父。もしかしたら結構やらかしているのかもしれない、この有田さん。

固まり続けるこのポーズ、解けたとき、なにが起こるかな。

・ガードレール(Question)(後書き)

・伯父の立場がありません……。

・ガードレール(Occie) (前書き)

・この回について作者からの一言

「こんなに“ガードレール”と打ったのは初めてです」

・ガードレール (Once)

今日テーマとするのは、ガードレール。

伯父には朝の出来事等を含めて、ガードレールの、主に日頃の恨みを込めて話をした。

聞いている伯父のリアクションは、僕が話をする間は相槌をし、ときたまホッホーと微笑むのみ。普段の伯父と比べると、実に落ち着いた、普通の白アフロのおじいちゃんにしか見えてこない。

もしかすると今回はそんなに面白くないかもしれない。ただこの伯父の様子、とりとめのない話をして終了し、僕が見てきた中でもワーストスリーに入るくらいのも、つまらない伯父を見ることになりそう、少し心配になった。

現在、伯父の研究室に、僕、伯父、有田さんがいる。

僕と伯父は、扉側に一番近い右端に、向かい合わせで座り、有田さんは扉の前に立ったままだ。

「すいません博士。ワタシ、着替えてきます」

僕が今回、ガードレールに対する疑問の話が丁度終わろうとするとき、有田さんは、一つ断りを伯父に入れて研究室から退出した。

扉が閉まるのを、伯父と一緒に確認。伯父も相当意識していたようだ。そしてタイミングを計ったかのように、今日最大の笑顔をむき出し、全力で僕に叫んだ。

「では。ワシも着替えようか！」

そう言って立ち上がる伯父を僕の目の前を通るタイミングで、こちらから、と、ひらひらとする白衣のを掴み、止めた。

ここで順当なのは伯父のささやかな抵抗が起きる、はずだったが、素直に伯父は元の場所に座ってくれてしまった。

この様子、完全に伯父の調子が狂っているのを見て取れた。

「……今日は、ガードレールについてじゃったな」

話始めの前に、空いた妙な間が気になりはしたけど、そんな気ま
ずさは、きつと話が進むうち消えてくはずだろう。キレが無いのは
いつもだ、面白くなかったら、それはそれでいいんだ。

「ガードレールの……え、まずは、形について話をしようか」

形ね。確かにガードレールには、なかなかシユールな、くねり具
合をみせるタイプが多い。僕の天敵となるガードレールもそのタイ
プだ。

「一般的にガードレールは歩道を歩く人、または生物を猛追する車
や、迷走する猪を守るために存在すると言われておる」

人と生物とで区分してどうする。それと、猪から守るって、そん
な稀なケースを想定してガードレールを作ってる馬鹿はいない。

「甘いの一太は。日本において、轢かれるランキング三位はシゲ
じいさんのリヤカーと猪は同率じゃぞ。車、自転車、猪、こんなも
ん小学校の社会で習わんかったか？」

そんなもん習うか！

いやそれより……シゲって誰だ！

「それは、言えぬ」

拒否かい。

急な昇り調子に、妙なボケを連発で放ってくる伯父。いつもより
ピッチが短い。

一つ一つに向け、ツッコむ余裕を作るのが難しく、先ほどの不調
っぷりが嘘のように感じる。

いや、ここは負けてられない。ボケのマシガンと化した伯父を、
全て迎え撃つ。

なにその秘密事項！？と僕は言った。

シゲの存在を隠そうとする伯父に、僕からの渾身のツッコミだ。

「ふっ……若いのう。今は、その若さをぐつと堪えなければならん。
何故ならば、なんもないからじゃ」

ひでえ……。何も無いのでは、もう訊き様がないじゃないか。深

いこと言ったみたいに、しみじみした微笑がやたら癪に障るが、無理やりほじくってたら大惨事に成りかねないので、苦虫をつぶした気分の表情をわざと出して、そして黙るとした。

「それはよしとして話を戻すか。あのセクシーな形についてじゃ」「セクシー、どこが？」

「だからそんな細かいことを訊く出ない。よし、さて、ガードレールが何故あの形をしているか。一つの理由は、手抜きじゃ」「まるで聞き耳を持たないとはこのような状況。

「あの形がな、力学的に絶妙なバランスをしておるんじゃ。表側からぶつかる衝撃を、どのような方向からでもうまく分散させる事により、歩道側へ力を運ばぬようにしておるのじゃ」

一応はもつともらしい事、言う。が、しかし、だ。

中身が薄すぎる気がする。それはもう、その薄さは金箔に匹敵する。鼻息だけで吹っ飛びそうだ。

でも、僕が一言を告げる場所も隙間も見当たらないので、先にとんどん進むよう言ってもらおう。

「しかしだ、別にバランスを求めんでも、もうちと頑丈な造りにすれば歩行者も守れよう、さき言った理屈はのう材料をケチる為の口述でしかないんじゃよ」

はいはい。

「要するに、手抜きじゃ」

でもあの形にするのって、それなりの技術がいると思うけど。そう考えたら、うまく補う、という風でもいいんじゃない？

「んななもん。こう、ぐいっとな。やって曲げるんじゃ」

いつか見た、素手でフライパンを曲げる人の物まねをする伯父。立ってまでするか、なんて言うのも野暮。僕には、この老人の行動に気になる点が。

貧相の上に携帯のバイブ並みの震えが、見た感じそろそろ病に冒されつつあるのだなと錯覚させる。

僕はそれを見てつい、大丈夫？と心配した。

「な、失敬な！なにも心配されるような事はしとらん！」

あらあら、そんな大声出すと、ぽっくり逝っちゃうよ？

「ぐ、むう……そうじゃな。血圧も高めじゃから、頭の中の血管がプチっとなるかももう」

高血圧を自覚する伯父は、僕のジョークをうまく受け、結局は二人で、笑いあう結果に。なんたる、実に楽しい。

しかしまあ、こうもリラックスして、幾つも馬鹿話をした伯父には我ながら分かり合うなにかが存在する。

する必要のない緊張、厄介が消えて周りが見える。相変わらずのハムスター、僕の視界にちらついて仕方ない。当たり前が戻る、何十回も繰り返した調子を發揮できそうで、嬉しくなった。

と、いうのもごく僅かなひと時に過ぎず、こんな相変わらずも馬鹿馬鹿しく笑うのは、彼女が再び登場することで、終焉を迎える。その瞬間の伯父は実に滑稽、目に光が失うその姿。哀愁漂い、ちょっと絵になっていた。

僕と伯父が作り出すまるやかな空気を、一瞬にして突き刺さるような辛い空気に変えてみせる、とても厄介な存在。それが有田サチ。別に彼女の事がいやな訳じゃない。むしろ、その笑顔を見ればこちらまで微笑ましい感覚に陥ってしまうほど。まるで、呪術のような……禍々しいな存在だ。ただ彼女の中身は、かなり熟成されたお笑いマシン。

これは過言じゃなく相応。

あの無邪気に触れ合う姿も、狙っているのだから、無邪気もくそもあったもんじゃない。邪気の塊、怪しいこと極まりない。

「お茶をどうぞ」

研究室に入ってきた彼女の姿は、制服から、いつぞや着ていた割烹着姿で現れた。顔は、冷徹なる無表情。僕の警戒は緩みはしない。

「おお、すまんのう」

伯父が湯飲みを受け取る際、有田さんの目が、一瞬だけ光ったよ

うな気がしたが、伯父が取った湯飲みはそのまま何事なく口へ運ばれていった。

「まず、と音をたてお茶をすすする伯父。」

「キミはお茶を淹れるのがうまいのう」

「ありがとうございます」

面白くさせようとするとする気配が一つも無かった。別に悪い、と言うわけではないけど、観ていて、普通に接して、僕が介入する隙が見えない。これでは、流れで普通にお茶をもらってしまっじゃないか。いやだから、それで、まあいいんだけどさ。

で、順から、伯父の次には僕となる。

「アナタも。どうぞ」

いや、アナタ、て。

「ほう」

ほんのりと驚くな、伯父。

普段からは、絶対に呼ばれない名称で僕を指す。その事を平然と口走る有田さん、あまりにキラーパス過ぎる。

伯父も、そうか、と納得を示し、僕は妙に恥ずかしくなった。

どうしろ、と言っただ？

当たり前前みたく言われた。この対処は否定でいいのだろうか？

恥ずかしさゆえか、体温の上昇を肌を感じ始め、思考も徐々に単調に、顔にも力が入ってしまう。

「ななな？」

有田さんの目が笑い、それは明らかに僕が滑稽であることを指しているに違いない。ウケ狙いでもなく、意識してでもない、だからその瞬間はどこに向けてか気付かなかった。

なにぬねの、の“な”を、僕は狂ったかのようにひたすら連呼していたのをようやくくながら気付いて、とりあえずこれ以上可笑しくならないよう止めた。

呼吸も一緒に。

呼吸を止めてしまえば、当たり前前だが酸欠状態になる。解決方法

は……………どうするんだ？

おい、苦しいぞ。

「吸え、一太。息をせい」

伯父による、息をせい、の助言で呼吸を再開させることが出来た。よかつた、やっぱり僕は肺呼吸じゃないとこの世界で生きてられないのを再確認する。

そして僕は喋るのも可能だから、あなた、と呼ばれたのに対して
嚴重注意をすとした。

「そんな、気分、だったから……………」

何故、切なそうに言う？しゅんとするなよ、俯かれたら、これまた僕が悪い風ではないか。

単調に心では言葉を紡いでいるようにしてるが、これは平常を保つためで確かかつ適切な処置をこなすにはなるべく感情を殺し目の前に起きる事柄を処置していくの一番重要で、まあ、心境はこんなことも言つてられないほど訳のわからない罪悪感なのだから、もう、いいや……………。

「ごめんなさい……………」

これまた僕は悪化の一途を辿るような言葉を発したみたいで、両手に抱えるよう持っているお盆に向けて顔を伏せて、誤りの一言を僕に掛ける。との事になれば、いやもうなってるんだけど、僕の立場は悪人が当てはまってしまい、さらなる罪悪感が、内のほうからもやもやと。

もう、どうにでもなれ。

「そんな事はどうでもいいですけど、博士。お話はどこまで進みましたか？ワタシも参加させてもらえませんか」

へ？

「おお、いいぞいいぞ。好きな場所に座りたまえ」

僕の横の席に座る有田さん。

「どうしたの？」

ああ、完全におちよくられている訳だ……………。

はあ〜、自然と深い吐息が出てしまうほどに、どつと疲れが溜まった気がする。左側からは視線を感じるものだが、気には留めず、伯父にガードレールの話が続けるよう催促した。

気分最悪で、ガードレールに話は戻る。

「そうじゃな、一つの理由は、手抜き。次には」

「あの、ガードレールの手抜きとはどのような……？」

伯父の話が始まる手前、最初から参加をしていない有田さんは、内容をリピートするよう伯父に申し出た。

「うむ、ガードレールのあの形の理由の一つとして」

なんだか同じ話をしそうであると直感した僕は、さっさと切り上げてもらうよう促す。有田さんには悪いけど、色々と面倒だからな。

伯父の様子は、それでいいか？と言う代わり、有田さんの顔を見た。僕も見えた。

「……いいです。先の話へお願いします」

「うむ。では二つ目の理由へと話を続けるぞ」

伯父が、先へ話す、訳を宣言に、僕は、うん、と。有田さんは、微かに前へ頭を動かし、はい、と答えた。

しかしまあ、有田さんは心境は不本意なのか、伯父に答えた後に、誰も居ない方向の先にある真っ白なホワイトボードに向ける。そして、舌打ちのような音が聞こえた。僕は彼女の相当な醜い顔がなんとなく浮かぶ。聞こえてしまったのだから、一応、舌打ちをしたかどうかを確認してみると、だ。

「気のせいよ」

この言葉だけが彼女の声で聞こえてくるのだ。

相変わらずホワイトボードを見ている。もしかしたら僕が想像してる以上の酷い顔なのかもしれない。

これ以上、有田さんに構っては後が怖いので、ふと伯父へ目を向けると、アゴをしゃくらせていた。

アゴをしゃくらせるといふ伯父の行動に理解は必要ないので、し

やくれ白アフロにはとつと話を始めてもらおう。

「この道を往けばどうなる事か」

いや、その顔のまままで話すな。

「ガードレール。一般的に見られる、あのセクシーなくびれの理由
二つ目は、だな」

だからどこがセクシーよ。

「はい」

意見があるのか、有田さんは手を挙げた。

「おお。答えてみよ」

「はい。その二つ目は、セクシーという点に着目した上、恐らく、
溢れ出す男性諸君の欲情抑える為に国が提案したと考えます」

真つ直ぐに、そして澄み渡る声で有田さんはズバつと発言した、
で、真面目に何を言ってるんだ、この人。当然、僕は呆れた。

「惜しい。ガードレール考案会議に、キミのような意見も拳がった
が、それは却下となった」

いや拳がらん拳がらん。と僕が言っても、二人の意識は僕から何
キロも離れているみたいで、どこかデットヒートを展開しているよ
うだ。

すなわち、僕がどんなに制し様が、話が変わるのは一切有り得な
い。

しかし、だ。このまま放浪させては、他の人に話するのが不可能
となってしまうので、ちよくちよく小言程度に横槍を入れる、と心
掛けよう。

「何故却下です!?!」

ヒートアップする有田さん。ずいっと顔を、斜めの対面にいる伯
父に寄せ、声を張り上げて訊く。ぼーっとしてる僕の顔に近づき、
髪がそつと当たったが……。

で、どうした。仕方なく、気持ち右へ、寄るしかなくろう。

「ぶ、野暮だね。世の男性諸君は既に間に合っておるのじゃよ」

深い意味を追求しようとしなくておくれよ。

「そんな馬鹿な！」

誰に对し？

有田さんに向け、意味深に微笑む伯父。いや、他にフレーズが思い浮かばなかっただけで、きつと意味は潮干狩りシーズンと呼ぶほどに浅いはずだ。あさがザクザクだ。いや、これも意味はないんよ。

「イツチー！間に合ってるなんて、そんなはず無いわよね！」
へ！？

鬼の形相で僕を見ないでおくれ、それより、僕の常識から到底理解し難い話に、意見が拳がるはずが無い。端的に、訊くな！そう言いたい。まあ、無理ですけどね。

で、まあ、流れが続くように適当に言おう。

「間に合ってる？！イツチーも?!」

間に合ってるんじゃない？では適当過ぎたかな。

驚く有田さんは、よく目が開いてらっしゃる。

「くっ……。フリーだと思ってたのに」

いやフリーよ。

ん、何が？知らんよ。この自問自答に、当然意味は無い。

「だったらどうやって抑えているというの!？」

え、言うの？

ここから先、言ったら間違いなく年齢制限に引っかかるよね。

「そうじゃな、引っかかるのう」

伯父には理解されてる。

以外にも動揺していない自分に、年齢制限の心強さが染み渡る。概要をくわしく話すとなったら、いくら有田さんでも女子なのだから、恥ずかしいさ。

もう非常に話すとき苦しいので、この辺は省略。

何故省略？察してくれ……。

「イッチーのえるさには感服したところで、博士。そろそろ教えてくれませんか、二つ目の理由」

もう何も言いたくない……。

僕の心境は、ズタズタ。年齢制限関係なく、現実が存在する。伏せるのは簡単。知らせるか、知らせないか……。

むなぐら掴まれた辺りからもうプライドないなあって思ったんだ。誰に？だから訊くなって……。

・ガードレール(Once)(後書き)

・今回珍しく、読み直しをしました。

・ガードレールの話、次回にも続きます。

・ガードレール(Twice) (前書き)

・この回について作者からの一言
「ある意味、SF」

・ガードレール (Twice)

一応、再確認しておこう。これは、ガードレールの話である。

ガードレールの話にも関わらず、僕の……いいや、もういい。僕はもう、二人の様子を眺めているだけとしよう。もし飛び火しても、うまく流す。今からの、僕の決心である。

「今回はガードレールの話であるな」

「はい」

「これ以上は一太を傷つけないようにな」

「はい、以後気をつけます」

「では、二つ目の秘密じゃ」

「お願いします」

二人の対話となる展開となる。

僕は、だ、二人の間の邪魔にならないよう、二人の手の届かないくらいの（得に有田さんからの）距離を開けて座っている。僕が手を伸ばしても、テーブルには届かない。これではお茶が飲めないが、茶を飲むよりわが身を守るほうがよっぽど大切なので、まったく気にならない。

馬鹿話をする伯父は、いつもなら、ニヤけてばかりのはずなのだが、今の様子は違う。変かもしれないけど、何故か妙に真剣に見える。両手をテーブルに置いた状態で指を絡ませ相手である有田さんを見据つつ、今までに僕が感じることもない威厳あるオーラが出していた。

有田さんは、その伯父にまっすぐ向き合い、背筋を伸ばし、合わせた両膝の上に両手を乗せるといふ、見るからにとっても正しい姿勢

を保っていた。

……おい、僕。もう一度確認するぞ。

今日は、ガードレールにまつわる、凄まじくどうでもいい冗談ばかりの馬鹿話だ。なんら真面目である必要はないのもちろん、こんなのをきちんと聞いても、自分がこの先における人生には絶対のためにならない。はつきり言って、僕のすぐそばのカゴで過ごすハムスターを観察していたほうが、よっぽどマシだ。

そして只今、一匹のハムスターがお水を、カリカリと音を立てながらお水を飲んでおり、観てて和んでいる。二人の異常なほどの真剣な空気に参加するより、こっちのほうがいい。僕がマトモだと思えるがためにもね。

「実は、あの日本中に存在するガードレール全てにはな、ある災厄の時に對する役割があるのじゃ」

始まった。災厄……出だしから話がでない。

「ある……役割……」

「そうじゃ」

おい、きちんと馬鹿話をしなさいよ。と、思うだけ、参加はしないさ。ああ、ハムスター可愛い……。

「本来の意味、表の上では車道から車が出ないようにするためのガードであるのだが、実際は違う。いや、確かにその役割も担っているが、ただとって付けたような意味でしかないんじゃないよ」

「形状や配置場所を考えても、充分、理にかなった役割だと思えるのですが。そうではない、と」

「そうじゃ」

ガードレールの意味ならもうここで話は終わっていい。ここからはおふざけだ、真面目に聴くだけ無駄ということ。僕は承知している。まあ、ハムスターを可愛がりつつ眺めつつの、ながら聴衆であり続けよう。

「では博士。お聞かせくださいませ。その、ガードレールの本当の意味を」

「よかるう」

そういった伯父は席を立ち上がり、ホワイトボードの前へ移動した。

「ガードレールは全国いたるところに存在する。知っているね、有田君」

「はい博士」

「一太はどうじゃ」

訊くまでもないだろ、知ってるに決まってるさ。

「そうか、安心した。一太は知らないから故に無関心かと思っただが、しかと聞いておったか」

別に、僕に構わないでどんどん先に進んでいってくれよ。

「わかった。ではまず、結論から言っしまおう。ガードレールとは、日本のある危機から守るための兵器なのじゃ」

「え、ええ!!」

僕も有田さんと一緒に、ええ!と言っただけど、もちろんきちん和白けているよ。場を盛り上げるためのエクストラも楽じゃない。

「しかし博士。その、ある危機とは一体……。キタチヨウセンからのミサイル、まさか最悪、再び戦争が起こってしまう予兆があるとか?!」

「いいや、そんな些細なものではない」

おいおい、戦争を些細と言いつるなんてココだけにしてくれよ。

「そんな、戦争すらも上回る災厄が訪れるのですか!」

なんでそんな剣幕な表情ができるんだよ。有田さんは、どこぞのミュージカルや昼ドラばりに大袈裟なアクションをしている。はっきり言つて、無意味だ。ここまですると僕の白け度合いを助長するだけしかない。もしかすると、本人が楽しいだけとか?まあ、暖かく見守ってあげようじゃないか。

ほら、伯父がでたらめを語りだすぞ。

「いや決まったわけではないのだがな」

「まさか、隕石が迫っているとか!？」

「近くはなったのう」

「近い……宇宙からなんらかの、少なくともプラスでは無い何かがある……来るのですか」

「そうじゃ。わし達はそれを、アルマルゲドンと呼んでおる」

「あ、アルマルゲドン……!」

「映画とかにもなったのう、同じ名前のものが。ただな、あれは被害を免れることが出来ておる。現実にはそんなハッピーエンドになる可能性はゼロに等しい」

「しかし、アルマルゲドンでは小惑星だったはず、隕石です」

「うむ、原因……そのような物理的な現象ではない」

「物理的ではない?」

「怪光線、みたいなものかのう。実は最近、最近といっても半世紀前の話からではあるが、人工衛星での観測である数値が異常なまでに膨れ上がってきておるのじゃ。それはある特定の場所から、異常なまでに粒子が生まれ続けているのじゃ。そこには何も無いはずで、粒子を発生させるための要素が一切見つからないのにも関わらずのう」

「い、今はまだ、何も起きてないのですよね?」

「今のところは、そうじゃな。数値上は異常でも現象としてはなんら変化は見られん。宇宙においては普通な出来事なのかもしれぬ。ただ、その行く末を推測するとだな、ある現象が起きうる可能性がある」

「もしかして、ビッグバン、ですか」

「……似たようなものかのう。ビッグバンと呼ぶにはかなり小規模なものではあるが、星を生み出すには充分のエネルギーが生まれるのは確かじゃ」

「そんな……地球の近くなんですよね」

「そうじゃの。地球は間違いなく巻き込まれるが、しかし、数百年後の事じゃ。わしらが生きている頃はずっと平穩のままじゃから」「でも、だからと言って!」

おっと、いちおう今回だと、もう二度にもなるけど確認しよう。これはガードレールの話だ。

オーケー?

「待て、落ち着くんじゃ有田くん。別に世界が崩壊するかもしれないというのに、対応処置をなんも組んどらんわけではない。そういうった現象から、被害を最小限に食い止めるためにガードレールがあるのじゃ」

「は、博士!」

有田さん、目、輝きすぎ……。

ん、博士、いや伯父がホワイトボードに手をかけ、表裏をひっくり返した。きれいに回ったホワイトボードは……三百六十度、端的に一回転。だから、結局意味なし。伯父は半回転で止めようとはしたみたいだけど、思いのほか勢いがつきすぎ、止める手は空振ってしまい、勢いあるホワイトボードを慌てながら身を挺して止めていた姿は、実に滑稽だった。もちろん、思つくそ笑ってやったけど、何故か有田さんに睨まれてしまったので、ビビって止めた。

かっこつけすぎて失敗した伯父は、再度ホワイトボードを回す。ゆっくりと。

裏帰ったホワイトボードには、枠の中にぎりぎり入るほどの、そんなけっこう大きめサイズの日本地図が張られていた。

「見てのとおり、これは日本地図じゃ」

おう、わかるわかる。

「ガードレールは道筋に、こう……全体的に、人の血管のように細部まで通っておるな」

「はい」

「ガードレールは日本の全てに通ってある」

「博士。もつたいぶらずに、お願いします」

「ほう、すまんすまん。実は、アルマルゲドンのポイントと、地球の公転と自転が重なりあうあるポイントにくると、日本とアルマルゲドンは一直線に結ばれる瞬間が生まれるのじゃ。これもまた数百年後の話ではあるがの。そして、その時に」

その時に、なんだよ。その、タメは。

「もしかして、日本を……」

「もうわかってしまったようじゃのう、有田くん」

そう言った伯父は、ホワイトボード横にある棚の一番上の置いてあったスイツチらしきものを手に取る。

おいおい、なんか飛び出るんじゃないだろうな。

「そう。日本中のガードレールからじゃ、アルマルゲドンを打ち消す光線を発射させる！このようにのうっ！」

おお、日本が光った。でも光具合は大したことないし、部屋も明るいから、どうということはない。ビビって損した。

「しかし博士……」

「なんじゃ有田くん」

「それですと、日本は無事ではないのでは……。相当なエネルギーが必要となるはずですし、だとするなら、地球がアルマルゲドンの脅威から逃れられたとしても、日本には何らかの被害が生むのでは」

「ふふ、そうじゃな。日本はのう………放棄するのじゃ」

「そ、そんな」

おお、昼ドラチック。
「心配せんでもよい。日本列島が消滅しようとも、その頃にはニューヨークパンとして代わりになる人工島ができておるはずじゃ」

「でも、なにか虚しいです博士」
「それが、運命、というものじゃ。守るということには、必ず何かの犠牲が必要となる……」

「うっ………博士えー！ー！」

「有田くん!!」

なんだ、これ。

目に涙を浮かべた有田さんはいすを跳ね飛ばして伯父の元へ一直線に駆け出していった。伯父は飛び込んでくる有田さんを胸に受け、頭を撫でている。

ええと、ガードレールの話だよ、これ。

なんか物凄いことを語り合っていたけど、全部が、でたらめの、嘘の、三文芝居である。まったく馴染めていない僕は、抱き合う二人の様子を、ただただ遠くから見下していた。

ホントあほだ、この二人。

やがて、よくわからん話の空気から開放され、ようやく僕は帰れるときが来た。ちなみにここは外、伯父の門の前だ。

「もう少し、大切にしないといけないわね。ガードレール」

はあ……。

大切にしようがありませんけど?と言いたかったけど、まだ余韻が残っているのか、有田さんの目は少し潤んでいたのでちょっと止めといた。

かすかに吹く風によって有田さんの髪がなびいている。いやこれは思ったただけだ。意味はない。

「また明日、学校で」

お、おう。

有田さんの顔、無表情は無表情でも、今のは感情ある気がした。おかげで少しだけ動揺している自分を認識してしまう。

……ま、満足したようだし、いっか。

明日、学校で、もしこの話をするようなチャンスがあったら、もう少しアンニユイ感じにしておこう。僕には、昼ドラは出来そうにな
いから。

・ガードレール(Twice)(後書き)

- ・一太が言うようにこの話、でたらめですから。
- ・精一杯、それっぽく……。がんばったんだ、僕。
- ・……有田さん大活躍だ。よし、もっとキャラを増やそう。

・ 割り箸（前書き）

・ この回について作者からの一言
「 以外に痛かったです」

・割り箸

「ここに割り箸があります」

ああ、あるね。

日曜日、有田さんが元住んでいた大学の寮に僕はいる。なんでも荷物運ぶのを手伝ってくれと言われて半ば強制的に連れてこられたわけだ。

いやでも悪い気はしない。なんてったってあの僕の憧れ白花さんの部屋でもあるんだ。荷物運びでこき使われる嫌々感より、それを上回るぐらいの急上昇っぷりでここに訪れられる喜びが込み上げるってもんだ。ここまで僕がエロいとはな。仕方ないさ、男だしね。

ただいま僕は有田さんと寮のロビーで寛いでいる。けっこうふかふかなソファーに座り、ジュースまでご馳走になっている。やけに親切にする有田さん。悪い気はしないから、気にせず……だが、早く部屋へ行ってみたい。内心、何度もこう考えているのも事実。だから、これも、仕方が無い！ だろ？

「割り箸ってさ。色っぽいよね
いいえ。」

この発言の意味を捉えようとすると、間違いなくクエスチョンマークが乱発するので考えません。

「そう？この使う前のくつついてる感じとか……たまらない」
これ、何フェチと言っただろうか。割り箸フェチか、いやスタンダード過ぎるから……木フェチ、どうでもいいし……。奢ってもらった、このマンゴーヨーグルティーを一杯拝借しよう。

缶からマンゴーヨーグルティーが僕の口に流れ込みゴクっと僕の喉が鳴る。おお！初めて飲むけど以外にのど越しが良く、異次元の感覚が後味に……。ほのか酸味が、まるやかっぷり、マンゴーのさ

さやかな甘み、いいね！今度またこれ買おう！

「ごうやってさ、一番下を持ってさ両方にぐぐって引つ張って、ゆつくりこれやるとさ、ちよっとずつ裂けていくじゃない。たまらな
い？」

……いいえ。

なんで、たまらないの“い”を、言わば語尾を上げるのさ。この
会話に全くの意味が存在しないような気がしてきた。もっとマンゴ
ーヨーグルティーを深く深く味わいたいのに、割り箸に時間と労力
の割く理由があるか？大体さ。

なんで割り箸ここに有るの？

「イチチーが好きかなと思って持ってきた」

いや、好きじゃないですけど……。

「ふふ、ワタシにそんな冗談が通用すると思うてかい？」

……どう応えればいい？？普通なことを冗談と捕らえられると
何も話しにならないじゃないか。

言葉がつまる。何も言えないから、まあ、またマンゴーヨーグル
ティーを飲むとしよう。お、時計が見える。今、昼の一時か。腕時
計を付けない僕としては少しありがたい、中々この寮の管理人もや
るみたいだな。なんてったって、有田さんのすぐ後ろの壁に掛かっ
てるんだ、困ったら見るようにしよう。

「ねえ」

眼鏡を外しながら僕を呼ぶ。眼鏡、何故外す？よくわかるはずも
わかるうともする気はないが、何事も無難こなすがモットーの僕は
とりあえず、ん、と応えた。

「挟んでいい？」

「挟む？どこ？」

「お・は・な」

お、眼鏡置いた。おいおい顔近いぜ。寄せるでない。危機感を感じ

じるから後ろへ背中だけバツク。……いやそれより、おはなと今言われたな。挟む？おはな？なんだ僕の鼻を挟むのか。よくない！いややめる挟むな突きつけるな割り箸広げて痛いからってそっから力加えるのも止めてくれ食い込む！

「快・感」

だから早く離して食い込む血い出るよ絶対痛い痛い痛い！！

ようやく離してくれた。

ああ、ほらちよつと跡なってるし。ヒリヒリが凄い。

「今度は縦でいこう！」

ちよちよ冗談でしょ？縦で、てただ縦にしただけで構えさっきと変わりない。また、挟む！？

「さあさあさあ！」

早く荷物運びに行こう！僕は起死回生の叫びを上げた。

「……………ケチ」

いまケチ言った…………。

数分ほど通路歩いて、階段昇ってまた通路歩いて。寮の造りはごくシンプル。途中、花瓶に入った花とか置かれてるくらいで、他に飾りらしいものは見当たらない。思いのほか殺風景だった。とは言えこんなもんが普通かな、と納得したりもした。

お、部屋に着いたのか前を歩く有田さんが扉の前で立ち止まった。

「この部屋がワタシの、隣の隣の部屋です」

小ボケいいから早くお願いします。

「……………ケチ」

またケチ言われた…………。

ケチ言った有田さんはその先へ歩く。本当に隣の隣であったよう
で、一つ扉を通り過ぎて次の扉で止まった。表札には“KAKUD

A”と書かれていた。間違いない、真正正銘の白花さまのお部屋と
なられるわけですね。ちょっと拝みたい、けどここは理性でぐっと
堪える。

ただ、有田さんはすぐ入ろうとしない。そう思った矢先、僕のほ
うに回れ右をし、僕と向かい合う形になった。

「……割り箸、いいよね」

いや有田さんもう割り箸はいいですから中へ入ろうよ。

「いいよね」

首傾けてちよつと可愛く言ってみせても無駄ですから。僕は、割
りばし終了、と高らかに言って有田さんの両肩を持ってまた回れ右
をさせた。こうしてまたもドアと向かい合い。

「ケチ」

あ、また言うか！

しかし、ケチと文句を言うが、思ったよりすんなりドアを開ける
有田さん。

・ 割り箸（後書き）

・ 一時間ではあっつと書き上げました。

・ 長かったり短かったり、こーゆーの、どれくらいがいいものかよくわかりません。

・ブラジャー（前書き）

・作者からの一言

「意図的にパンティは出してません」

・ブラジャー

無機質な素材で象られた膨らみには、妙に興奮を覚え、個人によつては色合いにより、興奮する度合いは変わり、はたまた、その無機質の膨らみ収集するコレクターも存在する。しかも、そのコレクターについては、他のコレクターとは違い、中古品を集めようとする。勇猛果敢に未開の地に入り込み、いつ来るかわからない危険と隣り合わせに、目的の品を血眼に探し回る。そこまでして集めたいか？ これ。

ブラジャー。

僕は今、まさしくその未開の地に入り、完全に八方塞の状態で、逃げようにも逃げれず、とはいえ、使用済みブラジャー集めるような変態コレクターとは違い、僕の場合は、自ら、この場所この部屋に飛び込んだのではない。もちろん、きちんとした目的合つてのことであり、僕がいるにもかかわらず、ダンスに仕舞わないで、部屋の中で悠然と部屋干しされているブラジャー4つを目の前に対峙するこの状況は、冷静であれ、と言いつつ、やはり、無理だ。ただ、目を伏せ、何故か甘い香りのするこの部屋に、正座でじつと息を潜めておくしかない。いや、別に隠れているわけではないし、きちんと角田さんにも承認済みなんだから、こんな、テンパってまでおかしい独り言を言い思う必要はないだろ、と思つても、やっぱり、平然とはしてられない。ここだけの話、僕の股間部分が、ひそかにざわついている。完全に起き上がらないよう、余計な力を入れず、リラックスした状態を保っておこうと、深呼吸をすると、部屋の甘い香りが、鼻から嗅覚を攪りつつ僕の体内に入り込んで、脳が、甘い香りを存分に感知してしまい、結局は逆効果で、もう、正座を解けない状態となつてしまった。完全に目覚めて手ごたえ充分だ。二人よ来るな、あと三分。三分待つてくれ、頼む、まだ呼ばないでおくれ。そして、その三分で煩惱よ、治まってくれ。

ひとまず、冷静になる必要があるため、ここに何故来たか、その経緯を頭の中で浮かべていくことにしよう。きっとそうすれば、多分、冷静さを取り戻せるはず。

まず第一にここに来た理由、そう、有田さんの荷物を運ぶ手伝いをしに来たんだ。いつたい、何を運ぶのか。どれくらいの大きさ重さなのか。僕には一切知らされてはいない。きわめて怪しいことこの上ないのだが、荷物が、ここ、角田さんの部屋にあると聞き、僕は即答でOKしてしまったんだ。

なんだ、下心丸出しで、こうなることはなるべくしてなつたんじゃないか。との自分自身へのツツコミをしても、もう、今現在はおまーい角田さんの匂いが充満している、この部屋に侵入してしまつてるんだから、やむえず、ひたすら独り言をつむぐ、しかない。

でだ、部屋に訪れたときに、当然のように角田さんは部屋に居たんだが、なんと、裸であった、らしい……。あのいや、これは部屋に入る前に有田さんが中を確認し、とりあえず、僕が寮の廊下で待っている際、聞こえてきた、有田さんの発言（やっぱりすっぱっぼんだ、と呆れたように言つてたな……）により得られた情報であり、本当なのかどうかは、この目では一切確認していないのが、非常に残念。なので、本当かどうかは定かではない。に、しても非常に信憑性は高い。この後、当然だけど、僕が部屋に入る際には、彼女は、以前見たときのような、カジュアルな普段着っぽい格好であった。その点は、非常に残念であるが……いや、何言つてるんだ。あらずじを語るんだ、彼女の、その、格好についての、期待と論議を語るときじゃない。ヤツが、復活してしまうじゃないか。

部屋に入ると、中はワンルームの、広さは大体8畳くらい。有田さんが居た頃には二人で使っていたであろう、二段ベッドが端に置かれてある。部屋ど真ん中には、丸くて小さいめの青色のテーブルがちょこんと、ある。そのテーブルの足に、ところどころ、可愛らしいキャラクターのシールが貼られていて、実に女の子らしい。

ちなみに、僕の部屋には、テーブルなんてない。勉強机オンリーである。しかも、服やかばんは片付けずに放りっぱなしで、けつこくな散らかり具合。この部屋と比べると、少々痛く感じ、日頃の行いへの戒めになる。とかく、角田さんのお部屋は、全体的に見た感じ、綺麗に片付いていて、きちんとした人の部屋だな、との印象を受けた。これ見た僕の印象はますます好い方向へ傾いていく。ホント、ニクい人だ。

僕は、テーブル傍に座るよう言われたので、大人しく座ることにした。座布団とかはない様で、直に床へ座る。座布団のない事を、角田さんは、ごめんね、と謝ってくれたのだが、僕自身、一切気にしていない。にも関わらず、その意思を、僕は行動で示せずに、目が合うのを恐れて俯き、続けざま彼女はなにか言おうとしていたのだが、第三者の有田さんの横槍が入り、今日初の会話チャンスを逃してしまふ。くう、不甲斐ない……。

有田さんは、自分の荷物がどこにあるかを聞いていた。どうやらあるべき場所に、目的のそれが無かったらしく、いや、正確に言うと、荷物の一つが無かったようだ。そしてその荷物は、学校の研究室に置いてある、との事。しかし、今日は休みの為、研究室は閉まっている。だから、職員室へ赴き、鍵を借りなければならぬ。これは、僕が聞き耳立ててわかった会話の内容だ。僕は一切参加していない。

ふう、じゃあ僕らは職員室まで、鍵をとりに行かないといけないのか。と思いきや、僕はこの部屋で待機してなさい。そう角田さんから命ぜられた。まあ、一応？ 僕は拒否の姿勢を取ったさ。もしここで一人取り残されてしまえば、孤独と興奮の狭間で、僕がどんな行動をしてしまつか検討つかないし、不安だ。それに、誰か訪問者が現れた場合、僕はどんな対処をすればいいんだ。確実、言えること、絶対にパニックに陥る。その証拠に、こうしている今現在、頭の中が真っ白になりかけている。違うか、パニックか。もう、だ

からよ。ぶつ倒れないにしろ、これ以上は命に関わるんだ。

ま、無理でしたけどね……。

そんなこんなで、僕はブラジャーと対峙しているんだ。

二人が居たときには、全く気付きもしなかったけど、いなくなっ
てしまったら、目のやり場に困るくらい、干されてる。せめて、一
箇所固めて欲しかったもんだ。

テーブル真上で干されている、ブラジャー。略して、ブラ。黒色
である。レースがすごいセクシーである。目の前である。ちよっ
と洗剤のにおいが香る……。

……変態か、僕は？！

いま、間違いなく、僕は、鼻で深呼吸をした。

いい匂いでした。

いやいやいや、なに、何処へ報告してるんだ。つい、口走ったろ
う。いくら一人でも、言っちゃいけない。言ってもし聞かれたら
変態のレッテルを貼られ。

「いい匂いです、か？」

ええ、いい匂いでした。

「ほう……」

あ！ 有田さん！

有田さんは、テーブル側に座る僕の、すぐ真後ろで僕を見下ろし
ていた。声が聞こえ、上を向くと、どす黒い雰囲気醸しながら笑
みを浮かべている。目が合って、彼女はすぐ視線を僕からブラへ移
動させ、掴む。つまんでいる洗濯バサミから引き離すが如く真下へ
引っ張り、それその通り洗濯バサミから引き離された。

もう僕の目の前には麗しきブラは無い。

「これは、ワタシの」

……へ？

まさか。そんなはずはない。

「実はついさっきまで装着していたものだ」

装着という言葉が堅苦しさを醸すが、用は、使用済みだと。でも、そうだと僕には納得する訳にはいかない。望んでいた方向とは、まるで違うことを聞かされて納得できる訳がない。

「その顔だと、ワタシの言った事実は嘘だ、と思ってる、かい」
その通りなので頷くだけだ。

「部屋の周りを見てみる。他にも色々な下着がある」
はいあります。……あまり気付いては居なかったけど。

様々な柄と色の下着類があちらこちらにぶらさがっている。ブラだけでなく他のも、とにかく色々だ。実に興味深く、絵画展を眺めるおやじのように、一つ一つをじっくりなめ回すかのように見物したい。

「基本、すべてワタシの」

あゝこちら一太。先ほどの言葉、前言撤回前言撤回。

これらが有田さんのものだとすれば、もはや話題にしておくのも煩わしい。どうか他へと切り替える必要がある。今来ている理由は、この人のお引越しの手伝いなのだから、流れからしてもそっちを優先するべきだ。

僕は何事もなかったかのように平然とした表情で、話題の切り替えを実行した。

有田さんは、あれ？ みたいなリアクションを一瞬とりテンポを狂わせていたようだけど、そんなの、ホント一瞬であって、僕の切り替えにもうまく合わせてくる。

「……シロが研究室から取ってきてくれるみたいだから問題はない」
そういえば、どんなものは知らなかったな、聞いてみるとしよう。

で、聞けば、僕の言葉をどういう風に受け間違えたか、これまでに見たことのない程の怪しさ丸出しのニヤケ面をしだした。特に返しはしてこない、ずっとニヤケている。

あまりにも怪しいので、なんだよ、と文句つければ。
「綿100パーセントの純白ブラジャーだ」

あ、あ〜〜そういう事か。僕の切り替えも無駄な悪あがきに過ぎず、易々と僕に話を合わせたのは、結局は行き着く場所は一緒だったからか。恐るべしブラジャー地獄。

「見たいかい？」

いいえ。そう答えるしかない。

「変態」

僕の変態っぷりは角田さんに対しのみ生じるもので、あなたには一切、微塵も、1ピコもありません。

「中々凹む事を言ってくれるじゃないかい」

表情は全く変わらずで言うから、ホントにそう思っているのか疑わしい。

僕らのブラジャー対談(?)も架橋に入ったところ、角田さんが部屋に帰ってきた。

角田さん部屋のドアを開け、第一声。

「さっちゃんあったよ！ シロクマさん！」

そういつて両手に掲げていたものは、白い……ジャンボなくまのお人形。

……ちやうちゃん！！

「ん、何の話なの？」

僕の心の中で繰り出したただけのはずのツッコミは外に漏れており、それを角田さんに聞かれた僕は、ただ赤面するしかなかった……。

「きつとチャウチャウだと思ったんだ、と思う」

「え？ 似てるかな。白いけどそんなフサフサではないけどなあ。

顔は、ちよつと似てるかもだけど」

ちやうちゃん……。もう、どうでもいい……。俯くしかないよ。早く帰りたい。

・ブラジャー（後書き）

・後書き

久々ですが、これ書き始めた時から終えた時までのスパンが長く、それによりもしかすると読んでて違和感が生じたかもしれませんが……気にしないで下さい。

・ギャグ仮面(前書き)

・作者からの一言

「ヒーローは目立ってこそヒーローですな」

・ギャグ仮面

「なあ、頼みがあるんだが、聞いてくれないか」

楽しき、ほぼ一人でのお弁当タイムに、突如現れた見慣れないクラスメイトが真正面に登場してきた。しかも、初のご対面にも関わらず頼みごと。こいつは親しい奴がいないのか？

名前すら覚えていない男子高校生一人。心底関わりたくないのだが、赤の他人に失礼する度胸を兼ね備えていないので、妙な敬語口に出してしまう。

「ご頼みとは何でしょうか。」

今この口で言った言葉、うむ、気持ち悪いな。

「おいおい、変な畏まり方だな、おい」

我が発言に悔いなし。だが、見知らぬクラスメイトはお困りの様子で。頭をガシガシ掻きながら、到底ツツコミとは言えない返しをする。ボケたわけでもないのでヨシとするが、このどことなく優等生チックな男子高校生にはユーモア度は乏しいように感じる。しかし、一言で“おい”をコンビネーションで繰り出すところは侮れない。

「お前、俺の名前、わかるよな」

むっ、ムカつく。畏まり度、二段階ダウンだ。知らん、と一言返し。ナイス投げやりだ、僕。

「だろうな」

「じゃあ聞くなよ！」

「俺は磯野だ。で、早速だが頼みと言うのが」
「マイペースで話を進めようとするサザエに焦る。最初に言おうとした“ちょ”が三連発して止める。」

「ちょちょちょ、ちょっと待て磯野！ 弁当食べたのかお前！」

こっちがまだ食べてないのだから、奴も食べてないだろう。これで引き返せよ、磯野。

「ん、ああ、弁当か。後でいい」
引き返しませんでした。

「じゃあ、さつさと言うな。俺の弟にお前のバカ話をしてほしい。昨日、お前が話していたガードレールの話を話したら喜んでな、どうせ他にもレパートリーあるだろ。話してやってくれねえか」

さつさと言われた。で、わざわざ僕が話をする。どうもメンドクさい。

嫌だ。

「うるさい。じゃあ頼むぞ。俺はパンを買いに行くから、今日は頼んだぞ」

おいこらちよつとま……。行きやがった。

呼び止めも、相手がいなけりゃ単なる独り言。最後まで言わず、諦めるとした。

なんなんだ、あいつ……。

姿は見えない。どっか行った磯野。なんだ、弟に話しろ、て。ん、お、弁当まだ食べてないな。じゃあもう食べるしかないじゃないか。「ホントなんなんだろうな、あいつな」

いつから居たんだ？

全く存在に気付けなかった、名もない親友。流石の影の薄さに驚いてしまうじゃないか。

「あいつ来る前から居たわ！　つーか一太、お前、俺の話聞いてなかったのか！？」

存在すら気付いてないのに、お前の話が聞けるはずじゃないじゃないか。そう思えど、あえて口に出さないこの優しさ。広大たる海のごとし心の広さだなあ。

今日の学校の日程、すべて終了。続々と教室を出る若人たちが見えるじゃないか。では吾輩も帰らないといけないじゃないか。

「おい」

とりあえず、いつも通り、伯父の家へ行かないと行けないじゃない

いか。

「おい！ 耳ふさいでんじゃねえ！」

「ぎゃー！ 暴力はんたい！」

「ふざけんなこら、この右腕、へし折られてえのか」

この人、不良だ……。優等生な姿誤魔化しだったのか。どうりで口が悪い訳だ。

痛い痛い！ 腕を捻らないで下さい！ 誰か、お助けえ！

「あ、おい、騒ぐな！」

おお、大声出してギャラリーが出てきたぞ。ん、今走れば逃げられる気がする。

「うが！ 待て！」

あ、一瞬やわらかい感触……。窮地の中の幸せが。

「きゃー！」

「誰か、あいつ捕まえる！」

「珍しくサイボーグがキレてるぞ」

「磯野！ どうしたんだ！」

バックが騒ぎになってるけど、まあいいや。とにかく、逃げるのみだ。

はあ……。はあ……。しんど……。

足痛い、苦しい、しんどい。こりゃ日頃の運動不足が効いてますな。伯父の家に入ればこっちのものだな。うお、この扉、おも……。

「失礼します！」

どうぞどうぞ、失礼しちゃ

え？！

「お前、こんなすげえお屋敷住んでんだな」

おおお前、磯野！ 不法侵入だぞ、大罪だぞ、死刑だぞ！

「あんな鈍足で俺に敵うと思ってたのか。つくづくバカだな」

ぐあー、たまらなくムカつくけど言い返せないから悔しー！

「なあ、弟に会ってくれねえか」

いきなりほくそ笑みから真面目になった。コント気分、まだ抜けてませんけど？

「悪いな、学校であんな物言いして。あまり周りの奴らに気にされると困るからな」

いや、絶対、明日、注目の的になるかと思えますけど。

「違う。意味が違う」

意味？

「弟についてだ。俺の弟、病気でな。どうやらそれ、死ぬまで治らねえらしいんだ」

はあ。

「ここ、ここがどうやらイカれてるようで、ずっと病院暮らしだ」

ここ？ ああ、心臓ですか。心臓の病気、ですか。

「移植できりや治るようだけど、今すぐできるもんじゃねえし、医者野郎どもにも、一年も持たん、と言われた」

そ、それがバカ話とどう

「達雄を喜ばせて……楽しんでやってえ！ もう俺は一緒にいるしか能がねえし、周りの奴全員もう、あいつの前で笑う事すらしねえ！ もうお前だけが頼りだ！」

話、ぐつちやぐちやですけど。

要するに、病気の弟さんを僕が笑わせろ、と？

「そつだ！ 頼む！」

いや、物凄い勢いで頭下げられても。膝つい……土下座しちゃった！？

お、おいおい、そこまでしなくてもさ……。

「がーはっはっは！ 話は聞かせてもらった！」「おーほっほっほ！ 話は聞かせてもらいましたわ！」

痛え！ 磯野、頭突き、すね！

「わ、悪い……。つい驚いてな」

まあ、後ろから実に珍妙な格好した二人組が大声あげてそれまた珍妙なポーズを取っていたら驚くに決まってるよな。

「ああ、でもお前、驚かないのな」

慣れてますから。慣れたくなかったけどね……。前まではかたっばだけだったけど、最近は一人増えてさ。それでも適応している自分に気付いちやうと、こっちも変人なのかと思ったりさ……。

「おい、泣いてるのか？ 苦労、してるんだな」

ああ、悩みだよ……。

「悩める兄君よ、もう心配はいらないぞ！」

「私たちが弟さんを救って、あ・げ・る」

「世に沈黙ある限り！」

「笑いで人々を騒がせる！」

「我ら爆笑戦士！」

「ギャグカーめん！」

うるさい。何か叫んだあとのどっかからの、ドカーン、て音、うるさい。後、言う度のバツバツしてるマントがウザい。

「なにお！」

「それと、ギャグカーメンじゃ絶対怪物だよな」

「ち、違う！ ギャグ仮面よ！」

「うわ、ダサッ」うわ、ダサッ。

「はうっ」「はうっ」

「ギャグ仮面オスよ、私は、もう……」

「耐えよ、耐えるのじゃ。真打ちはまだこれから」

そういえば磯野、病院つてどこなんだ。

「市立病院さ。知ってっただろ？」

ああ、駅の近くだったよな、確か。

「まあ、歩いて行ける距離だな」

でも相当ひどい病気だろ。もっとデカイ病院のほうじゃなくっていいのか？

「手術するなら、デカイところになるだろうけど、今はただ安静にするだけさ。治療らしい治療はしてない。ただ死なないように薬飲ん

で寝てるだけさ」

なるほど、ね。

「しかしまあ、なんだ、ありがとな」

なんだよ、今更。

「正直、無理やりみたいいな感じで悪い気がしてな」

いいよ、別に。あんな事情聞かされちゃあなあ。

「悪い……」

だからいいっての。

「くうくいい奴だな、お前」

今更、気付くな。

「いてつ。お前、この野郎！」

はははっ。僕は一太な。磯野、下の名前なんて言うんだ？

「茂だ。つーかお前、ホントに名前知らなかったんだな」

おう！

「んな事で胸張んな！」

あははは

「ぬおおおー！」「うおおおー！」

誰が唸り声をあげてるな。

「一太、あいつらだ……。後ろ！」

え……出た！

なんであの格好のままだ？ 周りの一般市民の方々が凝視なさってるのに気付いていないのか。めっさ走ってる、確実にこっちを捉えている。関係ない人三人がビビッて逃げてる。

「行くぞ一太！」

お、おう！

・ギャグ仮面2 (前書き)

・作者からの一言

「ヒーローって何でしょっっ」

・ギャグ仮面2

「俺の弟が心臓の病気なのは話したよな」

うん。そんなでもって治る見込みナシなんだよな。

「……………ああ」

う、言い方まずかった気がする……………。

スマン。言い方マズイよな。

「いや、気にしなくていい。あ、正面入り口からじゃなくてこっちから入るぞ」

目立たん入口から行くんだな。

「ま、常連はこっちからだな」

いや、笑いながら言われても全然ジョークには聞こえんよ。常連……………。“深夜入口”と書いてある。

「おう、夜はこっちからだ。原因不明の病気でも一般病棟に移されてからは消灯まで居られるようになったんだ。暇ありや毎日でも来てるな」

まだ、笑顔が痛い。うんうんと頷くしかないか。

「ふう……………。あいつ、最近、笑わなくてな。喋る事も無くなってきてよ……………」

病気、どれくらいになるン？

「どれくらい、まあ……………かれこれ一年くらいか。もう過ぎてるか」
そんなに。

「お、一太、エレベーター、上を押ししてくれ」
あいよ。

「弟は三階だ、内科ンとこだな。階によって、色々分かれてるっばいぞ」

やっぱ詳しいな。

「はは、常連だからな」

だから笑顔が痛いって。とは思えど、そうか、と一緒に笑う僕は

なんと殺生な奴だろう。

「そうだ、ナースさんとも顔見知りだぜ。もう名前も覚えた。こ結構キレイな人多くてさ、なんか色々なタイプもいて、クールなメガネ美人とか、大人しめの奥ゆかしき美人とかな。くっくっ、たまんねえ、お、開いたな」

そう言った矢先にナースさんが待ち構えていますけど。

「あ、磯野さん、こんばんは」

「こ、こんばんは」こんばんは。

すぐく、スラツとした美人登場。青春真っ盛りの磯野くんはちよいつと緊張のご様子。エレベーター、行った。

確かに、今の人はキレイだったね。

「あの人、前田さんだな。あの方は、言わば、ザ・和風美人ナースってところだろうな」

同感。

「ここだ。303の病室。他にも人いるからこっからは静かにな」
うい。

「奥のベッド、弟は……寝てるか」

見た感じはそれほど不健康そうには見えないな。静かに寝てるだけか。点滴だけが、唯一それらしい。

「ほら、座れよ」

お、サンキュー。

座るとして、相手が寝てては何もできないな。バカ話をしにきたとの要件も、相手が寝ててはどうしようもないな。……居る意味なし。

ガタツ。

ん、磯野、どこ行くんだ？

「いや、便所」

そうか、行ってこい。

「ああ！ すいません！」

「あ、いあ、その、こちらこそスイマセン……」

「磯野さん、丁度良かった！　ご一緒されたお友達は笛吹さんという方でしょうか」

「ウスイ……？」

まだ磯野の奴、便所行つてないのか。入口、ちょっと騒がしいし、気になるな。ほんのりと野次馬衝動をわざわざ抑える必要はないな、ちら見しようか。

だ……目が合ってしまった。

磯野の相手のナースさん、残念な事にオバサンルック……。僕に熟女趣味は

「あの、笛吹さんでしょうか」

いつの間にこつちまで近づいたんだよ。威圧感、オバサン独特の迫力には対応の仕方が分からん。母とは違う威圧感。それより、この人なんとなくハムに似て

「　　どうなのでしょうか」

そうだよ、まず認めないと。

はい、笛吹ですが、何か自分に用が？

「すみませんが、至急こちらへ」

うわ、豪腕。掴まれた。

あ、あの、そんな急ぐこと何ですか？！

「はい、早くして下さい」

自分一人で痛ッ！　い、歩けますから手を離してくださいませんか。

「わかりました。では早く」

あの看護師さん、用は一体……？

「変態が病院に！」

はあ？

「だからだ、ワシの甥を呼べと言つとるだろうが！」

「そつだ、一太を呼ぶのだ戦闘員！」

「戦闘員って何だ、私は警備員だ、何度も言わせるな！　大体だな、

その格好はなんだ、君たちはふざけているのか？ 二人ともいい歳
だろう、さっさと帰れ！」

「ふざけてる？ ふざけているのは君ではないか。ヒーローの行く
先をふさぐのは悪だ。この理、世の必然たる約束」

「帰れ！」

「ぬう、押すな戦闘員！」

「ギャグ仮面メスにボディタッチ攻撃とは。なんとハレンチな！」

「うるさい、とつとと帰れ！」

「ぬうぬう……あ、一太ー！」

あ、バレた……。

あの二人、恥ずかし過ぎる。関わらない方がいい。

「なに一太だと。これ一太！ この戦闘員、なんとかせんか！」

知るか馬鹿。

あの、なんですか、あれ。看護師さん、呼んだ理由がよくわかり
ません。

「知り合いでは？」

違います。

「確かに二人が」

知りません。

・ギャグ仮面3 (前書き)

・作者からの一言

「今日は自分の誕生日なんで何か下さい」

・ギャグ仮面3

「で、君はこの人たちの知り合いなんだな
いえ違います。」

「……じゃあ関係無いのだな」
はいその通りです。

「ちよちよ待て！ 話が違うではないか！」
「押すなど言ってるだろう、この変態！」

では僕は病室へ戻るとします。友人の頼みがあるので……。

「君たちの話は警察の方が聞いてくれるからな。それまで辛抱しな
さい」

「け、警察はナシじゃろ！ 卑怯ではないか！」

「私たちが何したって言うの！」

「あーうるさい。看護婦長さん、警察への通報を」

「わかりました」

「え、ま、待て待たんか、警察は……：すいませんごめんなさい許し
てくださいだから警察は勘弁して下さい」

「じゃあ大人しく帰れ」

「……………いやじゃ」

うわ、またもがき出した。

あれ、婦長さん、それって……。

「院内の連絡用ピッチです。ナースステーションで待機中の看護師
に警察さんへの通報をお願いしようと思います」

さすがにまだ早いのでは……。

「え、そうですか」

まだ危害を加えたわけでもないですし、もう少し様子を見た方が
いいと思います。

「……………わかりました。しかし依然様子が変わるようでないならば通
報しますので」

はい、判断はそちらにおまかせします。

警察沙汰というのは勘弁極まりな

いやまだ早いです婦長さん！ まだボタンを押すのは待ってください！

……今、舌うちしたな、この人。

このままだと非常にマズイ展開になっていきそうなので、とつとと終わらせてしまおうか。

「ねえ一太。なんとかしてくれな〜い」

その格好でオネダリな言い草しても、全然魅力感じませんから。もうとりあえず素顔ぐらい出したらどう。

「吾輩はヒーローであるが故に
うるさい、とつとと取れ。」

「それだけは出来ないわ」
婦長さん、警察への通報お願いし

「あーわかった取る、取るから！」

ようやく変なお面取ったな。おいメス、しぶるな！ でもしやない取れ！ …………… これで、次は警備員さんに謝れ。

「我々は！ 何も悪いことしとらん！」 「我々は！ 何も悪いことしてない！」

二人胸張ってえらそうに言うな、その虚勢を張るな、状況わかってんのか。

「我々は！」 「我々は！」

もういいや、はい婦長さん。

「あの警察の方ですか、こちら 市民病院ですが、院内に不審者が現れまして……………」

「ああ〜！」 「ああ〜！」

動きが気持ち悪い、お前らゾンビか！

「頼む〜。警察はやめとくれ〜」

「…………はあ。ではもう（玄関口を）閉めなければならぬのでお引

き取り下さい。あなた方は病人でもケガ人でもないのなら用はないはず」

「いや、いや用ならあるぞい、その者の弟君の笑顔を取り戻す為に我々は……」

なんだ、最後まで言わないのか？ 考え込む理由がわからん、なにしようとしてるんだろう、このジジイ。

「……我々は遙々ギャグリング星から笑いに飢える惑星“地球”までやってきたその名も！」

「ワタクシ、ギャグ仮面！ メス！」

だからメスって……。

「そしてワシは、オス！」

オスメスで区切るこいつらって……。

「笑いたい子はいねえ〜かあ〜」「笑いたい子はいねえ〜かあ〜」

ベースはなまはげだな。逐一、息合ってるのが異様……。そもそも、今更だがこの二人は恥ずかしくないのだろうか。ここまで騒いだせいで野次馬が集まり、ただ事では無くなっているし、下手すれば婦長が通報する以前にこの野次馬たちの誰かが既に通報してしまっている可能性も無きにしも非ず。

(ファンファンファン……) サイレンの音？

いや、もう手遅れだったんだ……。

……ギャグ仮面二匹！ もう帰るぞ！

磯野にも断りを入れないと……。

ごめん磯野、また今度な。今日はもう日が暮れて、遅くなるとマズイし、今度、そうだ日曜にしよう！

「ん、ああ……まあ、いいけど……」

よしじゃあ二匹、逃げるぞ！

「んえ？ まだ出番が」

こっち近づいているパトカーの音聞こえないのか！ ほら早く！

「え？ ええ！ パトちゃん?!」

その言い方おかしいだろ！ 走れ、二匹！ じゃあ磯野、また明日！ 弟さんには今日の事でも話してやってくれ！
ではとつと逃走しよう、病院の人たちには完全に（ギャグ仮面の）仲間と思われたらうな……。

相当、しんどい。また、ダッシュして、今日は、よく走らされる。

「病院から大分離れたわね、ここまで走ればもう大丈夫かしら」

警察の人には、どう、説明するか。ま、二人は、間違いなく病院
出入り禁止となっている、に違いない、うん。

「私には心配無用よ、風邪、ひいたことないから」

馬鹿は風邪ひかない……。

「そんな……褒めたって何も出ないわよ」

誰かこの人を不快と思わせる言葉を教えてくれ。

「ゼゼゼツ、ゼゼゼツ、ゼーハー」

ふつーにクタバレよ、じじい。変なリズム刻むバテ方しないでくれ。

「……へへっ、な、泣ける事……ぜえ……言うじゃ」

言うてねえよ！

「さすがね、オス……」

そこ！ 褒めるな！

果てしなくややこしくメンドくさいやり取りをこなしつつ、伯父の家まで歩いたせいで、更に体力は削がれ、一刻も早く帰りたい気分。

「そんなつれない事言わないで、まだ今日はお話してないじゃない
その言葉、白雪さんだったらどれほど幸福な事か。

「どうも〜白雪っです！」

両手ピース！ ガニマタで片足立ち！

白雪さんはそんなことしねーっつーの！

「え？ 去年の忘年会してたわよ」

え……。

「うつそーん！」

おサルのポーズ！

こ、この野郎、いい加減にしろ！

「いいじゃない、これでトントンよ。私たちがポーズを決める前に勝手にどこかへ行ってしまっし、居なくなったの気付いて急いで後を追ったらずに猛スピードで走りだすし、ようやく病院に着いたと思つた途端にシヨツカーに邪魔される。一太が待つててくれさえすれば私たちは弟君を救えたに決まつてるのに……」

……僕のせいか？

「そうよ。ヒーローの登場シーンを最後まで待つなんてお決まりじゃない。どんな悪役でも絶対に守る約束事なのに、信じられない。いいえ、シンジラレナーイ」

片言に言い直す理由を一々追求する気もないけど、あの場面に最後まで待つてあげようと思う一般市民はそうそういないんじゃないかな。日も暮れてきて、すぐにでも病院に向かわなければならなかったし、あのまま二人を待つてたら多分病院にも着いてない気がしたし。

「そんなの、夜中に忍び込めばいいじゃない」

無茶言っつなつての！ 迷惑極まりない！ 大体あの時は軽く話して帰るつもりだったんだ。あんたらに付き合つてたら夜が明ける危険がある！

「……うゝん？ 問題ある？」

大有りだ！ 明日も学校だ！

「ワカラナイイ」

あゝもういい！ ……少し話変わるけど、あれ、前々から用意してたのか？

「……あれ？」

ギャグ仮面。

「それはトップシークレットよ、ワタシがどんな経緯でヒーローに

なったのか、一般市民に教えるわけにはいかないの、ゴメンね」

あつそ。それよりもう、さつさと着替えれば有田さん。僕、家に帰りたいし。着替えているうちに帰るよ。

「ななな、なぜ私の正体を！」

そんな壮絶な顔をされても、正体も何もずいぶん前に仮面取つてるし。それ以前に、こんな常軌を逸した行動格好をするバカ二人は、この日本には伯父と有田さんの二人しかいない事を知っている。

「なんて推理力！ 正体が……こうなつたら仕方がない、一太君、君もワタシと一緒にギャグ仮面を」

しねーよ！！

ああ、さつさと帰ろう。

「待ってくれ！ 君なら必ず」

もう外に出れた、この扉を閉めれば……。

(ボタン！)

……明日の朝刊、読むのが怖い。僕も同罪にされる不安と、僕も変質者にされる不安が……。

今日ほど、平凡な生活が恋しくなる日はないな。

そうボヤいても、僕を、珍妙な日々から救済してくれる本物のヒーローは現れてくれなかった。

・GW(前書き)

・作者からのひとつとう
「皆様への注意とお受け取りを」

・GW

四月から五月へとマタにかけて巡る長期休暇、俗にいうゴールデンウィーク、略してGW。

本来ならばゴールデンウィークに起こる出来事でも話すのが筋であるのだろうけど、正直に言おう、もう終わった。何もない、単に休みが連続しただけだった。

予定が無くとも、いやいや伯父の家に行ったりしてバカ話を右から左に受け流したりして時間を強引に埋めればそれなりの事象でも起こりえたのかもしれない。しかし、僕の現実は名もなき親友に借りたゲームのハード＋ソフト（RPG）を借りてしまったのだから仕方がない。ほぼ家に引きこもる生活であった。

客観的にみたらあまりに寂し過ぎるゴールデンウィークを送った僕は、晴れてまた学校を通う日常へと戻った。休日中は誰とも逢っていない、だいたい一週間ぶりだ。とりあえず、見慣れた人には「久しぶり、GW何してた？」なんて目論む次第である。

教室。僕が来る前から、僕の席の前の席の椅子に座る名もなき親友。教室に入った早々目が合い、よお！ なんて声を掛ける。こうされちゃあ仕方ないので、僕は手を挙げて親友に返す。

「久しぶりだな、ゴールデンウィークなにしてた？」

早速言おうとしたセリフを言われ、妙な敗北感を味合わされたが、めげず、休日中の出来事全てを一行で答えた。

「ずっとゲームか、どっか旅行とか行かなかったのか」

「いいや、行ってない。まず、旅行と言う単語すらGWでは聞いたことが無い。」

「くあく寂しいなお前」。もうちっと何かあるだろ？ 話終わっちゃまうじゃねえか」

もしあったのならこつちが教えてほしいくらいで、話せるとすればゲームの内容くらいだ。

「ゲームの話で……それ俺が仮したヤツじゃんか」

聞きたいか？ そうだなまず。

「いや話すな、俺はそれ三回全クリしたから」

そうか、じゃあお前はとうだった。GW。

「ゴールデンウィークをGWなんて言うのお前だけだぞ」

KYと同じ要領だろ？ おかしい事は何も無いじゃないか。

「……ツッコんだ俺が悪かった」

じゃあどうだったGW。で、こつち聞いてやって話を続けようとしてるのに、そう睨むなよ。

「……旅行くらいは行ったぞ。熱海にな」

やけに渋いポイントをつくな。

「なんだよ、悪いか」

別に悪いとは言っていないさ。渋い、と言っただけだ。

「お前な、熱海なめんなよ。マジすげえんだぞ」

知らんよ。

「熱海の凄いところって？」

「そうだな……、まず駅について早々に驚いたな。お前あれだ、なんつーの、山が目の前にあるんだけどホテルホテルホテルなんだよ」

……はあ？

「山にホテルがたくさんという事？」

「そうなんだよ、それがすっげー迫力……いや迫力はそんなんだけど、

まあ、俺はいつたいたいどんなだけ泊まれるんだよ、って思ったな」

「熱海だと、湯煙が凄いわね」

「そうそうそう！ そこらじゅうから出まくってたな！ これぞ、

ザ・温泉街と呼ぶにふさわしい光景がズドンっつと！」

「駅を出て目の当りにしたって訳ね」

「そうなんだよ。でさ、ホテルまでタクシーで行くんだけど」

……物凄くスムーズに一人話に加入しているけど、この人、誰だ？

名もなき親友はごく自然かつ気分よく熱海話をこの詳細不明の方に喋っているが、誰だ？

このクラスに、横綱はいないはずだ。

「坂ばつかでよ、ちよつとジェットコースターみたいで……よ……んん？ ……お前誰だー！」

僕からすれば時間差ツツコミでそれをツツコミたい気分ではあるが、そんな重要ではないので置いておき、まず、これ誰なんだという事だ。

「おい一太！ これなんなんだ、何で出来ているんだ？！」

いやおかしいぞおい！ 脂肪だと思うが、聞くべきところはそこじゃない！ まず、これ何モンなのかを聞くべきだ！

「何？ 二人とも私の顔を忘れたってのかい？ 休みボケボケだな〜！ あつはつは！！」

今のどこで笑えたんだ、つくづく変だろ、この人、いだッ！！

笑いながら僕の背中に張り手をする、強烈すぎて口からなんかが出そうになった。

「あつはつは、よ〜しそんな休みボケ真っ只中の二人に改めて紹介してやるう。この私こそ何を隠そう有田サチだ。二度と忘れるんじゃないぞ〜」

「……へ。有田って言ったか、今」

「何、聞こえないだと。よーしわかった、もう一回言つてや」

いやわかった！ 充分にわかった。それより、一つ質問がある。

「何かい、言ってみそ」

（みそて……）あの、女性にこの事聞くのは失礼極まりないかもしれないですけど……、ただ今、体重何キロほどで……。

「体重？ 49（キロ）よ」

「嘘付け！ 嘘付け！」

見事に名もなき親友とシンクロしたのもわかる。十人中十人は疑

問を抱く。見た目、間違いなくだ、この、体重63キロの僕よりはるかに凄みのある体格をしてらっしゃる以上、中身が空気で出来ていないはずなので、49（キロ）と言った返答はすいぶんと違うであらう。

「あ、先生来たから戻るわ」

横綱な有田さんが席へ戻る為に歩き出した一歩、気持ちなんとなく地響きがしたような気がした。

「ん、机と机、ここ狭すぎない？」

いや、狭くないです。あんたがデカいんです。

「性格はどうあれ、元の有田は割と美少女キャラだったのにな。アレじゃあもう救いようないな」

名もなき親友が横目で見てそう言い、僕はただ苦笑いで受け流すしかなかった。

・トマト(前書き)

・作者からの一言

「トマトは潰してナンボ」

・トマト

唐突に思わせてもらおう、僕はトマトが苦手だ。プチもダメだ。ケチャップ、ミートソースならば気にせず口に入れられるが、生はどうしても許せない。イライラする。

僕が小さかった頃、名もなき友人と共に、（ガキたちの）宿敵であったジジイの飼い犬にいざイタズラせんと、討伐に向かった。飼い犬はジジイと違い、全く凶暴でなくむしろ人懐っこい。悠々とイタズラ、眉毛を書き、体にはジジイに向けてのメッセージ（ハゲ）を、まるで塗りつぶそうがごとくデカデカと書いてやった。までは良かったが、終わった丁度、ジジイに見つかりあっさりと捕まってしまう。ちなみにジジイは、伯父とはまた別のジジイだ。

歳の割に俊敏なジジイは僕と名もなき親友に、飼い犬にイタズラした罰を受けることになった。壮絶だった。口にトマトをねじ込み、そしてトマトを口にねじ込み、時にはプチトマトをねじ込み、トドメにはトマトを口にねじ込むという、なんともワンパターンで飽きが来るような罰を食らった。飽きが来るとはいつたが、別に望んでないから飽きるとかどうとか関係ないワケだが、このこと以来、僕の脳の中身も全身丸々もトマトへの拒絶反応を見せるようになった。

しかし、名もなき親友は全く逆で、嫌いだったトマトが食べられるようになった、といつぞや話していたのはどうも納得いかなかった。で。

「トマト克服……んなもんは必要いらん！」と腕を組み真顔で叫ぶ伯父がいる。

どうやら伯父もトマトが嫌いらしい、いやなに今回は僕が話を振ったんじゃない。伯父の家にどこぞの農家から段ボール三箱分となる大量のトマトが送られてきて、有田さんが「博士、折角トマトが

どえりやーてんこもりですから、今日のお晩はトマト尽くしにしましよう」と伯父に提案した。伯父は、大大反対をした。僕も、伯父と立場入れ替わったとしても全くもって同じ意見を口走るだろうから人のこと言えないが、なんとも大人げない限りだ。別に思うだけなら問題ないからいいのだが。

困った有田さんは、無駄に大量のトマトを僕が貰ってくれないかと頼んできた。もう先に言った通りに、僕も屈指のトマト嫌いであるから申し訳ないが断り、有田さんはもう一度伯父にトマト料理を作ると言えば、伯父はまたも叫んで否定する。

送った相手は善意なのだろうが、トマト嫌いにトマトを送るなんてことは、嫌がらせの他ない。ましてや知ったうえで送れば、頑張れば法律で裁ける気がする。なんにせよ、もうでかい段ボール満杯に入ったトマト×3を処理しないといけないので、伯父と有田さんはどう処分するかは見ものだ。ひとこと謝罪を入れ送った相手に返却する、というのも手だが、この二人がそんなチャチな考え脳みその片っ端にも存在してないであろうから、この先どうするかは非常に期待したい。

トマトを食べ物だ。食べるのが一番無難だがその選択はもうない。二人は討論する。

「しかし博士、食べれないとなるとどうしようもない事この上ないです。どうにかして、このトマトの山を有効利用する手はないのでしょうか」

「ない、任す」

早速、考慮すら放棄するこのジジイ、もはや考える気もないらしい。

「あ、そうだ博士、ケチャップは大丈夫ですよ。瓶詰にすれば保存も効きますからね。万々歳ですね」

「ケチャップ、ワシ、ムリン」

ムリンて何だ、無理と言えよ。いくらふざけたいからとカタカナでまとめ様とするのは、まず笑うより相手を腹立たせるだけにしか

出来ないぞ。

有田さんは段ボールからトマトを一つ取り出した。その姿は赤くブツクリとしている。トマト好きの方々が見るならば「美味しそう」と感想を持つところであろう。

「ほら美味しそう」

普通に言っただな、有田さん。どうやら太っぺからの彼女はまともな思考回路を持ち始めているのかもしれない。

「ここの美味しそうだと、トマトですね！」

そうですねトマトです、その通りです。前付けの意味まるでなくトマトです。忌々しいくらいトマトトマトです。

「トマト祭りしましょう！」ホワイ？　と言葉浮かんだが、トマト祭り……。

この言葉にヨーロッパのどっかにあつたような気がするトマトをぶつけるまくるお祭りを思い出した。街中がトマト一色に染まり人も同じく染まり、あの画は地獄にすら思える不気味なものだった。しかも赤いのは血ではなくトマトなのだから地獄よりも恐ろしい。何が楽しいかさっぱりわからない、ヨーロッパ人はもち投げだけで我慢できなかったのだろうか。もち投げでもそれなりの地獄絵図を期待できるだろうに。根本から覆すような意見は受け付けない、ヨーロッパにもち投げはないなんて、今の話がどうでも良くなるような身もふたもない言葉は一切しらない。ヨーロッパにもち投げがないなんて、実際あるかないか問題ではなく、ヨーロッパにもち投げがあると思える心を僕は大切にしたいんだ。

さあここからもち投げについて追及しようとするれば、伯父が「トマト祭りすれば野菜を粗末にするなどどこからともなく奥様方が押し寄せてきて説教地獄を発生させる可能性と、トマト口に入るの嫌なので却下」と否定らしき発言する。奥様方が押し寄せる可能性が気になるが、きつとどうでもいい。後半ラストが本音だろう。

トマト祭りすら却下となれば、有田さんの手はもうないはずだ。やはり返品が手堅いところか

ブブブブブ！ と突如鳴り響く歪な擬音。出所不明な上に下品な音の響き、見事すぎる程流れバツサリいった。「おーおーどなたさんかな」と伯父が実にスムーズな反応を、どうやらお客が知らせるブザー。誰かが門の前に居るってな。

伯父が玄関の扉を開け、向こうに居るであろうお客を確認する。

「おーおーよく来たのう、トマト貰ってくれ」と二言目にそれかい。押し付けトマトして実にゆるい手招きを外にした後に、お客も中へ入りそして扉閉まる。お客様は角田白花さん。清楚で可憐かつ快活なところも魅力の素晴らしき女性なお方、白花さまである。言い直したのは気にしない。

彼女を白花さまと呼びたいところだけど、今はまだ知り合い程度の中であり、やむなく角田さんと呼ぶ。非常な残念だが……その角田さんは何しに伯父の家に来たかは、以前と同様にレポートの提出のためであった。伯父の押し付けを慣れた扱いで華麗に避け、「少し早いですけど、これ、レポートです」と無駄な動きなくA4サイズの紙束を伯父に差し出した。

「ふむ、ご苦労じゃったな」と労う伯父。奪い取り、どんな内容のものか読んでみたいけど、今はその時じゃないので我慢しよう。伯父は受け取ったレポートをさらーっと読みつつ奥の通路へ歩いていく。その流れで伯父は研究室へと入っていった。

伯父は消えたので、また角田さんに目をやると、どうやら有田さんを観察している様だ。表情は驚いて風に見えた。「さっちゃん」と角田さんは声をかける。「ん？」としりとり風に返事する有田さんは首を傾げていた。かわいくない。会話に入るかなと僕が余裕で三回口走れそうな間が空いて「……大きくなった？」と角田さんは尋ねた。全然変化してない変化球だ。太った？ と直接言わないところ気をまわしているみたいだけど、これはこれで中々のダメージが見込める言葉つかい。まあ、相手が有田さんなので「ええけつこう……そうですね」と二つ返事で返し、動揺も何も見られないから、全く心配いらぬ。デブ、と罵るうが、まあね、と返しそうだなあ。

ここから女性二人の会話、僕はただ間近で聞くだけ。

「ところで、二人はさっきまで何してたのかな？」角田さんの問いに僕も対象に入ってるようだが、あえて有田さんに任せましょう。有田さんは一度僕に目を向けて伯父の研究室に目をやる。で、人差し指で頭のとっぺんをかく。「ん、トマト論争」その答えは、今までここに居なかつた人にはわかりにくすぎる。当然角田さんはわからなく、「トマト論争？」と首を傾げるもんだから、結局僕が今までの全容を話すとした。

話し終え、角田さんは天使の微笑みを浮かべながら「面白いな、相変わらず」と満足そうだ。うまく話せたようである、僕も満足だ。角田さんはトマト盛りだくさんの段ボールへ、トマトを一つ取り出しかじった。そして「へえ、おいし」なんて言う。理解できないが、もはや神の領域に達している角田さんの味覚ならあらゆるもの全てがおいしいに違いない。

「これ、もらってもいいんだよね」どうやら角田さんがこの大量のトマトをもらってくれるらしい。有田さんはとうぜん了承のうなずきをする。その直後に「君はいらなの？」と僕を見る。残念ながらトマト嫌いであるので、そのままそう伝えると、「まあ！」となんともミュージカルな返しが、なぜか二人からかえってきた。「博士が食べてくれないのならば一太にすべて流し込もうと考えていたのに、流し込む方法三つは浮かんでいたぞ」やめてくれ有田さん、そんなことしたら僕はもうこの世にはいない。「そっか、じゃあ全部とはいかないけど、半分くらい頂くね」なんか怖いので全部もらつてほしいけども。「うん……じゃあ、よし、今から食べよう！」

・トマト2(前書き)

作者からの一言

「大喜利のしすぎで文章書く感覚忘れてしまった」

僕の指先が刻むリズムに何の意味もない。ただ何することもなく、役割も求めたところで大してなんも出来やしなことも重々承知だったりする。ただこうして、一人で待つのみ。

角田さんは、自分が作る、と言った。それは嬉しい。しかし、有田さんが手伝う。それは、嫌だ。角田さんみたいな聡明な女性が僕のために料理を作るのは非常に喜ばしいが、有田さんのような珍獣（まあ本人聞いてないからよし）にはどうしても嫌悪感が生じる。いやだろ、今までに有田さんには茶しか出してもらったことがない。あの頃の僕は何にも知らない純真な少年として痩せてた頃の有田さんと接して、まあ、嫌な思いはせず、いや、正直ちよつと嬉しいなんて思っただのは否定しんよ。でもね、あの頃とはもう違う。見た目は綺麗とはとても言えない状況、醜悪なんて言葉が似合う。中身は中身で醜悪なんて生易しいもんじゃない。あれは少なくとも、僕にとっては悪の権化でしかない。あの人がいれば、僕に良いことは一つもなかった。角田さんのおかげでなんとか相殺される。そんなものだ。

こうして一人で思い耽っている間でも時間は流れる。隣のキッチンでは一人と一匹の和やかな会話聞こえるものだ。

「その醤油取って」角田さんの声だな。

「どうん！」と有田さんが鳴き声発したとほぼ同時に、どん！と何か叩くような物音がした。多分、でかい醤油を思いっきり台所に置いたもしくは叩きつけたのであろう。やはりふざけている様だ。

「なんかテンション高いねサッチャン」

「いつもと一緒」

「ん〜でもなんとなく無理やり感あるようなのは気のせいかな？」

「どうん！」「わっ！」

ああ、またふざけている。角田さんが無事に帰ってくる事を祈ろう。

少し遡ろう、つまり思い返そう。

「よし、今から食べよう！」と角田さんが大声で言い、ちよつとした抵抗のつもりの「え」という一文字で反応してみた。だけど話はどんどん進む。角田さんが自ら作るとの意思表示とすれば、それに乗じて「おもしろそう」と有田さんも乗り気となる。僕からしてみれば、とても厄介な状況であるのは違いはないと思えた。こうなればもう逃げるしかないと考え、トマトをいかにして食べさせようかと思案に夢中になつてゐる時に、息をひそめて存在感消して屋敷から抜け出そうと試みた。

外へは案外簡単に抜け出せた。玄関の扉から門までのちよつと道を歩いて、中から覗いた程度では見つからない場所まで抜け出せればもう逃走成功も同然なのだが、この順調な状況に到底考慮しえない事象を目の当たりにしてしまった。

ジョニーがいた。門の前にいた。ジョニーとは、以前に伯父が宇宙人どうたらこうたらと紹介した後、結局は正体が宇宙人タイツを着ていただけのチンパンジーである。つまりは只のチンパンジーだ。わかるか、僕が逃げ出さなきゃいけないほどの危機的状況にどう見ても不安定要素のジョニーがいる。良い事が起こるはずがない。こいつがうまく僕を逃がしてくれると？ あり得ない。少なくとも味方ではない。

置物のように、壁を眺めているジョニー。僕も同じ場所を見ている。何もなかった。

意味不明だけど、ジョニーが僕に気付いていないのは実に好都合だ。今のうちにそそくさ〜と門を抜け出してしまえばいい。

忍び足、プロの忍者からすれば僕の忍び足なんて「お前そんなで忍び足つつつてんじゃねえぞこらあ！」と一喝されるのは間違いないが、僕が忍び足と言つてんだから忍び足だ。つま先立ちのまま

物音立てないように歩く。

もう目前にまでジョニーは居るのだがまだ気づいてはいない。彼の背後につき、門扉をいざ開けようとすれば。

まあ、やっちゃまったね。

鉄製の門の十分な錆具合は少し動かしただけでキーンと音が鳴る。

やあ、ジョニー。久しぶりだね。

ジョニーと目が合い、僕は挨拶した。

奴は鼻をほじっている。どうやらそれほど僕に興味はないらしい。そりゃ好都合、と僕はもう何事もなかったかのように平然と帰ろうとした、ら。バシッと僕の右手首を掴まれた。鼻くそほじった方の手で。

ん？

何が起きていたかは気づいていたが、なんだろう感を出すための声が出てしまった。その声を出すと同時にジョニーに顔を向けたら、こいつ、笑っていた。内から体温が急上昇するのを感じたけどぐつとこらえ、引っ張って離そうと試みる。離れない。そりゃジョニーが掴んだ手を開かないのだから離れないさ。

持ち上げる。奴は足を浮かせてぶら下がる。宙ぶらりん、楽しんでやがる……。

どうも離れる気がないジョニーを一旦降ろし、今度は説得を試みる。奴と顔の高さを合わせるため僕はしゃがみ、語りかける。

あんな、僕は今から帰るところだからな、その手を離してくれ。

いや、だから離すんだって。いや力加えるじゃなくてね。ほら離して。

痛い。ギユウッと掴まれ痛みを感じる。このままだとシャレにならないので空いている左手で引きはなそうとすれば更に力を加えられて更に痛い。悪化する一方じゃないか、その内手がちぎれるんじゃないか、本気でそう思える。

「ジョニー。そいつ連れてきて」

ああ……。声は屋敷の中から聞こえた。

・トマト2 (後書き)

後半すいません。後半と呼ぶほど長々無いのにもごめんなさい。感が戻りません。ピンチです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6566h/>

プリン体の秘密

2011年9月26日03時11分発行